

平林初之輔著

無産階級の文化

東京 早稻田泰文社發行

20

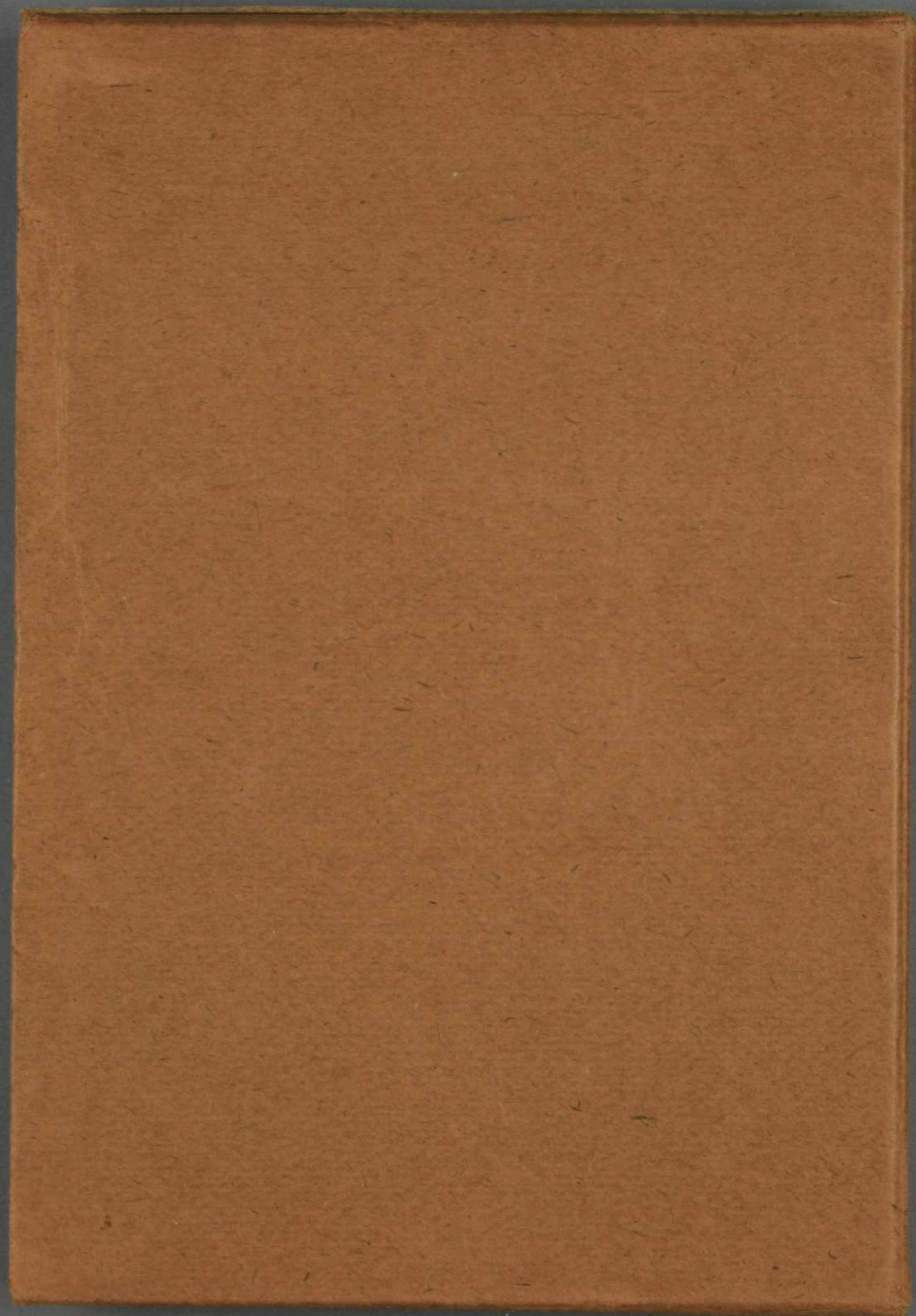
15

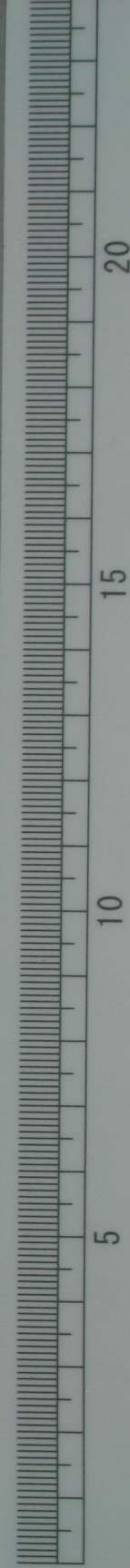
10

5

無産階級の文化

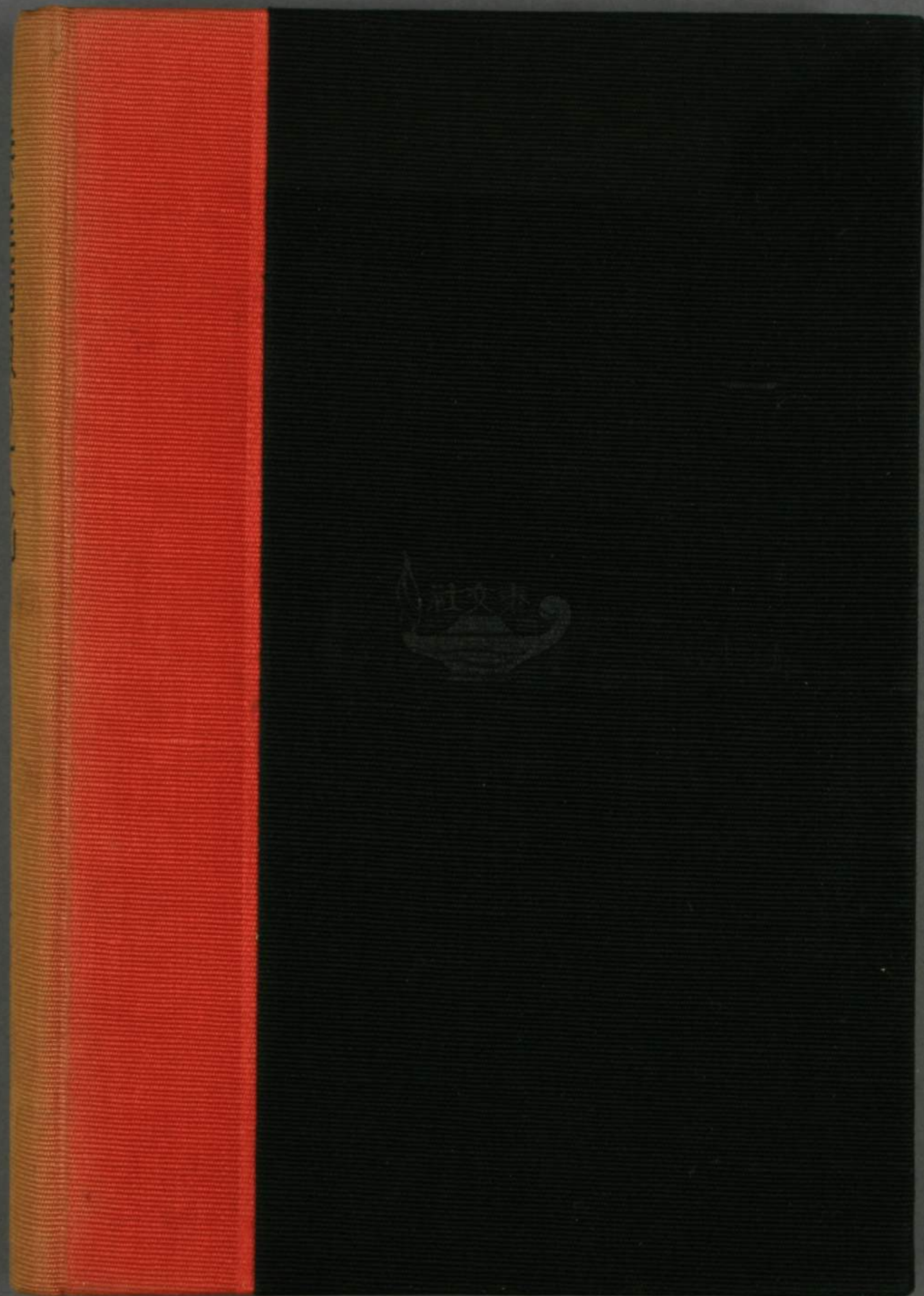
平林初之輔著

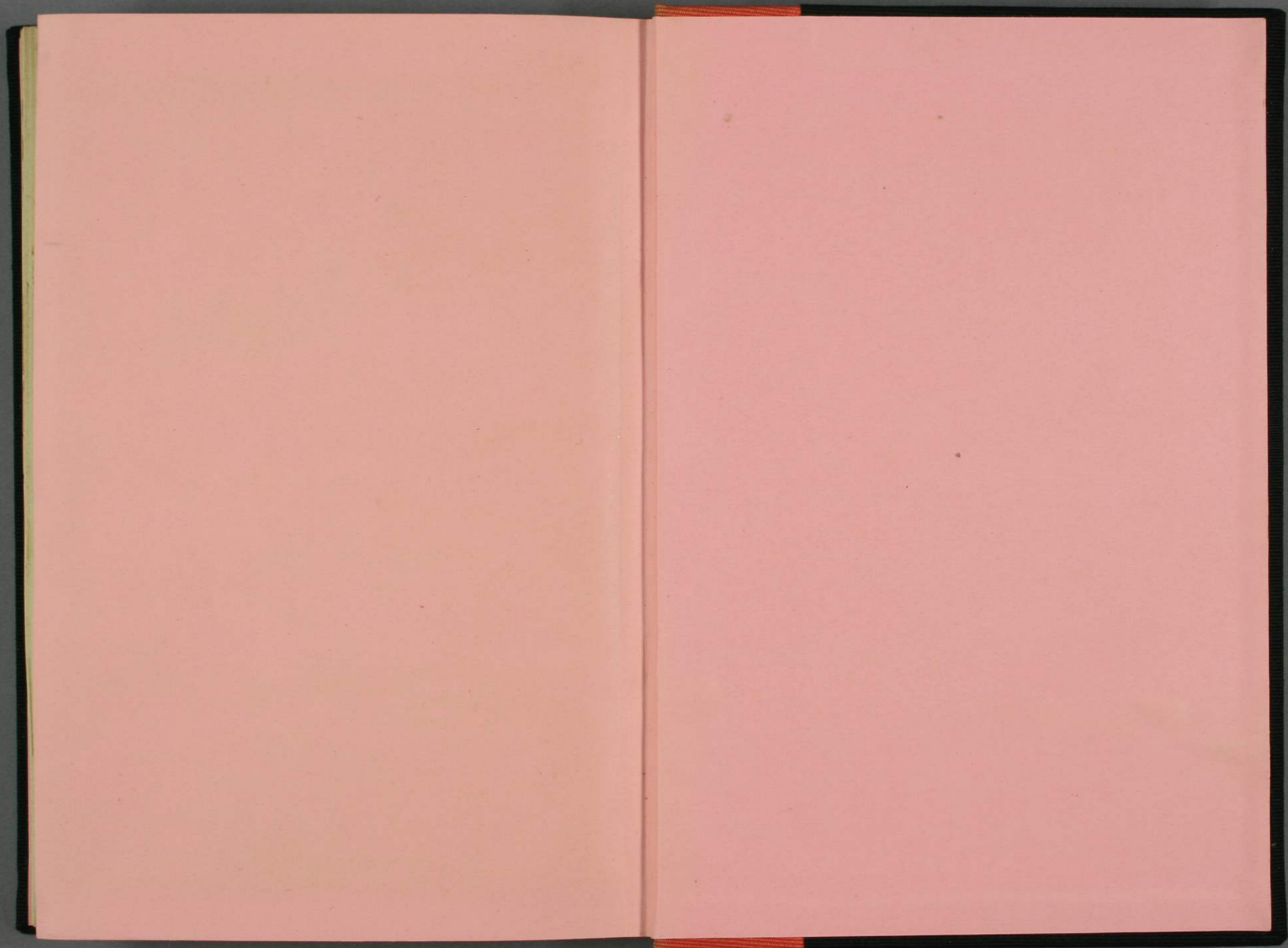




無産階級の文化

平林初之輔著





平林初之輔著

無産階級の文化

早稻田
泰文社
發行

著者より讀者へ

其筋の注意により序文は全部抹殺されました。本文でも處々に空處のあるのは序文と運命を共にした箇所であります。ことに巻頭の「無産階級の獨立文化へ」と巻末の「青年會の社會的任務」との二篇は最もひどく抹殺されて全く聯絡の絶たれた箇所もあります。著者は此の不體裁を深く讀者諸君にお詫びします。

序

本書に収録した二十篇の小論文の大部分は大正十年と十一年との間に雑誌及び新聞へ発表したもので、大分訂正を加へたものもあるが、訂正する暇のなかつたものもある。標題を變へたものも二三ある。個人に對する言議は今日では全然興味がなくなつてゐるものがあるのみならず單獨に理解することができなくなつてゐるものもあるからさういふ部分は已むを得ないものゝ外は大抵省略した。私はこれを通讀して、今更私自身がブルジョア觀念の支配から脱しきつてゐないことを認めざるを得ぬ。特に執筆の日附の古いものほどそれが多い。自分の過去を顧みて、現在自分がそれと闘ひつゝある小ブルジョア的思想の殘滓を發見することは可なり不愉快である。併しブルジョアの支配の下に育つた吾々の大部分にとつてはそれは免れがたいことでもある。私はそれ等をも一まとめにして讀者の批判のためにさらけ出すことにした。附録は勞農

ロシアの文化に關して外國人の書いたものゝ二三を翻譯又は抄譯したものである。無産階級の文化は三人や五人の手で完成さるべきものではない。それは無産階級の獨立文化の必要を感じる全國の無産者の協力にのみ期待できる。私の解釋、私の主張、私の説明は不完全でもあり、誤つてゐるかも知れぬ。私はこれに對する批評、是正並びに督勵を期待しつゝ全國の兄弟姉妹にこの書を寄せる。

一九二二年秋

著者

無産階級の文化目次

前篇

無産階級の立場から見た藝術及文化問題

一、無産階級の獨立文化へ……………	三
二、民衆藝術の理論と實際……………	一七
三、無産階級の藝術……………	四三
四、第四階級の文學……………	五五
五、唯物史觀と文學……………	六九
六、死の文學から生の文學へ……………	八三
七、ジャアナリズムと文學……………	一〇一
八、ブルジョア文化主義者に與ふ……………	一〇九
九、武者小路實篤氏の非戰思想……………	一二五
一〇、ソレルの階級文化論……………	一三五

後篇 無産階級の立場から見た政治及社會問題

一、政府、議會及び民衆……………二八一

二、ラッセルと社會主義革命……………一九二

三、カウツキーを駁す……………二二七

四、文藝運動と労働運動(附中西氏に答ふ)……………二二七

五、無産階級と都市問題……………三三九

六、社會思潮の新傾向……………二四九

七、婦人運動の目標……………二六三

八、無産婦人の運動へ……………二七五

九、婦人の享樂的傾向に就いて……………二八五

一〇、青年會の社會的任務……………二九九

附録 勞農ロシヤの文化 (翻譯)

一、勞農ロシヤのオペラ(アーサー・ランソム)……………三二五

二、ロシヤ文學と革命(オーネイル)……………三三三

三、勞農ロシヤの教育事業(ルナチャルスキー)……………三三九

四、労働者の自主教育(ルナチャルスキー)……………三三三

目次終り

無産階級の立場から見た
藝術及文化問題

目

次

無産階級の獨立文化へ

今日の社會では無産階級は資本家の生産機關をとほして生産に従ふ以外には何一つ生産することができぬと同じやうに、資本家の文化機關をへなければ何一つ學ぶことができぬ状態にある。それは無産階級が自己の生産機關をもつてゐないと同様に自己の文化機關をもつてゐないからである。

『そんなことはない、吾々は眞理と虚偽とを見別ける理性をもつてゐる、理性をもつてゐる以上、資本家が如何に眞理を虚偽とし虚偽を眞理としやうとしてもそれは不可

能だ』と主張する人があるかも知れぬ。かういふ人々に對しては事實を指摘する以外に説明の道はない。

人を殺すといふことは勿論悪いことである。これは何人も疑ふべからざる眞理である。と吾々は考へてゐる。ところで此の眞理が今日の社會で絶對の意味をもつてゐるかといふと仲々さうでない。國と國との戦争の場合には人を殺すことが獎勵され、賞讃されてゐる。そこで人を殺してはいけないといふやうな最も單純な、殆んど自明の理といつても差支へないやうな眞理にまさへも今日の社會では、『但し戦争の場合は此の限りにあらず』といふ例外が設けられてゐるのである。又アフリカや南洋の蕃人を殺すことも今日の社會では一向悪いことだと思はれてゐないのみならず、組織的に蕃人征伐が行はれてゐる。昔は戦争や蕃人征伐に限らず、外國人を殺すことは一向差支へなかつた時代もあつた。主君の仇を殺すことがほめられた時代もあつた。百姓町民は切り捨て御免の時代もあつた。その時代に比べると今日の社會は大變進歩してゐる。

資本主義社會の秩序は封建社會の秩序に比べると此の點では餘程安全な秩序である。併しよく考へて見ると人類全體が安全なわけではない。以前に支配階級であつた貴族にとつては封建社會の方がずっと安全であつた。ブルジョア社會に於ては個人の自由活動、自由競争が神聖視されるから、貴族でも遠慮なしに貧乏につき落される。又法律の平等が重んぜられるから、貴族でも平民と同じやうに法律の適用を受ける。これは貴族にとつては封建時代よりもずっと不自由である。

次に今一つ例をあげると嘘をつくのは悪いといふことは疑ふべからざる道徳的眞理だと見做されてゐる。ところが階級社會では約束を破棄したり、友人や同志を賣つたりすることが却つて賞讃される場合がある。たとへば或る工場で被用人が結束して同盟罷業をする。すると雇主はこれに對して切り崩し運動をおこす。その時に仲間を賣つて罷工破りをすれば資本家はその職工を模範職工として優待するといふやうなことがある。

最後にもう一つ具體的な例をあげると知識の應用、普及といふことは社會進化のためには必要である。殊に資本主義社會は科學によりて生れたといつてもいゝ位であるから、科學の應用といふことは最も重んぜられる。ところがこゝに或る便利な機械が發明されると、なるべくこれを廣く擴めたらよかりさうなものであるのに、今日の社會では發明者に特許權といふものが與へられて、一定期間その機械が一般に普及されることが非常に妨げられる。

その他資本家社會に於ける大抵の現象をとつて考へて見ても、必らずそこでは眞理が分裂し、矛盾し、衝突しあつてゐることを發見する。自由競争、賣買の自由を神聖視しながら、それが資本主義社會の存立を脅かすやうになると國家が干涉をはじめ本來からいふと資本主義社會では買ひ占めをしやうと賣り惜みをしやうと一向差し支へないわけであるのに、或る場合には暴利取締といふやうなことをやる。資本家的生

産の動力が利潤である以上、自由競争で『暴利』を貪つたところで悪いといふ理屈はない筈であるのに、今日の社會ではこの『神聖』な自由競争が同時に『惡徳』となつてゐる。かくの如き矛盾、撞着、衝突は階級社會の文化に必然のつきものである。この矛盾はその社會の進化と比例して益々顯著になる。

併しながら資本主義文化の中には新しい文化の發生に必要な準備がつけられつゝある。資本主義社會に於ては生産の唯一の目的は利潤の獲得である。ところがこの唯一の目的を達するためにはプロレタリアの能率をあげなければならぬ。その爲にはプロレタリアに知識を與へる必要がある。民は頼らしむべし、知らしむべからずといふ風な封建社會の原則は資本家社會にはあてはまらない。そこで、資本主義の國家では國

民教育といふものが重んぜられる。教育は理性を發達させる。少數の無産者は遂に支配階級のませものを排しのけ、資本家の與へんとする偏見から脱して、資本主義社會の真相をはつきりと理解する。

資本主義社會は今では爛熟期に達してゐる。そして從來の歴史に現れた諸々の社會形態の爛熟期にさうであつたやうに、今日の資本主義社會も爛熟期の諸特徴を到る處に示してゐる。不安、焦燥、腐敗、解體は資本主義文化の根幹を蝕ばんでゐる。

文化の機關をもつてをらぬ無産階級が、その獨立の文化を樹立するには如何にすべ

きであるか。

一八七五年五月のドイツ労働黨のゴータ大會の綱領草案では此の問題に對して次の如く規定してある。

『B、ドイツ労働黨は國家の知識的及び道德的基礎として次の諸件を要求する。

一、國家による一般的、平等的人民教育。義務教育。無料教育』

この場合問題となつてゐる國家はドイツといふ國家である。それは官僚的、軍國主義のブルジョア國家である。ラサルレ派は此のブルジョア國家を人民の教育者たらしめることを『社會黨』の『綱領』としたのである。それはプロレタリアの頭にブルジョアの偏見を詰めこまうとする企てに外ならぬ。ブルジョア國家をブルジョア階級の執行機關と見たマルクスにとつては労働階級はブルジョアに教育される代りに、その反對に労働階級の教育からブルジョアの勢力を驅逐することが必要であつた。

資本家社會から無産者社會に移る前期と後期とに於ける無産階級教育の變化、受動的から能動的への變化は、マルクスの『ゴータ綱領批評』とロシヤ共産黨綱領とを比較すると明瞭にわかる。前者に於てはプロレタリアは國家の勢力をできるだけ教育から排除せねばならぬのであるが、後者に於ては『共産主義思想の宣傳を援助する爲めに國家は一切の機關を使用せねばならぬ』のである。それは國家が資本家の國家から無産階級の國家に變つてゐるからだ。

併しながら一般的階級戦の切迫と共に無産階級は、單なる資本主義文化の排除から急激に無産階級文化の對抗に方向を轉換して來る。そして無産階級の有する一切の力は階級闘争の一點に集中されて來る。最近に起つたプロレットカルト・インタナショナルの運動こそは此の時期に於ける無産階級の戦闘的革命的な文化運動である。ブルジョア文化に對するプロレタリア文化の對抗運動である。従つてプロレットカルト運動はマルクス主義の實際的發展に外ならぬ。此の運動は必然的にロマンチック・ムーヴ

メントの性質を帯びる。何となればそれは既成文化の完成運動ではない。如何なる飛躍的の意味に於てもそれは既成文化の延長としての運動ではない。それは全く新しいものを樹立する運動であり、従つて舊社會にとつては破壊的運動だからである。

そこで新興階級の文化が常にさうであつたやうに（ルネイサンス時代、十八世紀末から十九世紀へかけての時代）この時期に於ける無産階級文化は戰闘的であり、ロマンチックである。私は以前に現代の文學がロマンチック運動の出現を要求してゐることを書いたことがある。その時には私の考へは極くあやふやだつた。ところが最近ルナチャルスキーの『労働者の獨立教育』といふ小冊子を見たら混沌たる當時の私の考へが極めて明確に言ひ現はされてゐることを發見した。それで私はどうしてもその一節を引用せずにはをられぬ。

『自らを解放せんとして戦つてゐるプロレタリアの文化は、明確な、争闘に基いた階級的文化である。それはロマンチックである。そして内容が強烈である爲めに形式は整つてゐない。それはその暴風的、悲劇的内容を一定の完全な形式に仕上げる時間の餘裕がないからだ。』

最高の發達階段に達した階級及び國民の文化は古典的である。自己を表現せんとして戦つてゐる階級はロマンチックである。而して此のロマンチズムは『スツルム、ウンツ、ドラング』の典型的特色を具へてゐる。衰頹期に向つてゐる階級はこれとは別種の、即ち、幽鬱的、幻滅的、頹廢的なロマンチズムの形態をとる。』

ブルジョア文化は諸文明國に於てその古典時代を過ぎて今や頹廢期に入つてゐる。ブルジョア文化の凡ゆる要素は互に矛盾し、衝突し自滅しつゝある。

完成された無産階級の文化はもはや無産階級文化ではあり得ない。それは如何なる階級の文化でもあり得ない。人類全體の文化だ。けれどもこれに到達する道は、言はゞ無産階級の獨立文化の樹立以外にあり得ない。

(一九三二年九月十三日)

民衆藝術の理論と實際

一

民衆藝術の問題は純粹藝術學の問題ではなくて今日の藝術の問題である。時代をきりはなして民衆藝術を論ずるわけには行かない。凡てのものと同じく藝術も進化するからだ。藝術といふものが本質上民衆藝術と貴族藝術とにわかれてゐると説くのも獨斷だが、そんな區別はないから民衆藝術といふやうな對立物を豫想させる名稱を使ふのは矛盾だと説くのも觀念の遊戯である。

だから吾等は純粹藝術論を振り廻すことは避ける。これは妥協好きな論者に任せておけばいい。彼等は今日の問題を『永遠の相の下に』於て見ることが得意だ。そして事實を神祕化して凡ての問題を、それもさうだがこれもかうだ、要するに見方の相違

でどつちだつて同じだと纏めてしまふ。彼等の『妥協の論理』にかゝつては凡てのものが無解決で、どちらにも一理があるのだ。そしてこの無解決といふ状態が彼等には極めて満足らしい。彼等は俺達は永遠を見るから甲乙といふ風にすべての問題を簡単に片附けるわけには行かないのだといふ。併し吾々は彼等がデイレットだから凡て物事がはつきりして來ると態度をきめずにはおられないから何もかも無解決にしてきたがるのだと解釋する。彼等は永遠といふ觀念の爲に今日の事實を見ないふりをする。今日の社會や人間などはどうだつていゝ、唯だ永遠の社會、永遠の人類が大切だと言ふ。吾等は神様でないから永遠などは知らない。唯だ今日をどうしたらいいかと考へる。(揚足取りの巧い人は「今日」といふのを『其の日ぐらし』の意味にとつて私をたゞきつけて呉れ給へ)

所が、彼等が論理の上で無解決にしようと思ふ問題が事實の上では一日一日と解決されてゆく。彼等の天氣豫報には毎日曇天と書いてあるが事實は晴天があつたり暴風

雨があつたりする。これを説明するに方つて彼等は尙ほ今日や明日の天氣は『やがて過ぎ去る爲めに』存在するもので、俺の考へてゐるのは永遠の天氣だ、天氣そのものだと言ふだらうか。

こんな問題は馬鹿々々しいことだからもうやめて、本題に返らう。

二

純粹藝術論を振り廻すのは避けると私は言つたが、併しまるきり避けるわけには行かない。それはさういふ議論の無意味を證明することだけは必要だからである。

藝術は民衆的なものか貴族的なものか？ 先づ世人はかういふ問を發する。その答へが三通りある。第一は藝術には貴族的なものと民衆的なものと二つあるといふ議論第二は藝術は民衆的なものであるといふ議論、第三は藝術は貴族的であるといふ議論である。

レミド・グルモンの『藝術と民衆』といふ論文にこの三つの藝術論が模範的に述べてある。さうして氏自らは第三の立場をとつてゐる。次に私は重要な箇所を抜萃して見やう。

藝術には規則的な、普通な、凡ての人に解るものと、例外的な、不規則な、選ばれた人しか楽しむことの出来ないものとの二通りあるか？　ピカ氏やデ・ロベルト氏は二通りあるといふ。もつと堪らないのはトルストイだ。彼は恐ろしい本『藝術とは何ぞや』を指す)の中で一つしか藝術はないといふ——民衆にわかるものだけしかないといふ。

予の考へでは此の二つの説は根本に於て同じだ。即ちどちらも間違つてゐる。何となれば藝術はその本質上絶対に民衆にはわからないものであるからだ。——民衆にとつては詩歌や繪畫に於て大事なのは題材だけである。識者にとつて題材の取り扱ひ方

である(而して藝術的價値は取り扱ひ方にあるのだ!)——それ故に民衆は藝術の爲めにつくられてはゐない。又藝術も民衆の爲めにつくられてはゐない。民衆は例外のものには趣味をもたない。而して予は考へる、藝術は永久の例外だ。——(Profane in style)

トルストイは藝術をロシアのミュージックの泥足で踏みにじらせやうとした(少くも或る人々はさう考へてゐる。)グルモンは民衆の面上に唾をひつかけて、藝術を彼等から取上げて知的特権階級の獨占としようとした(少くともさういふ結論に達した。)

ところがグルモンの藝術至上主義はどうして生じたか？　彼の議論が論理的生命を維持してゐるのは何故か？　といふに、彼は民衆といふカテゴリーと藝術といふカテゴリーとを先づ並べて見た。此の民衆は資本家の搾取の下に終日はたらいで藝術を鑑賞する知力と餘暇をもたぬやうに運命づけられてゐる民衆だ。此の藝術は知的特権階

級——即ち遊民階級の手になつた、而してさういふ人を相手とする藝術だ。彼はこの間に共通點がないといふことを見てとつた。さうして藝術は民衆の近附くべからざるものであるといふ結論をひき出した。

併し彼は民衆と藝術の影を見てゐたのだ。民衆と藝術とをつかむ代りに頭の中でこしらへた民衆と藝術とのカテゴリーをつかんでゐたのだ。進化する民衆と藝術とを凝化した觀念として見てゐたのだ。今日の問題を『永遠の相の下』で見たのだ。

之に對してはロマン・ローランの絶叫が最も適切な回答である。ロマン・ローランは『民衆藝術論』の結末でかう言つてゐる。

諸君は平民藝術を欲するのか。然らば先づ平民を持つ事から始めよ。其の藝術を娛しむことの出来る自由な精神を持つてゐる平民を、そして容赦のない労働や貧窮に蹂みにじられない、ひまのある平民を。有らゆる迷信や、右黨若しくは左黨の狂信に惑はされない平民を、自らの主人たる、そして目下行はれつゝある鬭争の勝利者たる平民

を。ファウストは言つた。「始めに行爲あり」と。(大杉榮譯)

吾々は藝術の本質論を云々するよりも(そして特權藝術の泥沼に溺れるよりも)先づ民衆をもたねばならぬ。民衆は死んだカテゴリーではない。動いてゆるる存在だ。特權階級の子守歌にだまされて或る期間内に眠つてゐる。けれど眠つてゐると死んでゐるのとは前者はいつかは醒めるといふ一點で違ふ。

三

醒めんとする民衆は力である。はかり知れざる力である。明日の人類を支配する力である。

彼等は學問を持たない、特權階級のアイデオロジイを持たない。併し健全なる判断力の萌芽をもつてゐる。それは本能的のものだ。

彼等の中の少數自覺者は先づ自己の周圍の鎖を見る。見るといふよりも直観する。

彼等の周囲にある藝術は多くは舊い時代の遺物だ。それは特権階級が眠つてゐる彼等の先祖に課した奴隷道德と、眠つてゐる彼等の先祖の運命必至觀の表白に過ぎない、講談も落語も浪花節もすべてこの範圍を出てゐない。中には勇敢な彼等の先祖によつて歌はれた。歌もあつたのだが、それは大抵骨抜きにされてしまつてゐる。支配階級によりてぐにや／＼にまげられてゐる。彼等は凡てが彼等を壓迫する道具につかはれてゐたことを見る。

併し彼等は失望しない。自らの仲間の力を信ずるからだ。最初に醒めた少数者は淋しいに相違ない。併し仲間が一人づゝ醒めてくるにつれて彼等の信念は加はつて行く。さうして或る時期に達すると彼等は前もつて約束でもあつたかのやうに一度に起きあがる。これは誰彼が起き上るのではない。民衆が起き上るのだ。民衆の力が起き上るのだ。警察や軍隊の力はシヅイル・オーダーを維持する爲めに誰彼を取り鎮めることは出来る。舊い道德は誰彼の行爲を拘束することは出来る。舊い藝術や宗教は誰彼

を麻酔させる事は出来る。併し必然の力で起き上る民衆をどうすることが出来るか？

四

併し今日は民衆の大部分は眠つてゐる。醒めた少数者は無闇といきりたつたり、或は壓制者の組織のあまりの美事さにどうしてよいか迷つてゐる。さうしてどうもかうもならず再び假睡状態を装ふものさへある。

特権階級はあらゆる力を用ゐてこの醒めた民衆には醒めることの無益を教へてゐる。教育、道德は勿論のこと科學や藝術さへもその證明の道具として使はれてゐる。凡ての文化が支配階級の魔法の杖の先で歪められてゐる。宗教も文學も道德も大部分支配階級が民衆を釣らうとする餌だ。善良な民衆は知らず／＼それに釣りこまれる。吾々は一旦醒めた仲間が再びブルジョアの毒牙にさらはれてゆくのを見殺しにすべきであるか。

ブルジョアの教育に對しては無産階級の教育を、ブルジョアの道徳に對しては無産階級の道徳を、ブルジョアの科學藝術に對しては無産階級の科學藝術をもつて對抗しなければならないのだ。

『道徳は一つしかない』など、言ふことは吾々はよく知つてゐる。併しこの唯一の道徳を語る段階に吾々は達してゐないのだ。絶對善といふやうなものが、理論や觀念の上で成立するとしてもそれは今日の道徳ではない。道徳は生きた人間の行爲の規範だ。ところが今日の人間は生物學的には單一な内容をもつてゐるか知れないが社會的にはもはや單一な内容をもつてゐないのだ。しかも生物學的人間は所謂文化の領域には入つて來ない。文化に對立する自然の領域内にある。だから自然科學でない道徳で『人間』といふやうな言葉は今日では意味をなさないのだ。

科學の眞理は絶對である。といふ意味は吾々が絶對を認識することが能きるといふ

意味ではなくて、その眞理は吾々の勝手にまげることの出來ないものだといふ意味だ。ブルジョアの力も容易には科學を狂げるわけには行かない。それは科學は道徳と違つてその眞理が感覺的に具現するからだ。理性と感覺によりて證明し、檢證することが出來るからだ。けれども科學の効用は凡べてブルジョアがまき上げてゐる。蒸氣機關も電氣も、吾々はその理論を知るところを許されてゐる。併しその恩恵を受けることは拒まれてゐる。吾々は電氣燈や汽車や電車を使用することは出來る。蒸汽や電氣を動力として生産せられた生産品を消費することは出來る。併しこれらの凡てに搾取の極印のついてゐないものはない。

藝術はどうか？ 無産階級の民衆が今日の藝術にどれだけの交渉をもつてゐるか？

東京の第一流の劇場の觀覽席は平均五つ位の等級にわかれてゐる。一等觀覽席の入場料は平均六七圓に上るだらう。しかも正午頃に開場して夜の十時乃至十二時迄開かれてゐるのだ。それがどこに無産階級との連絡があるか。勿論法律の上で無産者が觀覽

を禁止されてゐるのではないけれども事實上禁止されてゐるのと同じだ。無産階級の多数は今日の難しい書籍の大部分を読むことが出来ない。書籍を十分に買ふ金もなければ読む時間もない。而して読んで理解する力もない。それは彼等が先天的に劣等な能力をもつてゐる爲めだらうか。否それは殆んど全く社會的境遇によるのだ。併し實際は彼等は先天的に劣等な能力を遺傳されてゐるかの如き待遇を社會から受けてゐるのだ。事實上書籍は彼等に禁じられてゐるのだ。

さうして特權階級は今日の民衆はまだ無知で自覺がないから選舉權もやれぬ。團結運動も許されないといふ。彼等は無知なのではない。

五

今日日本の民衆が辛うじて近付き得る藝術は寄席と活動寫眞位に過ぎない。寄席や

活動は藝術でないといふ人があるかも知れぬ。なる程その通りだ。併し社會が彼等に許してゐるのはそれだけなのだ。勿論法律は禁じてゐない。ブルジョアは法律は公平だ。

しかも寄席と活動といふ代物が何だらう。それはブルジョアの宣傳の道具だと言つて差支へない。講談や落語は此の上なく民衆を侮辱したものが題材の九割を占めてゐる。

活動寫眞に至つて近代の産物だけに、ブルジョアの宣傳の道具としての色彩が極めて濃厚である。その題材は多く財産に関するものである。「百萬弗の祕密」といふ風の露骨な題材をもつたものは勿論のこと、大抵の活劇、探偵物、社會劇等がすべて財産權の神聖を極度に主張したものである。

百萬長者があつて大泥棒が出て来る。種々の曲折を経て探偵か何かによつて財産權

を侵害した奴がつかまるといふやうな筋が大部分を占めてゐる。最近私が見た中に、矢張り一人の百萬長者が商賣敵の奸策によりてすつかり相場で損して破産する、その息子が財産を恢復して親父以上の財産家になつて芽出度し芽出度しで幕になるのがあつた。かうした露骨な筋が民衆を魔酔させるに上乘の活劇やピストル、男女の戀物語などに點綴されてゐるのだ。さうして財産權の神聖、ブルジョアの優越といふ思想を民衆の頭に沁みこませるのだ。社會主義の思想をあらはしたものが宣傳藝術だなどいふ諸君はブルジョアの

— 巧妙な大仕

掛けの宣傳を何と見るのだ。恐らくそれが宣傳であることにはお氣がつかれないのだらう。それは夫子自らが宣傳で丸められてしまつてゐるからだ。

ブルジョアは今日の支配階級である。支配階級がその位置を維持する爲めのタクチックは堅實な守勢である。今日の秩序の維持である。それを維持する爲めの目的を有するものは彼等にとつて宣傳である。何々立志傳。天下の糸平。河村瑞軒、といふや

うなものを修身の教材に入れることは政府黨が我が黨内閣の效能を並べると同じことである。野黨はこれに反して攻勢をとる必要がある。無産階級、被壓制階級の境遇が丁度それにあたる。彼等にとつては凡ての論理が逆になつて来る。彼等が口を開けばブルジョアに不利なことをいふのは立場がまるで違ふからだ。ところがブルジョアの麻醉薬にかゝつた連中がよつてたかつてそれを宣傳だと言ふ。宣傳の悪い場合は虚偽に眞理の衣を着せる場合だ。今日の社會生活を絶對視すればこそ、それに都合の悪いものが凡べて宣傳と映するのだ。

六

民衆藝術の問題は今日では純粹藝術の問題であるよりもむしろ民衆の問題である。ロマン・ローランが先づ民衆をもたねばならぬといつたのは其の意味だ。

民衆に對するブルジョアの考へは改めないで、これを先天的に知力の劣等なもの

と見做して、これに特別な藝術を興へやうとするから飛んでもない現象が生じて来る民衆に公然の侮辱を興へたり、民衆に媚びることによつて民衆に間接の侮辱を興へたりするやうなことが起つて来る。

所謂労働文學と稱するもの、中にもその傾向が皆無だとは言へない。民衆文學は民衆を信ずることからはじめなければならない。ロマン・ローランの言葉を借りると

『人間の混沌とした心の中に、もつと風と、明りと、秩序とをいれてやる事が大きな務なのだ。併し人間の心をたゞ考へたり行つたりする事の出来る状態に置くだけで澤山だ。平民の爲めに考へてやつたり行動してやつたりしてはいけない。殊にお説法や教訓は避けなければならない。平民の友人等は、藝術を極く好きなものにならぬ。』(民衆藝術論—大杉榮譯)

吾々の仲間には労働者の生活の悲惨を極度に陰鬱な筆で描寫する人がある。小説の上で資本制度の講義をして聞かせたがる人がある。併し民衆は彼等にあまり好意をも

たないかも知れない。民衆は教へて貰うよりも自分でわかるやうにして貰ひたいのだ。風と明りと秩序とが欲しいのだ。考へたり行つたりすることの出来る状態に置いて欲しいのだ。教師よりも友人が欲しいのだ。民衆藝術に志す人は先づ教師のやうな口吻を捨てなければならない。さうして民衆の力に無限大の信用をおかねばならぬ。

民衆は指導者を必要とする。けれども指導者は河の向ふからお出で／＼をする人であつてはならない。民衆の歴史的使命を明確に理解しつゝ民衆の中に交つてその先頭に立つて共にはたらく人でなくてはならない。

七

民衆藝術の問題が藝術の問題である以前に民衆の問題であるといふことは、この問題が藝術學の問題であるよりもより多く社會的施設の問題であることを意味する。

今日の民衆はファウストを理解しないかも知れない。しかしそれは前にも言つたや

うに民衆の本来の罪でなくて社会的境遇の罪だ。併しそれだからと言つて民衆にはファウストの代りに『不如歸續篇』といふやうな讀物を與へておけばいゝといふ論理はブルジョアの論理である。この論理を借用して、藝術は選ばれたる一部の人間にしかわからないなど、放言する人々の如何に多きことよ。今日の日本の小説の讀者は中學生女學生乃至はその卒業程度の青年男女に最も多いやうに思はれる。それは一通り文字を解するものなら誰にでもわかる。所が多數の民衆は一通り文字を解することさへも禁じられてゐるのだ。さうして労働だ。間斷なき労働だ。月に一度や二度の公休をあてがつておいてそれで労働者が公休を有益に使用しないといつて公休は賃傭労働者を墮落させるからとて公休に反對した資本家があつた。彼等は公休を與へたから公休日には労働者に讀書でもさせやうといふのか。公休日には朝から寝て暮す人、酒を飲んだり女にたはむれたりして暮す人、もつと甚だしいのは公休日を利用して僅かばかりの内職でも爲なければ生活の出来ない人さへあるのだ。藝術よりも自由と睡眠とバ

ンと休養が必要なのだ。

然るに吾々は民衆が藝術を解しないといつて責める。讀者が低級で困るなど、言ふ讀者を低級にしたのは誰だ。吾々の住んでゐる社會ではないか。

民衆はファウストを解したい。ロダンを鑑賞したい。併しさうすることを禁じられてゐるのだ。彼等は書物を買ふ金もこれを読むひまもないのだ。その結果はこれ等に對する理解力鑑賞力の缺如だ。無産階級の一家三人の家族が歌舞伎座へ見物に行くとすると、少くも一日の労働を休んで二三日分の賃銀を犠牲にしなければならぬ。ブルジョアの眼から見たらこれ位の犠牲は何でもないかも知れない。併し無産階級にとつてはその瘡痍は數ヶ月かからねばならないのだ。彼等の多數者にとつてはシャツ一枚を求めるにも常に二三月の計畫の上ではじめて實現されてゐるのだ。

民衆と藝術との間にはかくの如き距離が横はつてゐる。それでは民衆と藝術とを近づけるにはどうしたらいいか？ それには劇場の經營法の改善、教育の普及、書籍の

廉價販賣をうして何よりも民衆の生活條件の改善等其の他限りなき條件がある。これ等の條件は到底今の社會に於て満すことは出来ない。従つて今の社會に於て藝術と民衆とを近附ける手段はないと言はねばならぬ。故に民衆藝術の問題が社會的施設の問題であるといふことは、直ちに民衆藝術の問題が社會改造の問題であるといふことを意味する。

八

社會改造とは部分的改造の意味ではない。部分的改造は事實上不可能である。社會制度をそつくりそのまゝにして於て民衆藝術上の施設を改善せんとするが如きは太平洋の水をそのまゝにして置いて東京灣の水を清めんとすると一般である。

社會改造は一般的改造でなければならない。一部局の改造ではなくて制度そのもの改造でなければならない。藝術が特權階級の獨占から解放される道は社會の一般的

改造を以て他に求めることは出来ない。

此の一般的改造は今日の社會の各方面の被支配者即ち無産者によりてなれさなければならぬ。此の時にあたりて藝術界の無産者は何をなすべきか？ 藝術の永遠を信ずるものにとつては悲しき矛盾ではあるが、吾々はもう後をふり返つてはならないのだ。吾々の祖先が遺した價值ある藝術をも一切をあげてこれを破壊の熔爐に投じなければならぬのだ。無産民衆の力だけに頼らなければならぬのだ。吾々が過去の文化に未練を残す時吾々は既にバックワードになつてゐるのだ。舊社會はその一切の附屬物と共に民衆を壓迫した。それが倒れてゆく時も一切の附屬物と共に倒れてゆかなければならぬのだ。價值あるものはその廢墟から甦つて來る。社會革命が價值ある舊藝術を全部破壊するなど考へるのはブルジョアらしい考へ方だ。ロシアは立派にそれを反證した。

故に吾々は藝術の永遠に藉口して民衆の解放運動を非議する權利はない。民衆と交

涉のない藝術に何の永遠がある。民衆をして藝術に近附かしめよ。それは藝術を救ふことだ。古來の大詩人が民衆に呼びかけた聲は、民衆の耳に今日届いてゐるか。民衆はゲーテもダンテも解しないではないか。この過渡期に於てのみ吾等は最初に述べた貴族藝術に對する民衆藝術、ブルジョア藝術に對するプロレタリアート藝術の對立を語ることが出来る。それは藝術を民衆に取り返す爲めの一般的改造への進行曲だ。此の場合のプロレタリアート藝術とはつまり戦闘藝術なのだ。藝術家が文明のバイオニアとなるのはかゝる時だ。殊に戦闘機關が悉く特權階級の爲に抑收されてゐる時は文學藝術は最も有力なる戦闘機關の一となる。

『全國內の識者は彼等の志望、彼等の國民生活の概念、或は彼等の理想を表白する手段として、詩歌、小説、諷刺、或は文藝批評を選んだ。露西亞の政治的、經濟的社會的理想——露國社會の歴史を構成する部分の志望を解する爲めには、青書や新聞の論説を探したつて駄目だ。藝術作品にそれを求めなければならぬ』。(クロボト

九

『十八世紀と十九世紀との間には連絡がない。その間には溝渠が横はつてゐる。それはフランス革命だ』とヴィクトル・ユーゴーは言つた。併しそれは有産ブルジョアの方に關することだ。フランス革命前に貴族と僧侶の爲に一切の權利を奪はれてゐたブルジョアは革命後には反對にそれを抑へつける位置になつた。正確に言へばブルジョアははじめて生れたのだ。少くもブルジョアの歴史がはじまつたのだ。フランス革命前までは彼等は歴史をもたなかつた。歴史は帝王と貴族と僧侶とによつて造られ壞されてゐた。革命によつてブルジョアが歴史の表面に飛び出して來たのだ。そこで自由を愛する若きユーゴーは狂喜してフランス革命を頌したのである。

併しながらフランス革命の溝渠はあまり深くはなかつた。大多數の民衆はまだその

溝の下にあつた。無産階級の聯絡は少しも断たれなかつた。彼等にはまだ歴史がはじまらない。掠奪と殺戮と搾取の歴史が人類の社會にはじまつて以來無産階級は今日まで社會の下積みになつて横はてつゐるのだ。

科學も藝術も宗教も、一切の人類の文化が大多数の下積みを太古のまゝに残して置いて表面だけで移り變つてゆく歴史は眞の人類の歴史ではない。かゝる文化は眞の文化ではない。眞の歴史は人類の全部がその壯嚴な歩みを初める時にはじまるのだ。吾々は此の點に於て搾取と壓制の上に築かれた今日の文化藝術の完成に没頭する文化主義、藝術至上主義のバンナーの下に集れる諸先輩に反逆せざるを得ないのだ。眞の歴史がはじまる迄は吾々のバンナーに染め抜かれた文字は『無産階級の解放』であるのだ。

吾々の考へを功利的だと批難する人々がある。さういふ批難はそつくりそのまゝこれを與へた人々に吾々は突き返さうと思ふ。吾々の目的は功利の餌食となれる文化を

すくふにあるのだ。

我々は科學としての科學、藝術としての藝術の價値を過少視してゐるのではない。その反對に科學の獨立、藝術の獨立を愛することは非常なものだ。

(一九二一年七月)

無産階級の藝術

無産階級の藝術が如何なるものでなければならぬか、それは舊藝術に對して如何なる特色を有するものであるか——凡てこれに類似した疑問は全然暇つぶしの無價値の問題だとは言へないまでも、要するに射たぬ狸の皮算用である。吾々はかゝる、空想を論議する爲めに、現實當面の問題を忽緒に附してはならぬ。

新興藝術の第一の、當面の、そして最も根本的問題は無産階級が藝術をもつといふことである。夫が如何なる藝術でなければならぬかといふやうな詮議は後廻しの問題だといふよりも殆ど無用の問題だ。勿論無産階級は今日のありあはせの藝術をそのまま、うけついで自己の思想や感情を表はすわけにはゆかぬ。だからと言つて、ブルジョア學者や三文文士のお手盛の筋書通りに温和しくあてがはれた道を進んでゆくわけ

には尙更いかぬ。たゞ自己の能力に従ひ、周囲の事情に應じてその歴史的使命をはたすだけだ。如何なる藝術論も美學説も無産階級藝術のプログラムを前もつて作製する力はない。

そんなら此の問題はゆきあたりばつたりかといふとさうは言へない。無産者は階級として組織されない間は、ほんとうの意味に於て無産階級の藝術をもつわけにゆかない。經濟上の非所有階級は精神的にも非所有階級である。政治上の被支配階級は精神上、知識上にも被支配階級だ。少數の自覺分子の反抗を除いては。プロレタリアの意識は大部分ブルジョアの意識に支配されてゐる。そこでこれから脱する第一歩は無産者が階級的に團結することである。しかも階級に組織されたゞけで藝術が手品のやうにひよつこりと飛びだすわけではない。

この使命をはたした無産階級はそれ以前と地位を顛倒して支配階級となる。支配階

級となつた無産階級のみが、はじめて本來の意味の無産階級藝術を所有し得る。しかしそれもすぐといふわけにはいかぬ。一九一七年の十一月七日にロシヤの無産階級が政權をとつたから、十一月八日から無産階級藝術がする／＼と芽をのばすといふわけにはゆかない。豊富な生産物即ち富の増加と、平和と、従つて餘裕とが藝術が生れるためには必要だ。無産階級がブルジョアから經濟的に獨立した如く思想的にも獨立することが最も必要だ。即ち舊來の——つまりブルジョアの思想感情、——マルクス主義者の所謂アイデオロジから獨立することが必要だ。それには新しい無産階級の獨立教育が先づ何より先に必要だ。

明治維新から明治文學の勃興まで、即ち平民的政治革命から平民的アイデオロジイ

の革命までに二十年かゝつた。坪内逍遙の『小説神髓』や『當世書生氣質』が出たのは明治二十年前後だつた。更に明治文學の絶頂期ともいふべき硯友社全盛時代はそれから十年以上後のことであつた。フランス革命から革命的ブルジョアの文學即ちロマンチズムの出現までにも略同じ位の年數を経過した。

フランスの批評家ジャック・メーニルは『無産階級治下の藝術』(一九二二年五月一日發行ソヴイエット、ロシヤ誌)といふ論文の中でロシヤ現代の藝術文學を批評する前にフランス革命の例をひいてかう言つてゐる。

『文學及び藝術上の大變化は(フランス革命の)三十年後まで來なかつた。それは革命後に生れ、幼時からその空氣を呼吸し、その澎湃たる思想に浸透され、勇ましい闘争の直接の記憶と、それにつゞいて起つた大事件の雰圍氣の中に成長した新時代の人々の事業たるべく運命づけられてゐた。フランスでは藝術に於て革命を代表するものはロマンチック運動であつた云々』

この年數についてはソレルも同じ位に見積つてゐる。

無産階級藝術の場合にもこのことは概括的には眞理であるに相違ない。無産者が階級を形成すること、それが権力の地位に上りてそれ自身の制度をつくること、そして舊いアイデオロジイの勢力から脱すること……これだけの歴史的過程が少くも本來の意味の無産階級藝術の出現までに横たはつてゐるのである。

『労働者が彼等自身の解放を實行する爲には』幾多の争闘を経て『境遇と人とを變化』しなければならぬとマルクスは『フランスの内亂』の中で言つてゐる。成人教育、プロレトカルト等は、境遇に應じて『人』を變へるところの社會革命に必然の副作用である。プロレタリアン、ディクテーターシップとプロレトカルトとは別々に切り離すことのできないものである。プロレトカルトが共產文化への進備であるといふのはプロレタリアの獨裁が共產社會の準備であるのと同じ意味である。それは準備であると同時に不可避の一過程である。

ロシアの教育制度——ブルジョア文化の崩壊と無産階級文化の萌芽の現象——を観察して来た人々の中には、共産主義には困るがロシアの教育制度には感心したなどと識つたかぶつたことを言つて、たま／＼自己の無識をさらけ出してゐるものがある。コミニスムからプロレトカートを引きはなすのは雷鳴から電光を引き離すやうなものである。火から暖かさを引離すやうなものである。『此の部屋は暖かくていゝが、どうも火といふ奴は危険でいかん！』この種の寢言を吾々は學者からも新聞記者からも、甚だしきは労働組合の代表や第二インタナショナルのお歴々からも幾度び聞かされたか。さうかと思ふとポリシエヴィキを貶してルナチャルスキーやゴリキーの『獨創』を賞稱するヘナチヨコ文士がある。ルナチャルスキーやレニン夫人やゴリキーに獨創がありとすれば、それは歴史的必然、無産階級の歴史的使命を理解することができた點だ。アンドレイフやメレコジコフスキーと違ふ點はその點だけだ。

しかしメーニルが言ふやうに、そしてレニンも屢々言つやうに、眞の共産文化の樹

立は次のゼネレーションに俟たねばならぬ。境遇と共に人を變へることが必だからだ。無産階級には過去がない。あるのは未來ばかりだ。ロシアで幼年及び少年に大なる期待がおかれてゐるのは當然である。次のゼネレーション若くはその次のゼネレーションに至つてはじめてプロレタリアの獨裁は解體する。そこで正確な意味では無産階級文化従つて無産階級藝術は、階級のない社會に於ける階級のない文化、階級の無い藝術となつてはじめて完成されるのである。

吾々は過去と未來ばかりについて多くを語つた。新興階級（過去に於ては有産階級未來に於ては無産階級——但しロシアではこれは現在となつてゐる）が支配をはじた當座の文化藝術のみに就いて語つた。現在はどうか。資本主義國に於ける無産階級藝術の現在の問題はどうか。

私はいつか民衆藝術は戦闘藝術でなければならぬといつた。それは現在に於て最も適切である。尨大なる、

イーデン・エンド・シーダー・ボールは『プロレットカルト』の中で言つてゐる。「プロレットカルトの第一目的(革命前斯に於ける)は戦闘文化の發達に貢獻せざる一切のものを排斥し單純化し、集中することである」と。無論、藝術に於てもさうでなければならぬ。革命前期の無産階級藝術は本來の意味の無産階級藝術の誕生を準備する戦闘藝術に純化集中しなければならぬ。それは『傾向藝術』ぢやないか、『邪道の藝術』ぢやないかと言う人があるか知れぬ。さうですとも、たしかにそれは傾向藝術である。凡ての偉大なる藝術がさうであつたやうに。たしかにそれは『邪道の藝術』である。凡ての大藝術が舊藝術からさう呼ばれたやうに。しかも吾々は更に一步を進めて露骨に言つてしまはう。無産階級藝術家は局限された藝術そのものの戦場で戦ふのだといふやうな偏見をすて、その戦場は一般の無産階級對有産階級といふ一大戦線に連續して

ゐることを自覺しなければならぬと。

本來の無産階級藝術は藝術の最も純真なものである。併しブルジョア社會以外に社會が可能であることをブルジョアに信じさせることが困難であるやうに、ブルジョア藝術家にブルジョア藝術以外に藝術があることを知らせるのは骨の折れる仕事だ。けれども中世のナイトや十七八世紀の王侯貴族の生活が消滅しても、ブルジョア生活の中からより進んだ近代藝術が發生したやうに、金満家の令嬢や、百萬長者や、華族の若様さては中間階級諸分子が消滅すれば無産階級の新社會からより進んだ、そして今度はより正しい純真な藝術が發生することには吾々は百パーセントの期待をもつことができる。それは單なる可能の問題ではなくて必然の問題である。

或る人は、文學は表面上階級的影響を蒙るが繪畫や音樂はさうでないと言ふ。これはたまくその人が文學については『表面的』常識をもつてゐるが、繪畫と音樂については全然無識であることを表明したものである。音樂は單なる音の組み合わせではな

い。繪畫は單なる色彩の調合ではない。その背後には人間の意識が燃えてゐる。而して人間の意識のある所には、多かれ少かれ階級の影響が絶無ではあり得ない。文學と繪畫音樂との間に區劃を設けるのは人間の意識を傳へるものは文字だけだといふ獨りよがりの文學者の獨斷の産物に過ぎぬ。

教育についての眞理は藝術についても眞理である。そこでポールの所謂『革命前期』即ち無産階級が被搾取者である社會の無産階級藝術は戰闘藝術である。けれどもこの戰闘は攻勢的のものでなくて守勢的のものである。ブルジョア社會が發散する毒瓦斯に對する瓦斯よけである。それを今だに氣のつかぬブルジョア社會の幫間文士のみが見違へて、無産階級藝術の運動に對して、藝術の危機を叫び、誰もどうもする氣づかひ

のない『藝術本體』を守護しやうと健氣にも考へて『藝術擬態』を懷へしまひこむのである。純金の指輪と十錢均一の電氣メッキのそれとの區別さへつかないのは無作法な無産階級藝術家でなくて、支配階級の催眠術にかゝつたお歴々なのだ。その眞偽をみわけてこれを宣明せんとするのが無産階級藝術家の任務でなければならぬ。

初めにいつたやうに當面の問題は無産階級が藝術をもつといふことであつて無産階級藝術が本來如何なる特色をもつべきかは未知數である(少くも現在の私には)けれどもそれは全然從來の趣味を尺度として批評するのできないものであることは確かである。

第四階級の文學

—

イヅレーは「近世都市」の中で藝術家を定義して、希望の創造者、従つて行爲の創造者、従つて制度の創造者と言つてゐる。

此の見解はたしかに眞理である。併し多くの眞理と同様にその限界をもつてゐる。それは歴史の或る斷面を切り離して考へたときにのみ眞理であるといふことである。十八世紀のフランスの啓蒙文學がフランス革命の先驅をなしたことは一般に認められてゐる。而してそれは事實であつた。フランス革命の一原因をルソーやモンテスキューの啓蒙文學に歸するのは誤りではない。併しながら更に眼界を廣くして考へるとこれ等の啓蒙文學が起つた原因を十八世紀の社會状態に發見することが出来る。封建制

度について起つた極端な中央集権、極端な専制政治、階級制度、貧富の懸隔が舊制度の内部に反抗階級をはぐみ、その矛盾が啓蒙文學となつて意識的に發出したのである。その證據には、これ等の啓蒙文學は革命の導火線となつただけであつて、フランス革命は一度び勃發するとこれらの啓蒙文學者の唱へたプリシシブルには殆んど關係なく進行した。ルソーの自由平等の思想とかモンテスキュウの三權分立論などは、當時の革命階級の合言葉となつてゐたが、それは彼等の觀念が事實を支配したのではなくて、當時の社會の矛盾が彼等の觀念に反映し、社會の革命的要素が彼等の反抗思想となつて發出してゐたからである。

箕作博士は「フランス大革命史」に於てかう言つてゐる。

革命以前、及び革命の初期に於ては吾人は或は、一人の共和主義者をも發見するに苦しまんとす。啓蒙文學者の一派の中には一の共和主義者を見ず。ヴォルテールは人君専制を理想とし、自ら王者の友を以つて任じゐたり。またモンテスキュウの

希望せる所は其の實ローマの共和政治、若しくは十八世紀のイギリスの如き寡人貴族政治にありき。ルソーは民主主義を信奉したれど、共和政治は僅かに小數民にのみ適するものとなし、フランス人が共和政治を計畫する如きは迂愚も亦甚だしと思へり。……百科全書派のデドロー、エルヴェジユース、ダルジャンソン等に至りては當代の専制政治の弊害を痛撃したることあれど共和政治を主張せしことは嘗てあらざりき。……かのミラボーは素より、ダントンもロベスピエールも、その初めは斷じて君主政治の主張者なりき。(箕作元八著フランス大革命史上卷四七五——七頁) 實に直接間接の革命の大立物も一七八九年から一七九三年に至る四年間の事實の推移を洞見し得ず、事實は事實として進行していつたのである。

最近のロシア革命も同じことを證明してゐる。十九世紀後半のロシア文學は疑ひもなく來るべき革命を豫示してゐた。併しそれは嚴密に言へば當時の社會そのものが革命を豫示してゐたのであつて、文學はたゞ當時の社會の反抗階級の思想を反映してゐ

たに過ぎないのだ。三月革命がはじまつた當時に於ても、八ヶ月先きに無産階級の獨裁が實現されると信じてゐたものは、數へるに足らぬ位少數のボリシエヴィキ黨員に過ぎなかつたのである。

こゝに吾々は、イツレーの言のもつてゐる眞理の限界を見る。此の限界をとりはずすとイツレーの言の正反對が眞理となる。但し「創造」といふ言葉は嚴密を缺くから「決定」といふ字をこれに代へる。するとかうなる「制度は行爲を決定し、行爲は希望を決定する。」と。

けれども牝鶏が先か卵が先かといふやうな水掛論はどうでもいゝ。現制度の擁護者は「初めに觀念があつた。」と假定するがいゝ。さうして「觀念は行爲を生んだ、行爲は制度をつくつた、故に今日の制度は神聖だ。」といふ結論をひきだし、やがて今日の制度が支持し切れなくなつたら、また觀念からはじめて次の制度を創造するがいゝ。

第四階級の藝術は、併し、今日の社會から必然に決定される。今日の支配階級が被

支配階級をもつてゐるといふ事實から必然に被支配階級、反抗階級の思想的武器として生れるのだ。第四階級の中に生れるのであつて宙に生れてそれが第四階級をつくるのではない。階級の對立といふ事實が必然に文學の階級的對立を來すのである。この點はもう少し説明する必要がある。

二

今日の文化は、今日の社會の二大階級、即ちブルジョアとプロレタリアの何れにも屬しない中間的の知識階級に支へられてゐるのであるといふ思想は、中間階級自身の内部に彌漫してゐる思想である。

この思想を分析して見ると文化は階級を超越したものであるといふ假定と、知識階級は階級を超越した階級であるといふ假定とがその根柢に横はつてゐるのを發見する。従つてこの假定を検査することによつて前述の中間階級思想の正否を定めることが

出来る。

知識階級とは何であるか？ 先づこの問題を考察しやう。今日の社會の一特徴は社會的分業といふ現象である。各種労働の分擔といふことは、今日の社會に於てのみならず今後の社會にも必要であることは勿論であるが、今日の分業は資本主義的であるといふ點にその特色を持てゐる。而して資本主義的分業、即ち賃銀制度の上に行はれる分業は、所謂頭腦労働者と筋肉労働者との間に境界線を設ける。そしてその賃銀率に非常な差別をつける。國家の高級官吏や會社の重役から掃除人夫に至る間には同じ賃銀労働者にしても到底想像することの出来ない賃銀の差別がある。従つて賃銀制度の矛盾は先づ下層労働者の意識に反映し、労働運動は主として筋肉労働者から起つて來るのであるが、この際資本家から高率の賃銀を受け取てゐる中以上の頭腦労働者、並に中以下にしても資本家的制度の下に知識階級的の誇りを感じてゐる憐むべき犠牲者等は、意識的或は無意識的に自己が今日の支配階級と密接な利害關係を有すること

を感じる。然るに自己は資本をもつてゐない。そこで自らブルジョアでもプロレタリアでもない中間的の公平な階級であると信するのである。明かに彼等はプロレタリアではない。又ブルジョアでもない。たゞブルジョアのバラサイトなのだ。ブルジョアの思想を呼吸しブルジョアによつてのみ存在してゐるのだ。

今一つの賃銀制度の社會に於ける特色は辯護士、醫師、僧侶著述家其他無數の自由職業家の存在である。これ等は大抵支配階級の爲めに存在する。従つてこれは暮し向きのよい頭腦労働者と利害を共にする。知識階級とはこれらの一團に過ぎないのだ。それは獨立の一階級ではなくて支配階級のもつてゐる裝飾物、居候に過ぎないのだ。支配階級なしには存在し得ない附屬階級なのだ。

これ等のものゝ存在することは少しも階級對立を緩和するものではない。却つてこれ等の集團そのものが對立せる階級の二つのキャンプの何れかへ投ずることを餘儀なくされる。今日の社會に存在するあらゆる集團、あらゆる職業に従ふものは悉く何れ

かの階級に屬してしまふことになるのだ。

既にこの對立が事實である以上、此等の何れにも屬しない階級を超越した文化といふものは存在し得ないことは明白である。従つて或る時代の主流文化は常に支配階級の文化であるに對し、常にこれに對立する被支配階級の文化の萌芽がその内部に存在してゐるといふことになる。今日の支配階級はシエークスピアの戯曲やロダンの彫刻を尊重するではないか、それでも君は支配階級の文化を排斥するののか。それは古來からの文化を全部排斥することになるぢやないかといふ人があるかも知れない。成る程一應はその通りである。彼等は大金を投じて美術品を買ひ占めるかも知れない。ハムレットを上演して見物に出かけるかも知れない。天晴な藝術擁護振りである。貨幣が藝術を保護してゐるのだ。無産者を藝術に近附けない爲めには、これ以上保護者として適任なものは見つかるまい。併し吾々はこれを人類文化と言はずブルジョア文化といふ。ブルジョアがその階級の爲めに人類の文化を買ひ占めて獨占了る所では人

類の文化の擁護ではなくて文化の獨占である。

プロレタリアの文化は別にある。それは少數の人の爲めの文化でなくて、多數の人の文化だ。それはまだ萌芽だけしか現れてゐない。それはプロレタリアが實力を獲得して來るにつれて成長してゆくべきものだ。そしてやがては全人類の文化となるべきものだ。併し今の所吾々は人類文化といふ言葉を餘り高調してはならない。吾々にとつて當面の問題は階級文化の樹立である。第三階級の文化に對して第四階級の文化を樹立することである。所で階級文化は階級をはなれて宙に育つものでないから、第四階級の文化を樹立するには第四階級の實力を養ふことが先決條件となるのである。

三

以上の簡単な分析によりて「知識階級に支へられてゐる人類の文化」といふ幻影は消滅した。そしてその代りに吾々は階級文化をもつた。

第四階級の文學と私が言ふのは此の第四階級文化の文學的形式を言ふのである。私は第四階級そのものが力を獲得してくるにつれてこの階級文學が當然起つて來るものだと思つてゐる。今日の支配階級やその寄生物はあまりに露骨な金錢關係の文化をかくす爲めにダンテでもシェークスピアでもトルストイでも手あたり次第にその裝飾品として、これは人類の寶だといつてその實一階級の獨占にしてしまつてゐる。此等の天才が人類に呼びかけた聲を途中で横どりしてゐる。

そこで第四階級の文化運動は第一に過去の文化の回復運動となる。それは教育である。これは仲々難事業だ。暇がない。多く教育機關がブルジョアの手握られてゐる。

第二に新しい文學(文學のみについて言へば)を創作する方面である。これは今日までの大文學者が既に手をつけてくれてゐる。ドストエフスキーでもゴリキーでもトルストイでもローランでもバルビュスでも、フランスでもシヨオでも、近代の大作家に第四階級文學の萌芽をもつてゐないものはない。それは今日の階級制度を此等の人々

が謳歌してゐないからだ。そこで吾々はこの萌芽を成長させ純化させることで十分だ。けれどもそれが十分に成長して眞の人類文學が生れる爲めには單に階級がなくなるのみでなく階級的遺傳が吾々の感情から姿を消してしまふ時を待たねばならぬ。その時に新時代の天才によりて眞の民衆文學が生れるだらう。それは單なる成長、純化ではなくて革命だ。

それまでの當面の文學、第四階級の文學は全人類に和樂と希望を與へる氣遣ひはない。多數の民衆には希望を與へるだらうが、少數の特権者には戰慄を與へるだらう。

何となればそれは彼等の特權に對する民衆の抗議だからだ。海濱や温泉場の居心地のいゝ旅館でおこる、生ぬるいラヴ・ストーリーにのみ人間の葛藤を見る批評家がある。成る程人間といふものは脊椎動物で、手が二本足が二本あるごとく、痛いとか可笑しいとか、悲しいとかいふ共通の感情をもつてゐる。それが書いてあれば人間性に觸れてゐる文學として通るなら、これ位樂な仕事はない。

かういふ人は貞操や良心が金で買はれる芝居を見てもそこに絶対の人間性を見るに相違ない。併し第四階級はそこにブルジョア化された人間性を見ることになるだらう。さうしてさういふ事柄に對する反抗に他の人間性を見るに相違ない。

有名な新進劇作家近藤經一氏は「民衆といふものは如何なる時代如何なる國に於ても、これを他からひつぱり上げなければ、決して向上し、發達することのないものだから従つてこの民衆といふものをのみ眼中におき、そのみを相手にしてゐる場合、決して演劇のみに限らずすべての藝術（もつと本當を言へば、藝術のみに限らないのだが）に於ても、そのものゝ發達、向上は望み得ないからである。さうだ。民衆を相手にしてゐては藝術の進歩はおろか藝術そのものをも求め得ない。であるから若も日本の演劇を發達させたいと思ふならば、先づ他の如何なる藝術もさうしなければならぬいやうに、日本の演劇をその民衆なるものと引き離してしまはなければならぬ。」と言ふ。

明快直截に近藤氏は藝術を民衆から取り上げてブルジョアの裝飾物とせよと主張した。氏の主張をまつまでもなく事實さうなつてゐるのだ。しかし民衆はブルジョアの魔法の杖でひつぱり上げて貰ふことは御免蒙る。民衆は壓迫され、おしつぶされてゐながら、着々獨立の藝術を形成しつゝある。

この民衆は、今に彼等の芝居よりももう少し上等の芝居を書いて、改めてブルジョア藝術家のお歴々に今に御挨拶申し上げるだらう。藝術文學を民衆から切り離せよ！ 民衆は新しい藝術文學をつくつてゆく、それが第四階級の文學である。

(一九二一年十一月)

唯物史觀と文學

一

人或は言ふであらう。『勿論、宗教的、道德的、哲學的、法律的の觀念は歴史の進歩と共に變化した。けれども宗教、道德、哲學、政治、法律等は此の變化をうけずに生きのこつてゐた。』

『おまけに、凡ゆる社會状態に共通の、自由とか正義とかいふ永久眞理がある。ところが共產主義は永久眞理を抹殺してしまう。それは凡ての宗教、凡ての道德を新しい基礎の上に構成する代りに全然廢してしまふ。だから共產主義は過去の一切の歴史的经验と矛盾するものである。』

此の批難を要約するとどうなるか？過去に於ける一切の社會の歴史は階級對立の發

展であつた。異つた時代に異つた形態をとつてくる階級対立の歴史であつた。

けれども階級対立が如何なる形態をとつたにもせよ、社會の一部が他の部分に搾取されたといふことは過去の全歴史に共通の一事實である。だから過去の時代の社會的意識が複雑多様な相を示してゐるにも拘らず、それは或る共通の形態或は一般觀念の中に動いてゐるのであつて、これは階級対立が全く消え去らない限りは完全になくならぬといふことは怪むに足りぬ。

共產主義革命は傳統的財産關係との最も急激な分裂である、故にその發展と共に傳統的觀念との最も急激な分裂が起るのは不思議でない……マルクス。

マルクスは社會主義に對する小ブルジョアの批難に對して七十餘年前に以上の如く答へた。マルクスにとつては一定時代の法律や道德や宗教等は多かれ少かれ支配階級の利益を包藏してゐる階級的偏見に他ならなかつた。而してこの偏見から完全に解放される爲めには階級のない社會をまたねばならなかつた。文學は法律、道德、宗教、

哲學と共に社會的意識の一形態、一要素である。そこで一時代の文學は多かれ少かれ支配階級の階級的偏見に感染することは此の疑ひもない。而してこの階級的偏見のよつて來るところは、階級対立を生せしめる社會的生產關係に他ならぬことも疑問の餘地がない。文學と唯物史觀との關係はそこに潜んでゐる。ところが小ブルジョアの「思想家」達は昔も今もこの明白な事實を受け入れない。

唯物史觀は今や中間階級アイデオロジストの非難的となつてゐる。しかも多くの新しい學説がさうであつた如く、而して唯物史觀が七十餘年前にさうであつた如く、甚だしい、誤解、曲解、通俗化、脱骨、中傷の犠牲となつてゐる。

唯物史觀の如き時代後れの淺薄な學説に従ふのは學者文人の恥辱であるとして、「現代文化」の支持者達は雄々しくも唯物史觀征伐の十字軍を起して來た。さうして彼等はこん度も亦易々の唯物史觀の首級をあげて凱旋したのである。嗚呼しかしながら、その首級は正眞まぎれもない唯物史觀のそれであつたか？ 否それは彼等のイリュージョ

ジョンであつた。彼等自身がこしらへた唯物史觀の模型であつた。どうしてそんなことが生じたか？

二

近世の自然科学は丁度唯物史觀と同じ運命を経て來た。宗教家、神學者、倫理學者、哲學者、文學者等は、自然科学誕生の前後に於て甚しい恐慌を來した。そうして次には結束して此の幼兒を虐殺しようとした。權威ある故人をしてこれを語らしめよ。リッチー教授は言ふ。

『科學概念の變化に對する干渉は、人間の精神を重んずる人々によりて從來たえず行はれた過失である。かゝる干渉は常に當時勃興しつゝあつた科學の爲に棄てられた中途半端な科學的學說の支持者の敗北に終つた。神學はガリレオに干渉したが、其干渉に依て何等得る所がなかつた。天文學、地質學、生物學、人類學、歴史學等は屢々、物

質的人間説を恐れてゐる人々の心を震撼させた。彼等はダーウイン説とラマルク説の相違等をもつての幸として新學說と戦はうとした、恰も人類の精神的幸福が十七世紀若しくはそれ以前の科學的信仰と密接不離の關係があるかのやうに：(Prof. Ritchie, Philosophical Studies)

これは丁度マルキシズム、サンチカリズム、アナーキズム等に依て唯物史觀に對する解釋を異にしてゐるどさくさ紛れに十八世紀乃至十七世紀の科學前派のヒューマニズムを提出して、鐵と石炭と電氣とに依て動かされてゐる近世産業問題を解決させようとする勞資協調人道主義者の心理其儘である。おまけに彼等も亦人類の精神的幸福が資本主義經濟組織と密接不離の關係があるかのやうに思つてゐるのだ。

三

勞資協調派、無抵抗主義者、人道主義者、等が一刀のもとに退治した唯物史觀の白

髮首とは何であるか？ それは古代希臘にさかへた唯物的形而上學である。タレーヌやヘラクライトスの原始的唯物哲學は、その後幾度か時代の衣をつけて各時代に出現した。最近に於ける自然科学の發達はエネルギーの概念を發達せしめ、オストワルドの如きは物質概念を捨て、エネルギー一元論を唱へた。唯物的形而上學が舊衣をすて、十九世紀乃至二十世紀の新衣と着更へたのである。

ところが此等のメタフィジシャンは、宇宙の實體或は本體は何であるか？ といふ問題を解かうとしたのである。而してこれに對しては希臘時代にはプラトーンやアリストテレスが、近世にはカントが、最近には新カント派が既にそれぞれ解決を與へてゐる。今日では哲學は知識の問題に、科學は物理的世界の問題に自己の職能を局限して宇宙の究極的實體といふやうな問題には觸れない。唯物史觀は多くの批難者がいふやうに形而上學ではなくて形而上學に對する死刑執行人の一人なのだ。

近世の文化的教養を授け、精神主義の福音に酔はされた人々は攻撃の相手を見失つ

た。尤もまだ『綜合文化』といふやうな怪物をかゝげて『今の科學者は物質萬能で人生を解しない』などといふ非難をする者がある。併しながら科學は本來物的現象の學問である。物的現象を支配するものは物的法則のみである。科學者が物質の研究をしてゐるから物質萬能だなどといふ非難は少くも地上では通用しないのである。

唯物史觀によれば社會の一切の現象は進化する。唯物史觀の哲學は進化の哲學である。而してこの進化はヘーゲルがやつたやうに思惟や觀念の進化から説明することは出来ぬ。反對に思惟や觀念の進化は物質的進化の反映であり、物質的進化に對應する。物質的條件、即ち生産關係が行き詰つてその内部の革命的要素が活潑に發展する時は社會の意識形態は革命的となる。十八世紀や今日がそれである。物質的條件が完全に一階級の支配に統一されてゐる時は社會の意識形態は平衡を保つて所謂平和思想が瀰漫する。十九世紀がそれである。日本では明治維新時代や源平時代や戰國時代が革命的時代であつた。元祿時代や明治時代が平和時代であつた。而してその都度文學も

それに對應して進化した。源平時代の軍記物には貴族に對する武士階級の革命的思想が現はれ、維新前後の志士の言論には行き詰つた封建制度に對する新興階級の革命的思想が現はれてゐる。

明治文學、革命的ブルジョア文學のチャンピオンであつた坪内逍遙の『小説神髓』には文學が勸善懲惡から獨立すべきことが強調してある。この場合勸善懲惡は絶對的意味をもつてゐるものでない。善は封建制度の善であり、惡は封建制度の惡である。そこで封建制度が亡びてしまへばこの種の勸善懲惡はもう意味をなさぬ。『小説神髓』は文學に於ける封建社會の殘滓に死刑の宣告を與へ、ブルジョア自由主義をこれに代へたものであつた。

四

マルクスは『經濟學批評』の序文で簡潔にこの關係を言ひ表はしてゐる。「人類の生活

を決定するものは意識ではない、その反對に人類の社會的生活が彼等の意識を決定するのだ」と。彼に従へば人類の意識或は思想、所謂上部構造(文化)が人類の物質生活を決定するのではなくて、人類生活の物質的條件がそれ等を決定する、故に歴史の基礎は物質的であるといふのである。

更にマルクスは「哲學の貧困」にこれを詳説してゐる。曰く「社會關係は密接に生産力と關係してゐる。人類は新しき生産力を獲得することによりてその生産様式を變化し、その生産様式、生活資料を獲得する方法を變化することによりて、その一切の社會關係を變化する。風車と共に封建社會が存在し、蒸汽機關と共に資本家社會が生れる。

物質的生产に一致せる社會關係を樹立した同じ人々は又その社會關係に一致せる、原理、觀念、範疇を生じさせる。

かくの如く此等の觀念、これ等の範疇は、それによりて表現されてゐる社會關係以

上に永遠ではない。これ等は歴史的、一時的の産物なのだ。」

五

如何に藝術の永遠を信ずるものも、徳川時代の文學と明治時代の文學とに變化がなかつたと主張する勇氣はないであらう。此の變化は何によつて生じたか？ 唯物史觀はそれは物質的變化によつて生じたのであると解釋する、社會の生産關係の變化に基づくものと解釋する、抑も唯物史觀はこの變化或は歴史のみに對する説明であつて、發生や起原を説明しようとはしないのである。況んや物質が全部であつて精神文化は閑却してもよい等とは主張しないのである。

ところが文學者、藝術家はこの點に於て美妙的な、誘惑的な曲解を行ひ、唯物史觀は精神文化を破壊するものだといふ。それは中世紀の坊主が地動説は神に對する冒瀆であると非難し、近世の宗教家が進化論は聖書に悖ると非難したのと同斷である。進化

論によつて人間の祖先が動物であるといふことが證明されたら人間の戀愛も道德も審美感も成立しないだらうか？ 吾々は大抵原始時代の人間と動物との距離がごく近いことを知つてゐる。併しながら戀愛もすれば、審美感も動く。

それと同じく人間の歴史が物質的條件によつて決定されるといふ事實があつても精神的文化は依然として吾々の最も尊重しなければならぬものなのだ。唯物史觀を信ずる人は精神文化を閑却するどころか却つてこれを尊重する。だから資本主義によりて樹立された今日の文化の代りにもつと上等な文化を實現しようとする。その爲めにその支柱となつてゐる物質條件を變へようとするのである。ところが「現代文化」の支持者達は資本主義文化を、物質的條件には無關係な永遠の文化だと思つてこれに反對するのだ。唯物史觀は文化そのものに挑戦したことはない。たゞ唯物史觀を理論的背景とする社會主義はある特定の生産條件の上に樹立された文化に挑戦するだけである。

けれども「現代文明」の支持者達は尙ほひるまない。文化は永遠であつて決して物的條件の爲に變化しないといふ。人間は太古から今日まで同じ人間であつて少しも變化しなかつたといふ意味に於てなら僕も藝術や文化の永遠を信じる。併しそれは歴史の否定であつて、歴史を否定する限り歴史觀たる唯物史觀は當然消滅して問題は残らなわけだ。唯物史觀は歴史を肯定してその一の觀方、研究方法としてのみ意味をもつのである。最もわかりやすい例で言へば昨今しきりに問題になつてゐる映畫藝術は決して觀念から生れたものでなくて、或る時代に活動寫眞が發明された爲めに生じたものである。もつと精神的な問題について言へば尊王討幕といふ思想は幕府の横暴、皇室の式微といふ當時の社會條件があつて生じ、自由民權の思想は人民の權利が壓制されてゐたといふ特殊の社會條件によつて生じたのである。而してこれ等の社會條件は最

後にこれを物的或は經濟的條件に還元することができるのである。

最後に文學藝術の方面から唯物史觀に對してあげられる反對の叫びの中には唯物史觀は文學的氣分乃至は情操にびつたりあはないといふ理由からこれを排斥しやうとするのがある。こんな亂暴な言ひ分がとほなるなら、數學は藝術を否定せねばなるまい。文學は物理學を否定せねばなるまい。併し事實吾々は二二が四といふ數學の原理を信じつゝ熱烈に愛しあふことが出来ると同じやうに、唯物史觀を信じつゝ藝術を創作し鑑賞することが出来るのである。たゞ凡俗なセンチメンタリズムが文學の名に於て歴史の事實を朦朧化し、二十世紀の現代に眼を閉ぢさせて民衆を昔し／＼のお伽噺に連れてゆかうとする時、唯物史觀は儼然たる事實を示す必要があるのである。

繰り返して言ふが唯物史觀は文化に挑戦するものでも、これを蔑視するものでもない。けれども歴史とその必然を信するが故に永遠に藉口して「歴史的・一時的」の文化を擁護する守舊派に挑戦する。唯物史觀は形而上學でないから物質が萬能だとは言はな

い。歴史は物的條件によつて變化するといふだけである。快感が起つてからピアノの音がするのでなくてピアノの音がしたから快感が起つたといふまでだ。

併しながらこの簡単な真理から生ずる結論は重大だ。物的條件が精神文化を決定し階級對立が文化の上に階級的偏見を印するといふことから必然に、文化から階級的偏見を取り除くためには階級對立を先づ廢止しなければならぬといふ結論が生れる。過渡期に於ては生産關係に革命的要素が増大すると同じく、その一意識形態なる文學にも革命的要素が増大して來るのである。(一九二一、一一)

死の文學から生の文學へ

一

文壇といふ言葉は今日餘程局限された意味に用ゐられてゐる。これは縦には時代、横には世界の生きた精神と没交渉な雰圍氣に圍まれてゐる國の、舊い偏見と習慣とに武装された文壇には當然の川語法かも知れない。無論私がここで議論の對象とする文壇も、此の文壇を離れて存在し得ないのであるが、しかも私は毎月雜誌に發表される作品や批評によりて、構成されてゐる表面に現れた文壇よりも、寧ろかゝる作品を生ぜしむるに至つた土壤、即ち文藝家を中心とする一團體の傾向をざつと論じて見たいと思ふ。

何となれば今日の文壇は、その構成分子たる作家個人々々の優劣を論じたり、その

思想や主義を研究したり、その描寫上の技巧を比較したりとする以前に、もう少し一般の見地から批評される餘地がある。尤もこれは文壇のみの問題でなく、此の問題のみが文壇の問題でもないのだが、少くとも次に私がのべることは文壇にも無關係ではないと私は信ずる。個々の犬に向つて「何故お前は四つ匄ひで歩くのだ？」と訊ねて廻つても一向要領を得ないのは四足獸が四つ足で歩くのは彼等の自由意志によるのではないからだ。それと同様に今日の文壇の人に向つて「何故もつと價値のある作品を書かないのか？」と問ふても、彼等にとつて殆んど仕方ない問題が、そこに伏在してゐるのだ。吾々は吾々の意識から獨立した社會條件の中に投げこまれるのだ。

今日の文壇が内部からもだが、主として外部から非難の的にされてゐるのは個々の作家の責任よりも、寧ろ彼等を包む文壇といふ雰圍氣の責任の方が遙かに大きいやうに思はれる。此の點に就ては私は社會主義經濟學者が社會的不正義の責任を個人よりも社會組織に歸する意見を殆んどそのまま文壇にあてはめることが出来ると思ふ。

「元來予の立場は社會の經濟的形態の發達を一箇の自然史的行程と解するものであつて、此の立場よりすれば、個々人は主觀的に如何程諸關係を超絶しても、社會的には依然としてその被造者である。随つて予の立場は他の凡ての人の立場に比べて個々人に此の諸關係に對する責任を負はしめ居ることが少ないのである」とはマルクスの言である。「ペシミストは、社會的條件を一の冷酷無情なる必然的法則によりて繋がれた組織であつて此の組織は全體の社會に一纏めに與へられるものであるから、之れを取り除く爲めには全體を破壊してしまはなければならぬと見做す、故にペシミズムを信する人が社會の惡に對する責任を個々人の惡に歸するは矛盾である」とソレルは言つてゐる。

併しながら社會の關係に就てもさうだが文壇と個人との關係に就ても個人に全然責任がないといふ議論には一定の限界がある。此の點に於てドイツ學者流の辯證を、唯一の思索の武器と考へてゐる人達は、自己の考へが何時のまにか事實と離れて空想の

領土に迂りこんでしまつてゐることに氣が附かない。文學の界隈に、
唯の、ヤ、
辭會の、
之れと同じく私が前に假々の作家によりも文壇そのものにより多く責任があると言
つたのは、今日の作家が救はれないものであるとの意味ではない。救はれないのは今
日の文壇そのものだ。これを脱することによりて今日の作家は救はれる。これを脱す
るのがどれ位困難なことかといふことは人間が習慣と偏見とから脱するのがどれ位困
難であるかといふことと同じである。表面に現はれた文壇は少數の人の團體だが、そ
の根は社會全體に張つてゐるからだ。併しこゝで個人の努力は無意義ではない、それ
所か社會のソリグリテを信する人にとつては、個人——従つて作家は今日の文壇から
脱する強制的義務をもつてゐるのだ。一寸こゝで斷つておくが脱するといふのは筆を
すて、田をつくれと言ふことではない。脱するとは破壊することだ。しかし、破壊と

逃避とは同じではない。破壊のためには對抗が先づ第一に必要なだ。

二

「現代の吾々の仲間の藝術は淫賣になつてしまつてゐる」とトルストイは言つた。今
日の吾が文壇を評する言葉としてもこれ程適當なる言葉はなからうか。

私はたゞ徒らに漫罵して下等な快を貪らうとするものでなければ、かゝる漫罵が無
價值であることも知つてゐる。又すべての作家と作品を等質に無差別に見てゐるので
もない。少くも其の人自身は眞劍になつて人生を見、藝術に對してゐる人があること
を見逃すわけには行かない。併しさういふ人でも文壇といふ氛圍氣の中毒に全然感染
せずにはゐられないことは事實が證明してゐる。例へば最も狭い意味の文壇に殆んど
關係のない同人雑誌を見るが、そこに見出されるのは透きとほるやうな、新鮮な、
純粹な藝術の萌芽ではなくて、伸びんとする力を失ひ、人生を直視するすなをさを缺

き、就中正しいものゝ爲めに戦はんとする勇氣を缺いた造花に過ぎないのだ。これが二十歳前後の青年の態度だ。彼等は自己の態度を眞面目だと思つてゐるに相違ない。又實際眞面目に相違ないのだ。併し彼等の眼が何を直視出来るか？ 偏見と習慣を頭の中へをしこめられ、蓋惑的のイリュージョンに圍繞されてゐる彼等の眼が何を直視出来るか。此の眞面目は彼等自身にとつて尊いものに相違ない。併し此の眞面目は多くの場合舊い文壇の地盤を固める漆喰になるのだ。ちやうど資本家の搾取の餘滴に感涙に咽んだり、資本家個人の善良な性格に眩惑して、遂には資本主義そのものをも謳歌するに至る、善男善女と同様の役割をつとめることになるのだ。つまり此の眞面目は集團生活を標準として考へると、不眞面目となるのだ。人生をいゝ加減に見てすましてゐることになるのだ。

三

一時文壇に唱道された所謂人道主義の不徹底はあまりに涙を浪費することである。彼等は富める人にも貧しき人にも同じやうに涙を與へる善人にも悪人にもひとしく涙を流す。歴史あつて以來一人か二人しかない基督のやうな人が凡ての人の上に涙を流す。いまだ心持は吾等にも想像だけではできない。併し基督でさへも「富めるものゝ天國に入るは難きかな、富める者の天國に入るは駱駝が針の穴を通るよりも難し」と言ひ、「汝は神と財とに兼ね仕ふる能はず」と言つてゐる。富めるもの、人類にわかすべき幸福を私せるもの、今日の言葉で言へば資本家に對する基督の態度は今日の社會運動家のそれよりも更に峻烈であつたことがこれでわかる。更に基督が貧しき者に與へた言葉を見るがいゝ。彼は言ふ「凡て勞れたるもの、又重きを負へる者は我に來れ、我爾曹を息ません」又言ふ「貧しき者は幸なり天國は爾曹のものなれば也」又言ふ「其の財産を賣りて悉くこれを貧しき者に分てよ」

凡てのものに涙を流す態度は、凡てのものをそのままに肯定する態度と隣りあつて

ゐる。そして吾々のやうな凡人はすぐにそれを混同してしまふ。殊にそれが凡庸な藝術家である場合には藝術家の主観は明鏡の如く凡てのものをありのままに寫し、そこに善悪邪正の如き非藝術的批判が混入してはならぬといふ描寫論が直ちに人生觀上の無差別論と混同され勝ちである。かゝる無差別論の必然的結果は惡を獎勵し善を絶望させ墮落させるだけの取柄しかないのだ。現在を肯定し進化を阻むだけの取柄しかないのだ。しかも『明鏡の如き主観』などはさうざらにはない。

故に吾等はもう少し涙を惜まねばならぬ。人間一般の幸福の爲めには、その障害となるものが或る意味では價値をもつてゐても、これを排斥し、これと戦ひ、これを破壊しなくてはならぬ。

成心を捨て、公平無私に事象を見ることは藝術家にとつて必要缺くべからざる態度である。併しながら公平の名に於て安價に涙を浪費してはならない。何となればほんとうに悲しまねばならぬ時、ほんとうに涙を流さねばならぬ時に彼等の

涙は涸渇してしまふからだ。かういふ人が涙の安賣、同情の投賣をするのはプロスチチュートと何の選ぶ所があらう。而して其の必然の結果は度し難き冷淡だ。凡てのものに對する安價な同情は凡てのものに對する無差別の冷淡と變じてしまふのだ。こゝに文壇に對する一般世間の不満や憤懣の原因があるやうに私には思はれる。

四

イタリヤの批評家マツチニはカーライルの「フランス革命」を評して次の如く述べて居る。「公平といふことは熱心と確信とを排斥するものでもなければ、相敵對せる二つのキャンペーンの何れかにつくことをも排斥するものではない。たゞ時々正義の旗を汚す不正を隠したり、美化したりしてはならないといふ義務を課するだけだ」此の言葉は我々の文壇にもあてはまらないだらうか？ 小説家の合言葉となつてゐる「ありのまゝ」といふ言葉は批判と熱心と確信の缺如をおほふカムフラージュとなつてゐるやう

な事實がなからうか。

公平(インバーシアル)は、冷淡(インディファレント)の別名ではない。毒にも薬にもならぬ思想は思想ではない。相反する二つのキャンプの双方から喝采されるやうな思想は思想ではない。勿論これは人類一般の大問題に對して明瞭に社會が二つのキャンプに分れてゐる場合のことを言つてゐるのだ。カーライルの「フランス革命」が各方面から喝采を博したのをマツチニが「この事は此書物の大なる長所であると同時に大缺點だ」と斷言したのは卓見であると言はねばならぬ。

併しながら、作家はかゝる問題を取扱はねばならぬ義務は少しももつてゐるのではない、社會がどれ程危機に瀕しやうと官能描寫に専念してゐるのは作者の勝手だ。けれどもつぴきならぬ社會關係の切迫に面接してかゝる態度をとり得るものが幾人あらう。ロシアの農奴解放前の文學者の態度を見るがよい。ドレイフユース事件に際してフランス文學者のとつた態度を見るがよい。少くも識見ある大作家大批評家が一人

だつて今日の吾々のやうな冷淡を示したか。あだかも作者は人間を廢業したかのやうに、一ヶ月の血と汗の代償が五十圓足らずで報ひられてゐる階級と、懷手して巨萬の富を私してゐる階級とを包容してゐる社會の中で、手際が鮮かだとか、言葉が洗練されてゐるとかいふ、天下泰平の時代の閑で困る茶人によつて、何百回となくむし返された問題を、事新しく論じてゐることが、果して文人作家批評家の本來の仕事なのだらうか。かゝる閑仕事の爲めに彼等は人間としての義務を免除され得るだらうか。

高遠な思想家、哲人、豫言者を以て任ずる人達は、かゝる俗世間の問題は人間の本質に關する問題ではない。貧しきもの必らずしも不幸ならず、富めるもの必ずしも幸福ではない。かゝる問題は一部の社會改良家にまかせておけばよい、文學者にはもつと別の仕事があるといふ。けれども悲しい哉貧しき者はかゝる高遠な思想をもちあはせてゐない。富と貧とをイクオールで結びつけるやうなロジックを持ち合せてゐない。彼等は生存慾とこれの滿されざる苦痛とを知つてゐるだけだ。腹が空けば苦しいとい

ふ實感を知つてゐるだけだ。又一體別の仕事とは何だ。社會改良家にまかせておけば何事だ。吾々は自分の病氣を他人にまかせておくことが出来るか。それが文學者であらうと政治家であらうと、商人であらうと、かゝる冷淡は許さるべきでない。

五

今日の文壇にいゝ作品が出ないのは文壇がコンマーシアリズムに墮したからだといふ議論が文壇の内部からよく發せられる。洵に尤もなことである。然らばどうしてさうなつたかと言ふと要するに社會が文學者に相當の待遇をしない、そこで澤山書かなければ食へないから勢ひ亂作することゝなり、その結果はいゝものが書けないといふことになるのだといふ。これ亦尤もな論理か知れぬ。それではどうすればいゝかと言ふと、一言で言へば原稿料を増せといふことになる。所がこれが問題だ。今日の社會制度に於ては藝術作品が多數人の目に觸れることが出来、且つ資産をもたずして天分

をもつてゐる人が作家として生活してゆく爲めには作品は商品として取扱はれるより他に道がない、さうだとすれば作家の今日の社會組織内に於ける經濟的關係は労働者と少しもかはりがないことになる。さうなると作家が生活の保障を希望する理由は労働者がこれを希望するのと少しも變りがないことになる。そこで作家は生活の安定、原稿料の値上げを叫ぶ前にもつと一般的な問題にぶつからざるを得ないので。これにぶつかることを避けて藝術家のみの特權を要求しやうとするからこそ、蟲のいゝ太平樂が出てくるのである。

資本制度はどうしても労働者の頭があがれないやうに出来てゐる制度だ。丁度資本家と労働者との關係は分母と分子の關係だ。賃銀増額は或る程度から先は分子と分母とに同じ數を掛けるやうなものだ。原稿料が一圓から三圓になつた處で家賃が十圓から三十圓になれば同じことである。故に文學者に社會が相當の待遇をしないからいゝ作が出来ないなどいふことは單獨では意味をなさない言葉だ。寧ろいゝ文學が出な

いことには、もつと根本的な問題が文學者にもあるといふことを證明してゐるものだ。

文學者が資本家から特別の待遇をうけたら、文學作品がよくなるといふやうなことは決して有り得ない。却つて悪くなるかも知れない位だ。なせならそれは今日の社會では結局他人のパンの略取によりて築かれた幸福であり自由であるからだ。此の自由この幸福を謳歌するとき吾等の魂はブルジョアジイのためにむしばまれてゐる。吾等は吾等自身の幸福を人類全體の幸福以外に求めてはならない。さうでない幸福から生れた作品によりも、人類と共に不幸なる生活から却つて貴い藝術は生ずるだらう。そこには尊い生きた反抗があるからだ。だから吾等は無産階級の運動として以外に卑屈な待遇問題を口にしてはならぬ。

文壇がツリヴィアリズムに墮したのを、吾等は作者に對する社會（資本家といつても同じだが）の待遇がわるいせいにする。さうして前と同じやうに社會全體はそつとしておいて此の問題だけを解決することが出来ると思つてゐる。けれどもツリヴィ

アリズムの原因はさういふけちな了見そのものだ。吾等がほんとうの問題を忘れてしまつたからだ。眞の問題を忘れた時にくだらないものが問題となる。そこで枝葉文學がさかえる。

六

ロシア革命は少くもロシア國民に希望を興へたといふやうな意味のことをバートランド・ラッセルが言つた。その當否は知らないが吾等にも是非與へられねばならぬのは希望だ希望のない所には力もなく反抗もなく創造もない。あるのはたゞ服従と靜止と滅亡だ。さういふ社會から生れる藝術がツリヴィアリズムの藝術だ。根本的大問題について確信がなくなり、見當さへもつかなくなる時、人間はその場／＼の問題しかもたなくなる。さうした問題は人生の根本問題とは何等の交渉をもつてゐない。ツリヴィアリズムの作品といふのは作品の材料が日常茶飯事に過ぎぬといふだけでなく、

むしろ根本精神を缺いてゐるといふことだ、これは狭い意味の文壇だけでいくら議論したところで駄目な話である。社會に對し人生に對する態度がしつかりとして來ればもはや仲間小説だとか何とかいふ非難を受けなくともすむやうになる。何をかいてもそこに動かし難い眞理があるからだ。

併しながら吾等が希望を與へられねばならぬと言つたのは、吾等の態度がオプチミズムにならねばならぬといふことではない。安價なオプチミズムは希望ではなくて、一陣の風にも雲霞夢消すべき運命をもつた幻影である。眞の希望はあらゆるペシミズムの上に築かれねばならない。最悪を豫想して尙ほ自己とその同胞との努力に信賴する悲愴なる希望が眞の希望だ。此の希望は時が與へはしない、「時は一切のものを治癒する」といつた哲人の語は人間の努力を否定した絶望の聲だ。一切の解決を時の力に一任したら資本制度が崩壊する前に人類が滅亡するだらう。

絶對的絶望は個人の煩悶の解決法としては最上のものであるかも知れない。併しな

がら集團生活の一員として人間は自己の勝手放題に自己を處置する權利はもつてゐない。少くも生きん爲めに苦しむ同胞がある間は最後の血の一滴までも集團生活の向上の爲めにさゝげなければならぬ。

それには何からはじめたらいいか？ 集團生活を壓迫する權威に對する反抗だ。反抗は少くも明瞭なる一の態度だ。この態度が確立して來ればそこに生命が生ずる。吾等が失つた生命をとりかへす唯一の道は反抗以外にない。而して反抗の手段は破壊だ。「衰へゆく老人の活動力は内部に集中し、子供の溢るゝ活動力は外部にひろがつてゆく……子供にとつては造るも壊すも同じだ。彼はたゞ變化を欲するのだ。而して變化は即ち活動なのだ。子供が破壊を喜ぶのは惡意があるからではない。建設はまだない。こゝが破壊は手つ取り速いからだ」とルソーは云つてゐる。

成長せんとする子供の心理は同時に將に勃興せんとする階級の心理である。墓場に急ぐ老人の心理は亡びゆく階級の心理である。

反抗と破壊とは新興階級の生命だ。そこから生れた藝術にこそ生命がある。精神のもぬけの殻ではない。新興階級の反抗的、革命精神を呼吸することによりてのみ、死の文學は生の文學として甦る。(一九二二年三月)

ジャアナリズムと文學

今から十五年前に、イギリスの劇作家バーナード・ショーは『凡ての優れた文學はジャーナリズムだ。ジャーナリズムは最高の文學だ』と言つて氣の弱い文學者を驚かした。一九〇七年に小冊紙として出版した『藝術の健全』——この書物の内容はマクス・ノルドウ博士の『頽廢』に對する駁論としてリバイ紙に寄稿したものである——といふ書物の序文で彼は文學の永久性論者を嘲笑してゐる。そして『文學とかいふものはまあ他の連中にやつてもらはう、自分はジャーナリズムで澤山だ』と皮肉とも嘲笑とも謙遜ともわからぬ捨せりふを投げつけてゐる。

凡ての時代に訴へようとする文學は結局如何なる時代にも訴へる力がない。凡ての人類を感動させようとたくらんだ文學は結局誰をも動かすことはできぬ。凡ての階級を代表したつもりの文學は結局如何なる階級をも代表しておらぬ。かういふ文學は誰

の害にもならぬ代りに誰の益にもならぬ。せい／＼のところ、五年か十年の間、實際生活上に甲と乙との兩階級の間を動搖してゐる氣まぐれな中間階級に歓迎され、その階級の崩壊とともに忘られてしまふのが關の山である。近頃流行の『人間性』に根を下してゐると稱せられる永遠文學はその適例である。

如何なる運動も『人類』から起つたためしはない。常に特殊の階級から起つた。キリストは人類に説教したのではなくユダヤの貧民に説教したのである。アナトール・フランスの小説の中にキリストの時代を描いたものがある。それによるとキリストが死んだといふことはエルサレムの僅かばかりの貧民だけしか別に氣にとめてゐなかつたやうに書いてある『貧しきものは幸なり』といふやうな説教は貧民に對するコンソレーションと見るより外に見ようがない。『人が右の頬を打つたら左の頬も彼に向けよ』といふやうな説教は當時のローマの虐政を考慮にをかなければ理解することができぬといふ風に解釋してゐる人がある。ところがこの歴史的事實（勿論これは深い研究の結果

でなければ俄に事實と断定はつきぬがさう假定してをく、少くもこれに類似した事情は存在したに相違ないと思ふ）は傳説の衣ですつかり被はれた。それは多分宗教が支配階級の専制政治の道具につかはれた時代の出來事だらうと思ふ。狐でさへ神化されるのだから貧民の神様が『人類』の神様にかはる位は雜作ないことだ——最近には官僚に對するブルジョアの代辯者が憲政の神様にさへなつた位だから——。だから將來の社會にも宗教が必要であるとすれば、第二の宗教改革は當然必要でなければならぬ。そして宗教から不當な神祕を一切除去し、直接に現實生活と交渉のあるものとしなければならぬ。その結果として宗教が消え去つてしまふなら、それはもう使命をはたして必要がなくなつてしまつたのだから少しもをしむに足らぬ。

餘談はさてをいて、シヨオによれば、プラトーンもアリストファネスもシェークスピアもイブセンも皆ジャーナリストであつた。決して永遠のためなんか筆をとらず、一時代のために筆をとつた。

ところが日本では、永遠のためといふ看板を出さねば藝術家の體面にかゝはるとでも思つてゐる連中がある。そして現代のための文學、現代の現實の問題をとりあつかつた文學は傾向文學、ジャーナリズムといつて擯斥し、雲のやうな宗教や、遊蕩心理や痴話喧嘩にのみ永遠を見る。そんなものが『永遠』であられば『人類』も迷惑するだらう。尤も三十錢の夏シャツにでも七十錢の帽子にでも『ベスト、クオリチイ』といふやうな最上級のマークがついてゐる世の中だから別に驚くものもなければ、さういふ看板をかゝげてゐる人の作品が一ヶ月の後に忘れられてしまつたとて、誰も苦情を申し込みはしない。併し吾々はどうか／＼とそんな廣告につりこまれて、安物買ひの後悔をしてはならぬ。

そこで吾々はシヨオと共に、『永遠の文學』は大學教授や、クリスチャンや、洋行歸りや、流行作家に一任して、ジャーナリストたることを、びくびくしたり、恥しがつたりせず公言しようではないか。吾々のジャーナリズムは、併し、支配階級のあこ

の先と運動を共にするジャーナリズムではなくて現實の社會と共に動いてゆくジャーナリズムである。吾々のジャーナリズムは現實をはなれた硬化した觀念のモザイクで出来た『人類』の死骸や何れの時代をも含まない『永遠』や、人間の生活からはなれた『文學』そのもの、影人形やを極力排斥するのである。

吾々のジャーナリズムは階級をはなれて無差別の世界へ逍遙するやうな離れわざを知らぬ。凡てのアイデオロジイは吾々にとつては階級をはなれて理解することもできぬし、階級をはなれて存在することもできぬ。ホーマーの詩篇に吾々はバーバリズムからギリシヤの文明に移る過渡期の人々の生活と思想とを見る。シエーキスピヤの戯曲にはエリザベス朝時代の平民の生活と觀念とを見る。下つてフランスのロマンチズムの文學には革命的ブルジョアの破壊的思想を見る。

十八世紀は啓蒙時代と呼ばれてゐる。それは貴族の支配からブルジョアジイの支配へ移る過渡期の文明の別名である。この時代の文學（殊に政治形態の變遷が最も明白

にあらはれてめるフランスの文學)は凡て傾向文學であつたといつて差支へない。ジャン・ジャック・ルソーの作品の如きはその適例である。ルソーにしても、ヴォルテイルにしても、之等の人は概して貴族に對するブルジョアの代辯者であつた。永遠に向つて叫んだり、『人類』に向つて話しかけたりするかほりに『革命的平民』に向つて話しかけた。十八世紀に向つて叫んだ。言葉をかへて言へば此の時代の文學は凡て階級闘争の陣列から離れてゐなかつた。それにもかゝはらずルソーの文學は今尙生命(歴史)的のそれではあるが)をもつてゐる。

今日はちように啓蒙時代に似てゐる。現實にあるものはプロレタリアとブルジョアとの階級闘争である。そこで吾々のジャーナリズムは階級闘争の陣列につかんとするものである。吾々の文學の特色が戰闘的とならざるを得ないのはそのためである。當面の敵たるブルジョアとその周圍に隠見する反物群とは等しく吾々の敵でなければならぬ。此の意味に於て、而してこの意味に於てのみジャーナリズムは是認される。そ

してこの意味のジャーナリズムの文學は戰闘文學、宣傳文學である。シヨオの言葉を一層平たく言へば、宣傳文學は最高の文學であると言はねばならぬ。何となればそれは一定の時代に、現實の人間に訴へる文學だからである。現實をはなれた『永遠』や『人類』といふやうな幽靈を相手にする文學でないからである。(一九二二年八月)

ブルジョア文化主義者に與ふ

—

封建社會では、百姓は代々牛馬のやうに働く能力しかないと思はれてゐた。商人は世襲的に算盤をはじく能力しかないと思はれてゐた。軍隊の指揮や、政治上の事務や、學術の研究や、藝術の創造は、大名や公卿や旗本や坊主のみに賦與された能力だと考へられてゐた。文明の支持者たり得るものは彼等以外にないと考へられてゐた。

封建社會からブルジョア社會にうつる時には舊社會の代表者等は、政治の管掌や軍隊の統率が、當時それについて何の知識も經驗ももつてゐなかつた平民のなし得ることだとは夢想だもしなかつた。革命的平民の實力が刻々に加はつて、舊制度の崩解が目睫に迫つても、尙その代表者等は新勢力を蔑視して、その實力を信ずることが出來

なかつた。彼等の眼には平民はたゞ無能力な烏合の衆としか映じなかつた。支配階級の滅亡は同時に文明そのもの、滅亡であり、人類そのもの、不祥事であると考へた。舊制度の代表者中の最も急進的な分子もこの幻覺を脱することが出来なかつた。新制度を樹立すべき階級自身の内にさへも自己の力をさとらないで、遲疑逡巡するものがあつた。フランス革命の場合には貴族出身の急進派ミラボー一派と同じく平民黨のジロンドンも、専制政治の倒壊には第一線に立つて働きながら途中で逆行をはじめた。そして純然たる反動派としてジャコバン黨の爲めに倒された。當時の反動派の一頭目ブリソーは『王政が倒れ、國民公會が最高權力となつた以上は内亂は直ちに鎮定するのが當然だ』と歴史の流れを食ひとめやうとし、『秩序紊亂者(ジャコバン黨)は何もかも平均してしまはうとしてゐる——財産も、快樂も、物價も、國家に對する各種の奉仕も——彼等は勞働者に國會議員の俸給を與へやうとしてゐる、彼等は能力も知識も徳も平均してしまはうとしてゐる、それは彼等がそれを一つももつてゐないからだ』

と悲鳴をあげた。勿論ブリソーの此の言は、凡ての反動派の呪咀と同じく嘘八百の出鱈目が混つてゐるが、『勞働者に國會議員の俸給をやらうとしてゐる』といふ非難の如きは舊觀念に養はれた人々の新制度に對する不安と勃興せんとする階級に對する侮蔑とを最もよく現はしてゐる。明治維新の例をとつても、たゞ幕府だけを倒さうと思つた各藩の藩主等は、封建制度そのものが改革されて自己の舊臣が一躍して明治政府の中心人物となるのを見て侮蔑と嫉妬を交々感ぜたらしい。

二

ルナンは革命といふものについてこんなことを言つてゐる。『表面に於ては、革命は混亂無秩序のどさくさ騒ぎだ。革命といふ戰爭は奇妙なもので、下劣な人間ほどそこでは價値がある。常識と穩健とをのけた以外のものなら何でも役に立つ。白痴、低能、惡人等は乃公の役に立つ時が來たといふ本能的感情によつて革命にひきつけられる。』

革命の成功は凡ゆる罪惡と凡ゆる狂氣との協力によつて成就されるやうに見える。人を殺すことしか知らない人間が時を得てくる云々』

この言葉は新勢力に對する舊勢力の侮蔑を最もよく表してゐる。支配階級は最後まで自己の脚下に起き上らうとしてゐる被支配階級の實力を知らず、最後までこれを見くびつてゐる。それは彼等が歴史を知らないからだ。歴史を知らないから過去の歴史が階級闘争であつたことを知らない。歴史を知らないから、彼等が支配する社會の中にやがて彼等を支配すべき力が動いてゐることを知らない。彼等は彼等自身の支配を永遠だと信じきつてゐる。人類は即ち彼等であり、彼等の利益正義は人類の利益正義であると信じてゐる。彼等以外に社會秩序の維持してゆける人間はないと考へてゐる。かくて封建貴族は、ブルジョア商工階級に國家が維持してゆけるなどは、思ひもよらなかつたのである。平民を人間だとは思はなかつたのである。

ところが歴史は何を示したか。かつて牛のやうに働くことしか出来ないと思はれてゐた百姓の息子が郡長になり、大學教授になつた。商人の息子が知事になり陸軍大將になつた。ブルジョアの手によつて從來の國家とはうつつ變つた近世國家が現出した。封建制の代りに秩序整然たる中央集權が完成された。武士の代りに精銳な軍隊が現出した。生産は非常な速度で進み、社會の富は激増した。近世科學も彼等によつて生れた。彼等の手によつて近代藝術が生れた。文明は破壊されるどころか飛躍的に進んだ。新興階級ブルジョアの能力はあらゆる方面に於て實證された。ブルジョアは封建社會或は貴族社會から地位門閥の鎖をたち切つて個人の能力を解放した。自由競争制が各方面に採用された。かくして資本主義は發達をとげ、近代國家は隆興した。封建時代の文明とは比較にならぬ奇蹟を現出した。そこでブルジョアは咽喉元を過ぎて熱さを忘れてしまつた。歴史を忘れ、過去を忘れた。それと同時に現在を正視し、未來を洞見する力を失つた。彼等は人類の最後の幻覺を描きだした。ブルジョアジイの永遠といふ幻覺がそれだ。

最後の幻覺、それは今日ブルジョア及びその附屬階級のあらゆる分子をとらへてゐる。勿論彼等はブルジョアの永遠といふ文字でそれを信じてゐるのでない。人類の永遠といふ形に直してそれを信じてゐる。若しブルジョアといふことを意識したらその永遠を信するわけにはゆかない。そこには對立する階級が豫想されてゐるからだ。それではなせこんな修正が行はれたかといふと、彼等が歴史を忘れたからだ。彼等こそ人類の代表者だと思つたからだ。固定した制度のみを見て、動いてゆく力を見なかつたからだ固定した制度が、動いてゆく力をいつまでも代表し、いつまでも正義に合致してゐると思つたからだ。

ブルジョアは前に述べたやうに、封建社會の鎖を斷ちきつて生れたと同時に別の鎖を用意して生れた。それは賃銀制度の鎖だ。ブルジョア革命は第三階級を解放したと

言はれてゐるが、その實はエンゲルスが言つたやうに第三階級の一部分有産ブルジョアのみの解放に止まつた。大多數の人間は制度の變革と同時に古い鎖から新しい鎖に繋ぎ變へられた。この鎖ははじめはそんなに強くはなかつた。といふよりも寧ろ古い鎖からの解放を狂喜した多數の人間はそれに氣がつかかなかつた。その内に新制度が固定して、新しい鎖から免れた近世の有産ブルジョアの支配が確立した。ブルジョアは自分が自由なものだから、人類全體が自由になつたと思つた。ブルジョア即人類といふ思想はかうして生れたのだ。

その内に鎖で縛られた階級の一部が鎖を意識し出した。永遠の筈であつた制度や、その上に發生した文化が、縛られた階級にはバンを獲るにも不如意な制度文化であることがわかつて來た。制度の殻の中に幽閉された人間が動き出した。新制度によりて成就された中央集權と國際關係の樹立とのお蔭で、この運動は地方的から全國的へ、全國的から國際的へと進化した。ブルジョアははじめて『人類』ならぬ人類、『人類』と利

害相反する階級プロレタリアの出現を見たのだ。プロレタリアの運動が「人類」文化の危機と彼等の眼に映じたのは無理ではないのだ。幻覺の『人類』が事實のプロレタリアと衝突するのは矛盾でも何でもないのだ。

併し事實と歴史とが嫌ひになつたブルジョアは、このプロレタリアをも幻覺の中で見やうとする。そしてこれを「劣等な人間」といふことに定義した。けれども劣等にしても不屈千萬にも人間の皮をかむつてゐるプロレタリアを人間扱にしないと彼等の名目上の正義感が承知しない。デモクラシーとか人格とか人間性とか勞資協調とか自由とか正義とか赤十字的態度とかいふ抽象名詞は、此の目的のために逆用され或は新造された。併し不思議にも無産階級はデモクラシーにも文化にも正義にも自由にも「ブルジョア的」といふ形容詞をつけて挑戦する。そしてバンを求める。權力を求める。

四

「人はバンのみにて生くるものに非ず、」といふ教へを無視した無産階級の行爲はバンを必要としない支配階級の眼から見ると下劣極まるものだ。バンすら求めなければならぬプロレタリアをバンしか求めないのだと彼等は勝手に解釋する。プロレタリアは動物的本能と動物的要求とに生きてゐるものだと彼等は早合點する。センチメンタルな彼等の正義派の心には侮蔑のまじつた同情心が起る。同情は昂進して崇拜となる。勞働者崇拜の叫びが起るのはそのためだ。それは侮蔑と隣り合せの崇拜だ。フランス革命前の貴族等が平民主義にかぶれて平民を崇拜し農民を憧憬したやうに、ブルジョアの正義派はプロレタリア崇拜病にかゝる。王后マリー・アントアネットが宮殿の中に百姓小屋をたて、平民主義を享樂してゐたやうに、今にわざ／＼九尺二間の裏長屋を選んで住む享樂的ブルジョア社會主義者が飛び出すことだらう。併しそれはブルジョア新聞の喝采は博しても斷じて階級闘争の緩和にはならない。クレマンソーが長屋住ひしてゐたとてフランスの軍國主義が帳消しにならず、安田善次郎が法被を着たつて

のでなくてさせられないのだ。ブルジョアの實力が封建時代に表はれなかつた如くブルジョアの治下ではプロレタリアの實力は表れない。併しブルジョアのお蔭で近代國家の政治は單純化された。國務大臣の仕事だとして煎じつめると手紙や書類の整理に過ぎない。況んやその他の仕事をやだ。それがプロレタリアにできないとは幻覺の世界のみで想像できることだ。事實の世界では到底想像できぬ。おまけにロシアが目前に立派なプロレタリア政治の實例を示してゐる以上尙更だ。そこで此の場合吾々にとつて最も安全な方法は、ロシアのプロレタリアが政權をとつてから何をやつたかを見ることだ。かつて世界の資本主義國の中で最も後れてゐたロシアのブルジョアの能力を標準にすれば、先進國のプロレタリアの能力を過少視する虞れはあつても、これを過大視する虞れだけはないやうに思はれる。

ロシア革命の際にも勿論ブルジョアとそのインテリゲンチヤとはプロレタリアの能力を信せず、それを輕蔑してゐた。多數のインテリゲンチヤは労働者と農民の支配に

反對した。ケレンスキーは十一月七日までプロレタリアの力を見くびつてゐた。十一月革命がはじまつてプロレタリアが政權を奪取すると、前政府の官吏から小使に至るまでサポータージユを行つた。人民委員が政廳に出頭すると役所の入口には鍵が下してあつて這入れなかつたものもあつた。入つても誰も口をきくものがなかつた。交換手は電話をつながず、翻譯係もタイピストも寫字生もゐなかつた。數週の間政治機關の少からぬ部分が運轉を停止したとのことである。これは彼等がブルジョアの殘黨から金を貰つて、新政府は直ぐに倒れるとプロバガンダされてゐただけけれども、彼等の内心にも、新制度に對する不信と、労働者と農民の支配に對する侮蔑があつたことは争はれない。彼等にはやはり人類の文化の幻覺がつきまとひ、プロレタリアの人民委員よりも、帝制時代或はケレンスキー時代の大臣様が遙かにえらい人類の代表者だと見えたのである。

ブルジョアの殘黨と反動インテリゲンチヤとが、最後の幻覺にしがみついて歴史を

逆行させやうとしてゐる間に、ロシアのプロレタリアは事實の世界で何をしたか、ジ
ノヴィエフは「革命期間のロシア共産黨」の役割を要約して、一九一七年には共産黨は
労働者に向つて「ブルジョア征伐の先驅者、組織者たれ」と言つた。一九一七―八年に
は「ソヴィエツの組織者たれ」と言つた。一九一八―二〇年には「赤軍の一兵卒たれ」
と言つた。今日は「生産の組織者たれ」と言つてゐる、と述べてゐる。つまりロシアの
プロレタリアはその代表政黨たる共産黨を中心としてブルジョアの権力を奪取して、
ソヴィエツの新機關をもつてこれに代へ、内外の反動派を破つて今は建設事業に全
力を集中してゐるのだ。五年間に彼等はそれだけの仕事をしたのだ。その間に新イン
テリゲンチヤが生れてプロレタリアン・カルチュアが着々形成されつゝある。

ブルジョア學者は絶頂期のブルジョア文化と鎖につながれたプロレタリア文化とを比
較してプロレタリア文化の劣悪を證明したつもりである。少くもロシアは今後二十年
以内にこの證明を事實に於て覆すだらう。その時はマルクスの所謂「人類社會の前史」

が終りを告げる時だ。ブルジョアの所謂「人類」の死滅の時だ。

死滅すべき人類文化擁護の十字軍士よ。卿等のエルサレムはその時は一基の記念碑
と化し、卿等の文化は博物館の一隅でのみ幅をきかすことになるだらう。卿等の哲學
は永遠の眞理を示す代りに「思想變遷史」の二三行を占めることになるだらう。

(一九二二年四月)

武者小路實篤氏の非戦思想

一

「種蒔く人」の十二月號にのつてゐる武者小路さんの「戦争はよくない」といふ詩を、
極く短い詩だから全文ひいて見る。

俺は殺されることが、

嫌ひだから、

人殺しに反対する、

従つて戦争に反対する、

自分の殺されることの、

好きな人間、

自分の愛するものの

殺されることのすきな人間、

かゝる人間のみ戦争を、

讚美することが出来る、

その他の人間は、

戦争に反対する、

他人は殺されてもいゝと云ふ人間は、

自分は殺されてもいゝと云ふ人間だ、

人間が人間を殺していゝと云ふことは、

決してあり得ない、

だから自分は戦争に反対する、

戦争はよくないものだ、

このことを本當に知らないものよ、

お前は戦争で、

殺されることを、

甘受出来るか、

想像力のよわいものよ、

戦争はよしなくならないものにせよ、

俺は戦争に反対する、

戦争をよきものとは断じて思ふことは出来ない。

これは戦争に對する武者小路さんの思想であるが、氏の人道主義的思想はすべてこれと同じフォーミュラを以て言ひ現はされると思ふから、すぐに手元にあつたといふことゝ、短いといふことゝの理由で此の詩をひいたのである。そして私は此の詩に現はれた氏の思想を分析して見ることにする。

これは三段にわかつことが出来る。第一に氏は殺人は嫌ひだから戦争が嫌ひであるといふのである。第二に殺人や戦争はよくないものであるから反対するといふのである。第三に戦争はやまないかも知れないが兎に角戦争に反対し戦争をよきものと思はないといふのである。

二

第一の殺人或は戦争が嫌ひであるといふことは殆んどわざわざ言ふ必要さへもない位のことである。特に今私にとつては用のないことである。これは思想ではないからだ。殺人のすきなものが世の中に——殺人狂といふやうなものがあればそれを除いて——一體あるだらうか？ 従つて戦争を單に大規模な殺人と見る時、戦争の好きな人間があるだらうか？ 武者小路さんは、自分や自分の愛するものが殺されるのを好むものに限り、戦争を讚美することが出来るといひ、そして戦争を讚美するものに對し

て「想像力弱きものよ」とあはれんで居られる。併しこれだけのことを知るに想像力が要るだらうか。想像力が弱くてこの簡単な道理を知らない者があるから戦争がおこるのだらうか？

千九百十四年ドイツ皇帝がウンテル・デン・リンデンかどこかのバルコニーに現れて宣戦の演説をした時に熱狂して之を歓迎した數十萬の群集は悉く殺人鬼だつたらうか彼等は「俺は殺されることが嫌ひだから人殺しに反対する」といふ位の考をもちあはせてゐなかつたらうか？

どうも私の考へでは、個人々々の好き嫌ひで戦争を云々して見ても仕方がないと思はれる。假令十六億の人間が皆な戦争や殺人嫌ひであつても戦争は矢張り起るだらうと思はれる。

序に言つておくが氏は殺人と戦争とを殆んど區別せずに使つてをられるが、これは誤謬である。何となれば大抵の國では戦争は憲法で認められてゐるが、殺人は刑法で

嚴罰に處せられることになつてゐるからである。戦争は殺人と違つて國家の自衛或は侵略の必要から起る。殺人は言ふまでもなくたゞ人を殺すことである。前者は殆んど例外なく後者を伴ふが後者は單獨でも行はれる。前者は目的として是認されるが後者は目的として是認されることはない。そこで殺人が嫌ひだから戦争が嫌ひだといふ推理は成りたゝない。『従つて』といふ接續詞は無意味だ。

三

さて第二段に移る。武者小路さんは今度は戦争即ち殺人は嫌ひであるのみならずよくないものと断定される。主觀的好惡から客觀的善惡にまで飛躍される。此の間にも意味の聯絡はないと認めねばならぬ。自分はピアノが嫌ひだからピアノは悪いといふやうなことは言へない、嫌ひだといふことには道德的意味はないのだから。そこでこれは、別々の方面から戦争に反對したのであつて、自分は戦争はきらひだ、おまけ

に戦争はよくないものだ、と言つて反對の理由を強くされたわけであらう。

ところで戦争は嫌ひだといふのは氏の主觀内容だからそれについては第三者は何もいふ資格はない。併し戦争はよくないといふ客觀的判斷になると第三者の發言權が承認される。私は戦争はよくないものだとは一概に言へぬと思ふ。或る哲學者によれば最高道德の表現であるべき筈の國家が道德上よくないことを認めてゐる筈がないからである。つまり戦争はよいとか悪いとかいふ道德問題ではないのである。或は道德問題となるにしてもその背後には道德以上の力がはたらいて惡をも善とするのだ。戦争はよくないと言つて吾々は反對することは出来る。しかし戦争はそんなことにはお構ひなしだ。さうして十六億の人間は一人のこらす戦争そのものには反對しながら、自衛の戦争や正義の戦争や名譽の戦争になると一も二もなくこれを認めてしまふのである。そして困つたことには戦争そのものは起るものではない。現實の戦争は悉く自衛の戦争であり、平和正義の戦争であるのだ。殺人のために戦争をやるのでなくて平和

維持、國家自衛、正義そのもの、爲めに戦争が行はれるのだ。自衛とは誰の自衛だ。平和正義とは誰のための平和正義だ。そこまで解剖しなければ戦争の謎は解けない。

四

こんな風に、武者小路さんが強ひてごつちやにしようとする殺人と戦争とを區別して見ると、此の二十世紀の現實の戦争、正義の爲めの戦争、平和の爲めの戦争に對しては氏はどんな態度をとられるであらう。戦争を單に殺人と見た時にはこれに反對されるのは獨り武者小路さんのみに限らず、戦争の局に當る人は尙更だらう。併しそれが何故行はれるか？ 何故すべての人の反對に拘はらず行はれるか？ 吾々はそれを資本主義の變形たる帝國主義のためだと解する。無論殺人と戦争とをはじめから一つにされた武者小路さんはこれには答へない。さうして「戦争はよしなくならないにもせよ俺は戦争に反對」されるのである。

實際戦争はなくならないかも知れない。數年前の様な大戦争が始まつて何百萬の人間が殺されるかも知れない。併しそれをなくする方法はないか。武者小路さんはそれを外部の現實の世界で解決しやうとする代りに頭の中で解決される。そして兎に角戦争に反對して居られるのである。さうして人道主義者の満足感に浸りながら、「俺は正しかつた」と言はれることであらう。簡単にいふと世間にどんな罪惡が行はれても一人毅然としてその罪惡に反對してゐる巨人の道德が即ち武者小路さんの道德である。吾々に出發點となる所が氏には到着點となる。

武者小路さんは十年もたつたら私どもにも此の思想がわかるだらうと言はれるが、私共は氏に對して數年前へ逆もどりして、「へんな原稿」などの問題をもう一度考へなほしてほしいやうな氣がする。但し今度はセンチメンタリズム無しにだ。おまけに積極的に客觀的にだ。

私は武者小路さんの思想を批評するやうに頼まれたのだが氏の思想には一向感服す

べき點どころか、思想といふやうなものをも認めにくい氣がする。優越感、救世主的の自己意識、さういふものが氏の頭の中には大した「思想的背景」なしに聳立してゐるやうに思ふ。實際氏の作品に生命を與へてゐるものは思想ではなくて（思想といつたつて私は別に反對はしないが）この優越感である。戦争はやまないにしろ、俺は戦争に反對する」といつて横車を押してゆくがむしやらである。（一九二二年十二月）

ゾレルの階級文化論

マルクスは『經濟學批判』の序文で有名なる唯物史觀の公式を述べる前に、「私は私の研究によりて、法律關係や、國家形態は、それ自身によりて理解され得るものでもなく、又人間精神の一般的進歩によりて説明されるものでなくて、此等のものは、ヘーゲルが十八世紀のイギリス、フランスの流儀に倣つて市民社會の名の下に總括したところの物質的生活條件に根ざしてゐること、その市民社會の解剖は、經濟學に求むべきものである」といふ結論に到達した」と語つてゐる。

マルクスが先づ經濟學を學んで、多くの學者が陥るやうに、自己の専門の中に眼界を狭め、そこから大膽な演繹によりて唯物史觀をうちたてたのでないことは此の一節

を讀んだだけでも明瞭である。その反對に彼は最初法律を學んだ。しかも彼はそれを『哲學及び歴史に關聯して、此等に對する第二次的のものとして』研究したのである。ところが一度『所謂物質的利益に關して』議論をかまふるにあつて、彼は從來の彼の研究が無力であることを知り、新しい研究、即ち經濟學研究の必要を感じたのである。以上の如き経路によりて彼は、その後の『研究の指南車』となつたところの所謂唯物史觀の公式を得たのである。

ジョルジュ・ソレル Georges Sorel は *Les Illusions du Progrès* を書くにあつて、『マルクスが、思想の歴史に於て、合理的認識の達し得る最も深奥な根柢まで溯らんと欲する人々に與へた忠告に従はうと努めた』(P. 1)と告白してゐる。此のマルクスの忠告とは思想史の唯物史觀的解釋に他ならぬ。これをマルクス自身の言葉で言へば『法制上及び政治上の上部構造』、『一定の社會的意識形態』を、そのよつてたつところの眞の基礎即ち『生産關係の總和』、『社會の經濟的構造』によりて理解し、上部構造の變

化』を『經濟的基礎の變化』から解釋せんとする歴史研究法に外ならぬのである(頁數は以下すべてソレルの *Les Illusions du Progrès* のそれである)。

二

マルクスの此の研究法は、ソレルによれば『不幸にして甚だ有名であるけれども一向知られてゐない』。それは殆んど常に難かしい定式として定義されるばかりで一般歴史には殆んど適用されなかつた。おまけに『經濟學批判』の序文でマルクスが述べた公式は『一定時代の歴史を研究するための特別の規則を供するのが目的ではなく』文明の繼續交代といふことがこゝでは主として問題になつてゐる。だから階級といふ言葉は一つもこの公式の中に見附らないのである。而して『經濟の役割を指示する規定が、半ば象徴的に、極度まで強調されてゐるために、往々にして飛んでもない誤解が生ずるのである』

唯物史觀を決定論と同一視したり、物質萬能主義と混同したりする誤解は此點に胚胎する。その誤解の一例としてソレルはイタリヤの社會主義者エンリコ・フェルリの『社會主義と實證科學』に述べてある唯物史觀の解釋をあげてゐる。エンリコ・フェルリはマルクスの唯物史觀はモンテスキウ、バツクル、メチニコフ等の自然的決定論と人類學者の人類學的決定論とを結合した經濟的決定論であるとし、『經濟的條件——即ち與へられたる自然的環境の中にはたらく諸種族の力と技能の合合力——は、個人的及び社會的の人間生活の、道德的、法制的、政治的表現を決定する基礎である』(圈點を附した文字は原文でイタリックで書かれたものである)と唯物史觀を解するのである。(P.3)ソレルはこの解釋をもつて、『馬鹿々々しさと不合理と矛盾とから成る出鱈目』だと非難し、フェルリの所謂實證科學、『經濟的決定論』を笑つてゐるのである。かくの如く、公式に現れたマルクスの唯物史觀は一定時代の歴史を説明するものでなくて、一般歴史研究の原則であるから、一定時代の歴史を研究するためには、この

原則の應用を試みなければならぬ。イタリヤの社會主義者アントニオ・ラブリオラは『陸上で水泳法の講義をすることによりて水泳を教へる水泳教師を眞似ることを潔しとせずして』マルクスの原則に従つた歴史研究を發表するつもりでゐたが、それを果さずして彼は死んだ。ソレルの *Les Illusions du Progrès* は、フランスの文化史についてラブリオラの計畫を實行したものであるといつてよからう。

併し、ソレルの此の研究の直接の指南車となつたものは、『經濟學批判』の序文ではなく、『共產宣言』に現れてゐる次の一節である。『人間の觀念 (*Vorstellungen*)、見解 (*Anschauungen*) 及び概念 (*Begriffe*)、一言もつてつくせば人間の意識 (*Bewusstsein*) が、人間の生活條件 (*Lebensverhältnissen*)、人間の社會的關係 (*gesellschaftlichen Beziehungen*) 人間の社會的生活 (*gesellschaftlichen Dasein*) と共に變化する (*sich ändert*) と云ふことを理解するに深い洞見を要するだらうか? 思想 *Ideen* の歴史は、精神的産物が物質的生活に應じて變化する (*sich unge talset*) といふこと以外に何を證明してゐるか? 一

時代の支配的思想 (herrschen den Ideen) は常に支配階級の思想に外ならなかつた』(P. 5
——ドイツ語はソレルの原著にも挿入してあるのである)。

三

ソレルの思想を一貫するものはマルクス及びエンゲルスによりて指摘された階級闘争の思想である。(ソレルの唯物史観特に資本主義の必然的崩壊に關する經濟學説はマルクスのそれと同じではない) 而してマルクスの階級闘争説は『經濟學批判』の序文には明言してないことはソレルの言ふとほりである。然しながらこの公式を階級社會に適用するとそこには階級闘争説が現れる。即ち公式には「社會の物質的生産力は、その發達の一定段階に於て、從來その社會内に行はれてゐた生産關係、或はその法制的表現に過ぎざる所の所有關係と衝突する。即ち此等の——生産及び所有の——關係は生産力の發達の形式からこれが桎梏に變ずる。此の時、社會革命の時期が來る。經濟的基礎の變化と共に、

龐大なる上部構造の全體が徐々に或は急激に變化する」と書いてあるのであるが、この變化の核心に階級をあてはめると、生産力と生産關係との矛盾衝突は支配階級と新興階級との階級闘争となるのである。そこで社會革命はそれが成功した場合には即ち兩階級の共倒れに終らない場合には常に一階級の勝利をもつて終り、従つて上部構造の變化は新しき支配階級に適應する方向へ必然的に變化するのであつて、この意味に於て『一時代の支配思想は支配階級の思想に外ならぬ』といふ言が眞となるのである。

けれども、ソレルによれば『斯くの如き階級歴史觀は、殆んど普ねく吾々の周圍に擴がつてゐる考へと非常に反してゐる。』多くの人々は二大階級の對立の代りに凡ゆる複雑な地位分限を見る。そしてその中に一貫する『一般意志』を見る。階級闘争の代りに新舊の争ひ、正義と非正義の争ひを見る。階級文化の代りに文化それ自身の發展の歴史を見る。ソレルによればこれは『精神的偏見』のために外ならぬ。

一般歴史家はマルクスの忠告を理解しない。各時代の文化に支配階級の極印を見な

いで一般意志の表現を見る。しかもそれを支配階級の文化に見る。そこで「歴史家が特に知らんとするのは、そしておまけに最も知り易いのは征服者の文化なのである」。(P. 8)

併しながら、支配階級の文化は「支配階級の本能、習慣、憧憬」と密接に關係してゐると同時に、「他の諸階級の社會的條件とも幾多の關係をもつてゐる」。故に吾々はエンリコ・フェルリ流の「歴史決定論」(determinisme historique)を採用するわけにはゆかない、せいせい歴史家の従ふべき道(唯物史觀的研究)に若干の光を投げることしかできない、とソレルは考へてゐる。

實際吾々は唯物史觀が從來の歴史を悉く數學的方程式の連鎖に歸してしまふものだといふやうな誤解をしてはならない。そんな企圖はソレルによれば「識つたかぶりであると同時に子供らしいこと」である。一言で言へば不可能事である。唯物史觀は從來の歴史の解釋法に「物質條件」を加算するだけであつて、これを全部だと主張する

のでないことは、賛成者も反對者もよく理解してゐなければならない。唯物史觀は社會の歴史の觀方であつて個人の行爲の規準ではない。個人の自由や個人の犠牲的行爲を否定するものではない。マルクスは注意深く「社會的」といふ文字を使つてゐる。またマルクスは極めて明白にかう言つてゐる「人間は彼自身の歴史をつくるけれどもそれをそつくりそのまゝ、つくるのではない。自分で選んだ條件からそれをつくるのではなくて、手元にある條件の中からそれをつくるのである」(Der achtzehnte Brumaire des

Louis Bonaparte)

この「手元にある條件」即ち與へられた條件を加算する時歴史が偶然の連続ではなくて必然の進化であることが理解される。フランス革命がダントンの雄辯やロベスピエールの畫策やマラーの知謀によりてのみ成就されたものでないこと、豊臣が徳川に破られたのは兩者の個人としての力の優劣のみではなかつたことは、この與へられた條件をしらべて見てはじめて理解される。而して最も重要なことは、それによりて今後

の歴史を洞察することができることである。

此の歴史に與へられた條件を考慮に入れる時、歴史の流れに逆行せんとする凡ゆる反動運動と反動思想との維持すべからざることが明瞭となる。大膽なる社會主義者を以て任ずる人々の進歩した思想さへも、これを考慮に入れないために、その主義が宙に浮び、土臺を失つてとんちんかんとなり、いつのまにか去勢されて、最後には反動的悲鳴となるのである。ソレルはその例をブルードンに見た。正義へ！ 人道へ！ デモクラシーへ！かゝる叫びは今日吾々の周圍に盛んに聞える。しかしながらその聲の中に革命の叫びと反動の叫びとが、交錯し交響して居ることは容易に観取できる。レトニンによれば共產主義は電氣化による生産の増加によりてのみ完成される。原始共產主義、原始無政府主義の樂園？は人間が生産力を失つて太古の生活状態に歸ることのみによりて實現される。ソレルは其の論を論じて居る。――

四

ソレルによれば『デモクラシーは、常に統一を求めらるからマルクス主義の考へかたを恐れる。舊制度が國家に對してもつてゐた讚嘆の念をうけついで、歴史家の職能は爲政者の行動を説明することのみだと考へる。』此の階級觀に對する一體觀を眞に完成したものは十八世紀の專制主義ではなくて現代のデモクラシーである。『前代に於ては人々は、完全に統御された專制國に於ては、專制君主に對する如何なる不平の聲も起る権利をもたぬと想像してゐた。』現代に於ては、政府は國民の一般意志を反映してゐるものであると信せられてゐる。ところがソレルによると現代に於ける一般意志とは第三階級の意志に外ならぬ。ブルジョアを離れてデモクラシーはない。『階級を除外して考へられた支配思潮は、ジョセフ・ド・メイトルか、まだその見本に出くわしたことがないと言つた抽象的の人間と同様に假空的のものである。』フランス革命は第三階級

の革命である。ところがフランス革命の立法者達は、この何處を探しても見付らない抽象的の人間の爲めに法律をつくるのだと稱してゐた。ソレルによるとこの人間は『天赋人權説に於て第三階級の人 *l'homme du Tiers Etat* に置き代へる爲めに創造されたもの』(P. 10)なのである。

唯物史觀の立場から見ると、從來の社會の歴史にはどこを探しても『人類』そのものは見つからない。見つかるものは階級の人である。この階級を抹殺して、常に自己の階級を人類といふ名詞に置き代へるものが支配階級である。支配階級の文化が人類の文化と混同されるのはこの不斷のごまかしの爲めである。そこでソレルは眉を逆立て言ふ。『予が最初の語調を本書で保存したのは(ソレルの著は *Mouvement socialiste* に連載されたものを訂正して一冊に纏めたものである)、常に辛辣な語調をもつて論戦したマルクスを真似るためでもなく、大袈裟な言葉を使つて注意を惹くためでもなく、ブルジョアジーが宣傳せんとする一切の思想の中で、最も不合理極まるものは、無限

に輕蔑すべき俗間聖者 *saint laique* に對する尊敬を強ふることであることを知つたからである』(P. 11-12)。今日では祈禱や禮拜に對する崇拜は民衆から消えた。けれどもこの俗間聖者、デモクラシーの英雄、自稱人類の代表者に對する尊敬は尙盛んである。然るに之等の人々は昔の聖者とちがつて内實は彼等自身の利益に汲々として表面に『人類』の名をかゝげてゐるのである。故に『歴史的眞理をうちたてることは單に良心のみの問題ではなく、同時に、目前の實際的利害の問題でもある』ソレルは言ふのである。

政府の役人と御用思想家、政治家と資本主義經濟學者がブルジョアの音頭取の下にうちたてた人類主義の宣傳は今や吾が國でも知識階級の大部分を魔酔させて頼まれもせぬ弟子供が汗水たらして支配階級の功德を並べたてゝゐる。これ等の弟子は彼等自身文化をもたない。だから彼等の文化は平素は極めて曖昧な雜色を呈し、階級を超越した深遠な眞理を藏してゐるやうにさへ見える。けれども眞の階級であり、従つて眞

に自己の文化をもつ兩階級——今日ではブルジョアとプロレタリア——の階級戦の切迫するにつれて、この脆弱なお弟子の文化は忽ち分解をはじめて右と左へ分れる。「人類」を護れと絶叫しながら、篠田の森の狐のやうに「ブルジョア」の尻尾を出すのである。

ソレルはかくの如き支配階級の宣傳に憤慨するのである。そしてお化けの歴史の代りに歴史の真相を明かにすることは、眞理を愛する良心の要求を満足させるばかりでなく、プロレタリアの實際上の利害の必要に迫られてゐると考へるのである。

以上私はソレルの「進歩の幻覺」の序文について、彼の歴史に對する一般的見解、即ち階級的歴史觀を簡単に解説して見た。彼はこの書の本文に於て十七世紀から十九世紀に至るフランスの政治、法律、文學、宗教、哲學、科學等マルクスの所謂「上部構造」の歴史を、「市民社會」の解剖によつて解釋してゐるのである。次に私はその中の二三を例證しようと思ふ。

五

十七世紀末の文化を先づ見よう。此の時代に於て最も著しいことは、從來フランス全國を風靡してゐた宗教思想が下火になり、一般に宗教に對して冷淡になつたことである。普通の歴史家によるとそれはジャンセニスムの處刑等の如き宗教壓迫の影響によるのだと解されてゐる。併し實際は原因結果の關係はその逆である。「十七世紀の終りの十五年間、世人の生活は享樂的になつた。」そこで以前には嚴肅なジャンセニスムの信仰が一世を風靡してゐたのが『今では、新時代によりて與へられた幸福を十分に享樂せんとするやうになり、ジャンセニスムは甚だ退屈になつて來た。以前にその保護者であつた上流社會の人々は續々とこれを捨て、ポール・ロアイヤールは捨て、顧みられなくなつた。故に道德的水準が低下したのはジャンセニスムの處刑の爲めではなくて、その關係は逆である』(P.30)とソレルは言ふ。

當時の享樂思潮がいかなる程度に達してゐたかはフランスの歴史を見ればすぐわかる。(註一) ソレルは婦人の風紀頹廢について「單に婦人の風紀が頹廢したのみでなく、上流社會はこれを寛容してゐた」(P.30)と言つてゐる。又一六九六年十一月十九日に、デユボーはベイルに宛てた手紙で「上流婦人はその従僕として小さい子供では満足しないで、大きな、美少年を欲するやうになり、それを單に従者とせず、部屋付きの小姓 *Valot de chambre* とするやうになつた」(Brunière, *Etudes critiques* P. 210-211)と云つてゐる。これを以て見ても上流社會の風紀頹廢の一斑を知ることが出来る。「かゝる社會はその哲學をもたず、すまふことが出来なかつた」『かゝる社會は、その行爲を是認する方法を求めず、その幸福に耽溺することはできなかつた』(P.32)當時の文化はかういふ必要の上に築かれたのである。

この上流社會の享樂主義的風潮は何によつて生じたか。それはルイ十四世の『我は國家也』といふ専制政治によりて中央集權の實あがり、内政上外政上フランスの國力

は空前の發展を遂げ、コルベールの献策による保護政策により商工業は隆興し、フランスの富は激増した。ところがこの富の大部分は、租税と強制賦役とによりて悉く上流階級に吸収されてしまつた。そこで上流社會の生活は富裕となり、享樂的風潮が此の社會を風靡するに至つたのである。かくの如き經濟的基礎によりて、貴族(及び僧侶)が當時の支配階級となり、その文化が支配文化となつたのである。これがルイ十四世時代、即ちフランス文化の黄金時代の真相である。此の享樂主義的風潮がルイ十五世時代に至つて更に顯著になつたことは、この關係を證明するものであつて、支配階級の思想が支配思想であるといふマルクスの言はこゝに完全にあてはまるのである。

註一、箕作博士著『第十八世紀フランス文化史』など参考になる。

六

次に十八世紀に移らう。マルクスによれば『ブルジョア經濟學者は、制度といふも

のは二つしかないと考へてゐる。人工的制度と自然の制度と。封建制度は人工的制度でブルジョア制度は自然の制度である。此の點に於て彼等は宗教を二つに分類する神學者に似てゐる。かゝる神學者によると自己の宗教以外の一切の宗教は人間のつくつたもので、彼等自身の宗教のみが神から發出したものである……かくて以前には歴史があつたが、今後はもう歴史はない』『資本論第一卷』といふことになる。制度の歴史はブルジョア制度で終りをつけて、今後は制度の内部に於ける進歩發達があるのみだと考へてゐる人が今日も實に多い。

ところがソレルもマルクスと同じやうにその點を鋭く指摘してゐる。曰く『今日のデモクラットは、フランスの歴史の中に彼等の階級（ブルジョア）の支配に對する長い準備の期間だけしか見ない……彼等はブルジョア制度を本位として過去を解釋するブルジョア制度の未來の利益に都合がいゝのと都合が悪いのによりて過去の政治家を毀譽褒貶する』（P. 67）そこで歴史がねぢまげられるのである。

ルイ十四世によりてフランスの封建制度は瓦解し、王朝政治が生れた。王朝政治はその周圍にブルジョア（平民）を發生させた。故にソレルによれば『十八世紀の思想を十分に理解する爲めには、フランスは漸次ブルジョア寡頭政治によりて征服されてゐたといふ事實から出發しなければならぬ。このブルジョア寡頭政治は王朝政治がその間に……たのにつくつたもので、やがて王政を亡ぼすやうになつたものなのである』（P. 65-66）クルノーの言によれば『この意味でルイ十四世の治世はフランス革命の主要原因なのである。』

この新しい階級は王朝政治を行つてゆく上に次第に必要となつて來たと同時にその地位が安定になつて來た。王朝派はその專制政治を行使する上に於て、貴族その他以前の特權階級の反對を恐れなくなつた。それは王政の周圍に集つたブルジョアの實力が加はつて來たからである。ところが王朝政治の創始者等は貴族と特權階級、即ち封建制度への反動群の勢力を壓伏することには成功したが、それと同時に『漸次古い勢

力よりも一層彼等を拘束する新勢力が彼等の面前に勃興するのを見た。そして殆んど機械的にこの國王の使用人は支配階級の富と権力と名譽とを獲得してきた。王朝が單にその奴僕として取扱はうとしてゐた人々の反對によりて、王權は事毎に阻止され、反對に使用人がその意志を主人に強制するやうになつた』(P.170以下)かくしてブルジョアは王權の陰にかくれて漸次擡頭して來たのである。古い制度の内部に新しい革命力が形成されてきた。明治維新に於ても尊王討幕の旗の下に諸侯を集めて幕府を倒したものは公卿であつたが、公卿大名の實勢力は、明治政府の樹立と共に、漸次その内部の革命力たる平民の手に移つて來た。歴史は多くの類似を示す。

そこでソレルによれば『十八世紀の文化は王權の附屬階級の生活條件に適應した文化である』(P.80)この點に於て彼の見解はテイヌが十八世紀の文化の基調を貴族生活にありとしたのと反してゐる。附屬階級はその名の示す如く、まだ獨立した階級ではない。従つて獨立したそれ自身の文化をもたない。何となれば彼等は彼等自身のこと

を考へずに、他人のことを考へてゐるからである。故にその文化は「法律家や歴史家や學者が提出された問題に對して與へる意見書のやうな性質を帯びて來た。」この仕事を手際よくやるには抽象的にやるに限る。是に於て抽象的、一般的の議論がフランスで盛んになつて來た。

次第に實力を獲得して來た使用人階級は主人が此の事實を感づくのを怖れる。故に彼等は現實と離れた抽象的議論によりて實際問題を論ずる。さうすれば支配階級はその眞意をさとらない。そこで以前に教會がスコラ派の抽象的批難に對して寛大であつたと同じやうに、當時の支配階級即ち宮廷貴族は、その使用人即ちブルジョアが自然權説を唱へても、その何の意なるかを知らず、少しもこれを恐れなかつた。ルソーの『エミール』を宗教的の見地から當時の社會秩序を亂すものとして非難した高等裁判所が、抽象的な『民約論』については何とも言はなかつた如きはその一例である。過激な改革説もそれが抽象的である爲めに無事に廣がつた。名目上禁止された書籍も實

際には平氣で販賣された。有名な『百科全書』^{アッシュクロペディ}の如きも法律で禁止された後もバリで公然賣られてゐたといふことである。言はゞブルジョアは變装した刺客として支配階級の邸内に忍びこんでゐたのである。支配階級は最後までそれに氣がつかかなかつた。

ところがブルジョアの實力の増大と共に趣きが一變した。『大革命が勃發すると此の文學がその意味を變へてきた。人々は單なる奇論をも眞面目にとり、作り話にも現實的價値を與へるやうになつた。そして舊社會が理論と實際との間に打ち立てた差別を撤廢した。これは文學が一階級から他の階級に移り、少數者の手から民衆の手に下つて來たからである。民衆は文學上の技巧は解しない』がその意味をとる (P.86)。

かくの如く抽象的の文字が次第に實際的の意味をもつて來たのは第一に、王朝の附屬物たる爲政機關に人物を供給する第三階級全體の生活條件による。即ちこの階級は商業及び工業に於て富を生産する階級、即ち經濟的實力を有する階級であるから、封建政治及び君主專制政治に對する第三階級の反對説が漸次勢力を得てきたのである。第

二に國家の政治上の事務がこの階級の手に委ねられたので、特權階級の勢力減退と共に、この階級は國家を自分の物であると考へ、特權階級の衰頹と共にブルジョア出の政府吏員が國家の須要な地位を占めて來たことである。第三に、この新興階級は富と權力とを獲たゞけでは満足せず、名譽をも欲しくつて來たので貴族を模倣する必要が生じて來た。そして、それを獲得して民心を收攬した。かくの如き理由によりてブルジョアは次第にその實力を増大して爪牙を現はし、それと同時に貴族の影は次第に薄らいできた。抽象的の思想は漸次實際的の意味をもつてあらはれて來た。ルソンの著書の如きも『プチット・ブルジョアジイの手に落ちると直接行動の綱領となつてしまつた。』(P.107)

『民約論』からは相矛盾した様々の結論がひき出された。『シャトوبرリヤンは何よりも先づルソーはテロリストを非難したのだと斷言した。ラリイはルソーは革命の二ヶ月目には悲みの餘り死ぬだらうと言つた。ビュゾーは、ルソーはジロンド黨と運命を

共にしただらうと言つた……デューエムはルソーは貴族で、斷頭臺に送らるべき人であつたと言つた」「ところがジャコバン黨員は『民約論』をもつて彼等の叛亂を是認するものだと思つた。彼等はルソーと共に彼等自身が一般意志の所有者である、政治は人民のつくつたものである、人民の財産である、議員は人民の代理人に外ならぬと考へた」(P.108)

そこで當時の文學者は貴族と平民、滅亡せんとする支配階級と新興階級との引つ張り風となつた。當時の文人の社會的地位は貴族に對する幫間の如きものであつた。貴族はたゞなぐさみの爲めに彼等をサロンに招いた。そこで當時の文學には洒落と警句とが隆盛を極めた。ところが中等階級はこの幫間的文人の言論を眞面目にとり、空理をたゞちに實行とむすびつけて考へた。それは彼等はまた獨立した階級でなく、自ら考へることができなかつたからだ。批判がなかつたからだ。このブルジョア、十八世紀に於て單に王權の附屬階級に過ぎなかつたブルジョアが、獨自で考へることが出來

るやうになり、ブルジョア階級特有の文化を有するに至つたのは、ソレルによれば大革命的餘程後、即ち一八二〇年頃だつたのである。經濟的解放が行はれて後觀念的解放が行はれたのである。

こゝに於てソレルは現代に鋭い批判の眼を轉じて言ふ。『私が同志と共に、労働者階級に、ブルジョアの學問哲學の轍をふませないやうに絶えず力をつくしてゐるのは此の爲めである。大革命後ブルジョアジイが、彼等自身の生活状態に應じて思考し得るといふ自覺を得たやうに、プロレタリアがさういふ自覺に達した日には非常な變化が世の中に起るだらう』(P.135)「代議制度がブルジョアジイに特有の制度であると同様に、プロレタリアも自己に特有の制度を有するとは屢々言はれてゐる所である。労働者階級をして凡ゆる點に於てブルジョアジイの無駄話から免れしめる知的解放をなさしむるものがサンデカリスムの運動である」(P.136)

今日、ブルジョアジイは、階級文化の主張に對して嘲笑と侮蔑を浴びせてゐる。そ

して文化そのもの、藝術そのもの、思想そのものを持ち出してプロレタリアの單純な思考力を混亂させ、ブルジョア政治、ブルジョア文化、ブルジョア藝術、ブルジョア思想に對する挑戦は、直ちに政治そのもの、文化そのもの、藝術そのもの、思想そのものに對する挑戦だと思ひこませようとしてゐる。彼等が絶對文化と稱するものはブルジョア制度を絶對とした文化といふ意味に過ぎないのだ。マルクスは七十餘年前に明瞭に斷言してゐる。『ブルジョアジイにとりては階級財産の消失が、財産そのもの、消失である如く、階級文化の消失は文化そのもの、消失である。彼がその消失を嘆き悲しむ文化なるものは大多數者にとりて、機械のやうに働らく訓練に過ぎないのである。』

七

王朝の附屬階級として、奇矯な抽象的言論によりて餘憤をもらしてゐたフランスの

第三階級は十八世紀の後半以後に至りて實力の充實と共に極めて大膽になつてきた。そして支配階級に對して公然たる敵對的態度をとるやうになり、『從來國內に行はれてゐた一切の法律及び習慣を同時に且つ組織的に廢止』(P. I. T. A.) しようとする様になつた。此急激な變化を最もよく示してゐるのはルイ十六世の治世に大藏大臣となつたチユルゴの態度である。

彼が二十三歳の元氣盛りの青年期に、ソルボンヌ大學を出た時には第三階級の實力はまだ弱かつた。そこで彼は社會改革の極めて困難であることをおそれてゐた。ところがその後二十四年経つて、彼が大藏大臣となつた時分には、第三階級の實力は大いに優勢となつてゐた。そこで彼はフランス國民の精神を教育によりて根本的に變へることが容易であると考へるやうになつた。しかもそれは數年のうちにできると考へた。かくの如くブルジョアが大膽になつてきた理由はどこにあるか。

第一にそれは經濟的の理由である。十八世紀の中葉に至りて農業は非常に改良され

た。一七七二年チユルゴーがコンドルセーにあてた書簡によると、一七六四年の法令によりて穀物の賣買が許された爲めに農民は非常に富裕となつた。地價は十七世紀の上四分の三の期間に上騰したのがその後急速に激落して一七二五年にそのどん底に達した。それが一七五〇年から暴騰をはじめた。一七〇〇年と一七九〇年の地價を比較して見ると二倍で止まつてゐるものは極く少く、概して三倍、中には四倍五倍に上つたものもあつた。商工業もこれと共に發達してきた。アーサー・ヤングによると『一七八八年(革命の前年)にはポルドーの商業はリヴァプールのそれを凌駕した。フランスの海外商業の發達はイギリスのそれを凌ぎ、十年間に二倍に達した』(P.204)

かくの如く第三階級の經濟的實力の充實と共に彼等の支配階級、貴族に對する大膽は益々加はつていつた。彼等は彼等自身の未來を希望をもつて眺めるやうになつた。ところが學者思想家はかゝる急激な變化にはついてゆけないで、實際の變化が急激だとすぐに後れてしまう。エルヴエシユウスの如きがその連中であつた。數年前まで民

衆の眞つ先にたつて民衆の自由を絶叫してゐた自由主義者、民主主義者が、戦後數年間の社會の進歩に追ひ越されて、今は民衆の敵となつてゐるのを吾々は現在の日本にも見る。ロシアの如き急激な變化の場合ではこの現象は更に大規模であつたことは言ふまでもない。かゝる時には、革命家が反動家に宙返りする。

輿論は轟々として起つた。政府は改革に改革を重ねていつた。一七八〇年のアンタダン(代官)の頭の中は公衆の富を増すための計畫案で一ぱいになつてゐた。道路の改修、運河の開鑿、商工業、特に農業の保護獎勵案は一日も爲政者の念頭を去らなかつた。第三階級は榮えていつた。それを政府は助けた。『然るにフランスが富裕になるにつれて……公衆の不安動搖は増大した。一切の舊制度に對する憎惡は増してきた。國民は目に見えて革命の方へと進んでいつた』(P.210) その理由はソレルによると『第三階級が大膽になつてきたからである。即ち『經濟必至感が消え去つて、人々は大膽な試みをなす時が來たと信じた』からである。『經濟必至感が弱くなるにつれて革命的

精神が優勢となる』からである。そこで今日でも『社會主義者の熱を鎮める目的でつくられた法律が屢々社會主義に有利な結果を齎し——罷業の結果としての資本家の讓歩が概して革命的サンチカリズムの進歩の動因となり——一言で言へば、社會の平和 (Paix social) は殆んど常に階級闘争に力を添へるのである』(P. 212)

最近数年間の好景氣が日本の労働運動に如何なる影響を與へたかを見ればソレルの言の眞なることがわかる。ソレルの論法によれば好景氣が労働運動の障礙になると思つたり、政府の社會政策が社會主義の運動を危くすると思つたりするのは杞憂である。それと同時に不景氣を歓迎したり、白禍政策を歓迎するのも餘計な心配である。階級がある限り階級闘争は已まない。

尙ほ、ソレルは第三階級が大膽になつた理由として、經濟的理由の外にアメリカの獨立が彼等に自信を與へたこと、『自然に歸れ』といふ思想、野蕃人に關する文學等が第三階級に與へた影響をあげてゐる。『ルネイサンスの人々の古代崇拜は今日では甚だ

ナイーヴに見える。けれども彼等の態度を理解する爲めにはこの古代崇拜は中世に對する嫌惡を現してゐると言はねばならぬ。十六世紀がギリシヤを愛したのと十八世紀が野蕃國を愛したのは同じである。何れの場合にも非難の標的は舊文明であつて、それに對して殆んど一人も擁護者はなかつた』(P. 205)と彼は言ふ。當時の支配階級の階級的文明を呪つた第三階級は自然と野蕃人の中に自由と平等を見たのである。特權階級の權利は生れながらにしてあるものでないことを知つたのである。

八

第三階級は遂に起つた。一七八九年のフランス大革命がそれである。使用人階級は一躍して主人となつた。近世ブルジョアがそれだ。政治、法制上の制度が一變した。舊制度に對する新制度ブルジョア制度がそれだ。

私はこの支配階級の交替が、文學に及ぼした變化だけをこゝでしらべて見やうと思

ふ。(註一) 新興ブルジョア階級によりて生れた文學は言ふまでもなくロマンチズムの文學である。多くの文學史家はクラシ、ズムからロマスチズムへの變化を單に文學それ自身の進化で説明しようとする。併しながらクラシ、ズムが當時の王朝或は宮廷貴族の生活と不離の關係をもつてゐる如く(このことは説明しなかつたが)ロマンチズムは新興ブルジョア階級、貴族に對する革命階級の文學であつたのである。フランスのロマンチズムの作家は多くイギリスのシェークスピアやドイツのゲーテの影響をうけたと言はれてゐる。併しながらそれはフランスの作家がイギリスやドイツの作家に追隨しようとしたからではなく、ソレルによれば『大文學は古いクラシック文學の規矩を飛び越えることができる』といふことを證明せねばならなかつたからである』(P. 232) 換言すれば支配階級の文學、貴族文學、クラシ、ズムが唯一の文學ではないといふことを證明しなければならなかつたからである。

新興階級の文學の勇敢な辯護者となつたものはスタエル夫人である。彼女の文學と

社會制度に關する著者は此の意味に於てロマンチズムの研究に缺くべからざるものであつて、ソレルはその中から盛に引用してゐる。スタエル夫人は言ふ、『恐怖政治がフランスで人物や性格や感情や思想を收穫したからには文學は革命によりて大して損失しなかつたことは何人も異論のない所である』と。併しながらソレルによると『舊文學は再び蘇生しさうには思はれなかつた。何となればそれは既に今では全然地を拂つた貴族生活から生じたものであつて、根本的に變化した新生活に適應することができないからである』(P. 229) 故に「彼女は文學に於て新時代が優越してゐることを證明しなければならなかつた。然るに新時代はまだ王政時代の作家に匹敵し得るやうな大作家をもつてゐなかつた。併しながら新時代の作家はそれ自身の標準——或はもつと適切に言へば新しい歴史的條件に應じて評價されなければならないのだ。スタエル夫人は熱心に古い批評家の偏見と戦はねばならなかつた。かうして當時の平民文學ロマンチズムが誕生したのだ。

フランス革命は古代ローマの滅亡と酷似してゐる。十八世紀の貴族の無力は古代ローマ人の無力と似てゐる。平民の勃興は北方蕃族の侵略に似てゐる。しかも教育や趣味の點では遙かに劣る平民と北方民族とが、貴族とローマ國民を亡ぼしたのである。

此の野蕃民族によりて近世國家の文明が生れたのは諸民族の混合とキリスト後とのお蔭であつた。そこでスタエル夫人はフランス革命の際にも、諸階級の混合が、ローマ滅亡の際の種族の混合と同じやうな結果を生ずるだらうと望んだ。そして、新しいドクトリンが現れて蕃族侵略當時のキリスト教の役割を演ずるだらうと望んでゐた」(168)

285)。

新時代、ブルジョア時代を辯護する必要はスタエル夫人をして暴力を辯護するに至らしめた。併しながら彼女は明らかにフランス革命に就いてそれを論じないで、宗教的フアナシチズムに對する哲學の批難についてそれを論じた。ソレルは「歴史的條件が如何に學者文人の思想を支配するか」を示すためにそれを引用してゐる。「激越せる

情熱は、冷淡からは決して起らない所の罪惡に陥ることはあるけれども、歴史の事情によりては、社會の原動力に溯るためにこの情熱が必要である」といふ書き出しで、スタエル夫人は理性を捨て、情熱暴力の必要を主張してゐる。理性から情熱へ、これは即ち古典主義から浪漫主義への飛躍に外ならなかつた。

かくして、使用人階級であつたブルジョアジイは、貴族の幫間の手握られてゐた文學を奪つて、彼等自身の文學をもつに至つたのである。勿論當時の支配階級の批評眼をもつてすれば、新興文學はその俗惡、粗笨、到底十八世紀乃至十七世紀の規則正しい宮中文學に匹敵すべくもなかつた。けれども歴史的條件の變化と共に新しい批評の標準が採用された。ブルジョア文學は獨立した。ソレルの言をもつてすれば、ブルジョアは「獨りで考へる」ことができるやうになつたのである。文學のみに限らず凡ゆる精神文化の方面に就てこれと同様の現象が起つたことは言ふまでもない。

今日プロレタリア文學の主張に對して、舊社會の批評眼と趣味とをもつてこれに臨

むものはそこに文學の墮落を見る。泥まみれの、粗雑、野卑なプロレタリアには文學の文の字もわかるものかと彼等はたかを括つてゐる。プロレタリアの趣味は八木節以上に出ないと彼等は考へてゐる。併し彼等はブルジョア自身自身が文學をもつた時の迫害と苦心の歴史を回顧して見るべきだ。尤も百萬長者には天秤棒時代を回顧するとは嫌であらうけれど。プロレタリア文學は新しい時代によりてのみその價值を批判さるべきものである。亡びゆく社會の反動群がそれを惡罵と侮蔑をもつて葬らうとするのは當然の話である。それは世界が異つてゐるからだ。十八世紀の革命的ブルジョアと二十世紀の革命的プロレタリアとは同じやうな事情の下に成長してゐる。異なるのは後者は最後の革命階級だといふ點である。何となればその以後には階級がなくなるからである。

註一、ロマンチズムに就いてはブランテスの『十九世紀主潮』など参考になる。ブリュンチエールのフランス文學史もいゝ。

九

Les illusions du progrès についてはこれだけでよさう。私の目的なブルジョア文化が歴史的のものであること、ブルジョア社會に根ざしてゐるものであることを指摘すれば足りるのである。ソレルの著書はこの點に於て十分でないまでも、少くもブルジョア自身が一の階級であること、而して今日の文化がブルジョア社會の文化である以上、それは階級的文化であること、並にブルジョア自身がまだ支配階級とならない以前にはそれ自身の文化をもつてゐなかつたといふことは、やがてプロレタリア文化の可能を立證するものであることだけは明に示してゐる。正直をいふとソレルの唯物史觀による歴史の解釋にはまだ不満足は點がある。けれどもそれは新しい試みであるといふ點に於て寛容せねばならない。これを完成するのは吾々の事業でなければならぬのだ。

ところでつまらない誤解を避けるために言つておくが凡てのものに歴史があるとは言へない。たとへば水が一定の温度によりて氣體となり、液體となり、固體となる性質の如きは萬古を通じて變化はない。二二ヶ四といふ數學的眞理にも變化はない動物が營養を必要とするといふことにも歴史はない。それと同じ嚴密さをもつて斷言はできないが、人間が何等かの道德感審美感をもつてゐるといふことも歴史を超越してゐると見て差支へない。もとより進化論及び古代人類學の研究によりて人間の先祖は、これらの特質をもつてゐない下等動物へまで辿つてゆけるかも知れない。けれども、人間の歴史時代の範圍に於ては道德、藝術等がそれ自身に於ては歴史を超越してゐることは疑問の餘地がない。

道德の永遠、藝術の永遠等の主張が此の意味からなされるならば眞理である。併しながら、それは精神のみの有する特權ではない。人間が營養を必要とするといふやうな最も動物的な現象も同様に、若しくはそれ以上に永遠なのである。歴史は此等のも

のを除外する。而して歴史以外には唯物史觀は無力である。

けれども古代と近代とで營養物の内容は變化してゐる。アブラハムの時代にビスケットはなかつたに相違ない。楠正成はアイスクリームの味は知らなかつたに相違ないそれと同じやうにギリシヤ悲劇とイブセン劇とは異り、ラファエルの繪と未來派の繪とは變つてゐる。男女の愛が文藝の題材として千古不變であるのは水や蛋白質が人體に必要であることが萬代不易であると同じである。それどころか類似はもつと具體的な點まで進んでゐる。ギリシヤ悲劇が題材も形式も殆んど同じで現代に復活されてゐるやうに、パンや葡萄酒はキリストの時代と今日と大したかはりはないらしい。けれどもこれだけのことを言ふ場合にも人類史の文明時代はその以前に横はる野蕃時代蒙昧時代に比べると言ふに足りないものであるといふことを念頭におかねばならぬ。

變化する部分を取り去つて考へれば衣食住の永遠性も文化の永遠性も少しも變りはないのであつて、精神といふ文字に眩惑して社會狀態、物質條件は變轉極りなきもの

であるが藝術や道徳はこれ等の變化を一貫して不變であるなど、いふのは事實を無視した議論であるといはねばならぬ。ロマンチズムとナチュラリズムとの相違が土蔵造りと鐵筋コンクリートとの相違よりも少いといふ事がどうして證明出来るか。羽織袴と背廣服との相違が印象派と表現派との相違以上だと證明する方法がどこにあるか。一方が藝術そのものとして永遠なら他方は住宅、被服そのものとして永遠である。かゝる解釋が文化の光輝を奪ふと思ふのは進化論が人間の尊嚴を傷けると思ふのと一般である。

事實上、經濟史、政治史とならんで美術史があり文學史がある事は、人間の經濟生活に變化があつたと同じく文化生活にも變化があつたことを證明してゐる。唯物史觀は歴史に對する解釋であるから歴史を超越した部分には干涉しない。藝術そのもの文化そのものなど、いふ頭の中の觀念に就いて私はこゝで何も言つたのではない。たゞ歴史の中の藝術、文化の歴史が論議の題目となり得るのみである。だから吾々は歴史

を論ずるにあたりては藝術そのもの文化そのもの道徳そのものを論議の對象から除外しなければならない。こゝに唯物史觀の限界がある。若し唯物史觀に對して批難の矢を放つなら、その限界内に矢を放たねばならぬ。限界外に落ちる矢は如何に強くとも鋭くとも一切無効である。吾々が反對論者に對してともすれば嘲笑的態度をとるのは彼等の攻撃の矢が屢々唯物史觀の限界外に落ちるからである。物理學の法則が精神現象に適用出来ないからといつて批難したつてそれは批難にも何にもならない。物理學ははじめから精神現象の法則を發見しようとはしてゐないのだから。唯物史觀が歴史以外に無力だと批難するのは批難者の不明を語るだけだ。そこで私は讀者、特に形而上的思索に興味をもつた讀者にお願ひする。此の小論文を讀まれる人は、しばらく永遠の世界から降つて歴史の世界に眼を放たれんことを。このことは一見極めて容易であるやうだけれどもその實かなり困難で、形而上學的思索になれた人の頭の中では歴史と論理とが紛糾錯雜して、論理的要求が唯物史觀に對して絶えず不滿の叫びをあげる

に相違ないと思ふ。私の聞く唯物史觀に對する批難はすべてそれである。

十

ブルジョア制度に永遠の制度を見、ブルジョア文化に永遠の文化を見る人達は、單にそれだけの理由でプロレタリアに對する反動群となる。何となれば彼等はブルジョアを擁護するつもりではないけれども制度或は文化を擁護しようとするからである。そして今日の制度今日の文化にブルジョアの烙印が捺されてあることをさとらず、それを絶對の制度絶對の文化であると信ずるからである。従つて彼等には今日の文化に對する非常な執着がある。代議制度がなくなれば社會は無政府状態におちると考へる今日の文學者が文壇から手をひけば文學は人間の社會から消えさると考へる。資本家がなくなれば産業は停止すると考へる。賃銀制がなくなれば労働者は働らかなくなると思はる。一言で言へばプロレタリアに社會の文明を支持させてブルジョアジイが過

去一世紀間（或はそれ以上又は以下）に築きあげた文明をプロレタリアの泥足で蹂躪させるくらゐなら、行きがけの駄賃に『文明』そのものを墓場へもつてゆかうと彼等は考へる。

ロシア革命に於ける支配階級及びインテリゲンチヤの態度がそれであつた。ミリュウコフがさうだつた。ケレンスキーがさうだつた。社會革命黨とメンシエヴィキの大部分がさうであつた。Bulgars によると『全資本家階級は、進んでプロレタリアにたゞ一つの権力の地位をでも譲るくらゐなら、社會を血の洪水の中に沈め、物質的精神的文明を、底ひも知れぬ一般的壞類混沌の深淵に突き落した方がましだと決心した』のである。

階級闘争は前にも言つたとほり階級の存在する限り熄むものでない。而して資本主義社會に於ける如何なる社會政策も温情主義もこれを終熄せしめることは出来ない。これはたゞ階級のない社會の實現によりてのみ終熄し得るものである。藝術も文化も

正義も、それが具體的に社會にあらはれる限りに於ては階級によりて兩分されるものである。

ブルジョア藝術、ブルジョア文化はやがて亡びる、併し藝術そのもの文化そのものは永遠だ。それは階級のなくなつた社會に於てのみ語り得る藝術であり文化である。而してその社會はプロレタリアによりてのみ實現される。故にプロレタリアはそれを準備する爲めにブルジョア文化に對してプロレタリア文化を對抗させ、文化をブルジョアの毒手からとりかへさねばならぬ。それは容易な事業ではない。

ロシアが今日プロレタリ

ヤ文化の樹立普及に熱中してゐる有様は、資本主義國の知識階級から見れば幼稚迂遠に見えるに相違ない。しかし各藩の塾から小學校への變化は幕末の漢學者には、更に／＼學問の墮落と映じたに相違ない。今日のプロレタリア藝術はまだ言ふに足りないかも知れない。併しそれはやがて新しい批評の標準をもつて完成さるべきものだ。今

日のプロレタリアの道徳はまだ混沌としてゐてブルジョアのそれから獨立してをらぬしかしそれは新しい秩序の樹立と共に完全に獨立する。プロレタリアには未來がある

(一九二三年四月)

無産階級の立場から見た政治
及び社会問題

政府、議會及び民衆

一

議會制度の萬能を信じた、或はまだ信じてゐる人々の意外にも、近來世界各國に於て議會の無力は公々然と公衆の面前に暴露されて來た。大戰とそれにひきつゞく政治的經濟的混亂は立法部の權力を益々行政部に吸収せしむる機縁となつた。かくして全世界の立憲國の議會は文字通りに討論場と化して、イギリスにはロイド・ジョージ政府の專制が現出した。フランスにはブリアン政府の專制が現出し、大統領ミルランは名實ともにその權力を増大した。合衆國は行政部と上院との間に權力が二分され、大多數の「民衆」を代表してゐる筈の下院は單なるそへ物に過ぎなくなつてゐる。

此時にあたりて日本では最初の平民内閣が組織され專制の實力を獲得して來た。超

然内閣時代には政府はまだしも議會に多少牽制された。それは彼等にとつては議會多數黨の後援を得ることが絶對に必要なからである。ところが平民内閣、政黨内閣ブルジョア内閣の出現と共にこの必要が消滅した。政府は生れながらにして議會の多數黨に擁せられてゐるのである。

政府黨は、(ことによると反對黨も) これをもつて議會の勢力の伸張と思つてゐるかも知れない。併し愛蘭がその代表者をウエストミンスターに送ることが愛蘭の勢力の伸張ではなかつたやうに、政黨内閣の出現は議會の勢力の伸張ではなかつた。内閣は議會の延長ではなくて反對に議會が内閣の延長となつたのである。かくて反對黨は單に討論の相手としてのみしか必要でなくなつた。もつと適切に言へば、政府が國民輿論の上になつて仕事をしてゐるといふ見せかけの爲めのみにはたゞ貴族院の操縦と官僚の殘黨の應酬だけしか必要でなくなつた。在野黨は是非とも、四年目を待たねばならなくなつた。斯く

の如く反對黨が勝利の見込みなき討論の相手に蹴落された議會は、たゞ名ばかりの議會である。一切の権力は、立法權も事實上政府の手に集中してしまつたのである。

最近二三年間イギリスの勞働團體が、彼等の意志の代表されてゐる筈の議會の手を経ずして事毎に直接政府と交渉してゐることは——殊にイギリスが世界の代議政治の模範國であるに鑑み——議會主義者の面上に一大侮辱を加ふるものである。けれども議會はこれをだまつて忍ばねばならなかつた。何となれば議會は實力を失つたからである。議會の力はたゞ議事堂の内部の模擬戦に限られてしまつたからである。そして昔も今も同じやうに討論は事實を解決しないからである。おまけに政府は『解散』『選舉干渉』といふやうな、ブルジョア陣笠共には何より恐ろしい白刃を時々ちらりと陣羽織の下から見せるからである。

政府と議會の連鎖は政府黨によりて結びつけられる代りに却つて切斷された。政府は意のままに議會を操縦することが出来るが、議會は政府に對してカウンターアクト

することが出来ないからである。かくして今日の政府は政友會の專制政府といふよりも寧ろ原内閣、或は生れたばかりの高橋内閣の專制政府である。

二

かくの如き議會の無力によりて直接みじめな立場におかれた反對黨が、その實力を恢復する道はこれを民衆の後援に求むるより他になくなるのは觀易き理である。ところが困つたことは、今日の日本では、政府黨も反對黨もブルジョアの利益のみしか代表してゐない爲めに、一定の境界線を越えて(即ちブルジョアの利益を犠牲にして)民衆に接觸することが出来ないことである。こゝに於て反對黨はブルジョア政黨としてブルジョアの秩序の維持を高唱して、ブルジョアの秩序に對する危険思想、危険運動の防波堤たらんとせば、政府の力、従つて政府黨の勢力を益々強くするの結果となり、

政府黨に對抗し得る實力ある民衆の後援を得んとすればブルジョア階級に従つてそれを代表する自黨自らの利益を犠牲にせねばならぬといふチレンマに陥るのである。

鬭争の舞臺を議事堂の内部に限れば、即ちブルジョアの秩序の範圍内に限れば反對黨従つて議會そのものは單なる討論會をもつて終始せねばならず、鬭争の舞臺を擴大して階級鬭争の形をとらんとせば、ブルジョアの秩序、従つて政黨そのもの、消滅に終らねばならぬ。そこに反對黨の苦悶がある(政府黨は一朝反對黨に蹴落された時に初めてこれを悟るのである)

勿論反對黨は此瀬戸際まで來ると地金を出す。政友會と憲政會との利害關係は一定の限界内ではその利害は相反してゐる。併し一定の限界を越えたと共同の利益を擁護して共同の敵プロレタリアにあたるべく餘儀なくされる。こゝに政府黨の強味があり反對黨の弱味がある。政府黨が秩序を叫べば反對黨は無秩序を叫ぶわけには行かない否でも應でも政府黨の眞似をしてより強く秩序を叫ばねばならなくなる。さうして鬭

争の舞臺は否でも應でも合法的、立憲的の舞臺、即ち議事堂の一室に限らねばならなくなるのである。そして議事堂の外廓は文字通りサーベルの林をもつて民衆と切斷されるのである。

ブルジョアの代表政黨としての地金を出した反對黨は何をもつて政府の後援を有する政府與黨と闘かはんとするか？ それはその黨派が代表するブルジョアの實力が増して來るにつれて大丈夫と思ふ範圍内で一步步民衆と近づくやうに見せかけ、これによつて民衆の後援を得ることによつてある。その民衆への接近のバロメーターは選舉權の擴張である。

併しながら、でも困つたことには反對黨がよしと認むる選舉權の擴張程度は政府黨も亦それをよしと認めてゐるといふことである。政友會の三圓の納稅資格と憲政會の獨立生計との間の差はたゞ文字の差、表現の差のみに過ぎない。次期議會には憲政會は獨立生計の制限を撤廢するに決したと傳へられてゐる。併しそれと同時に政友會

もそれに原則として少しも反對してゐないことは明かである。たゞ議會の多數によりて勝利が確實だと見込みがつけば今一二年それをのばすといふだけのことである。どちらと同じブルジョアの代表政黨である以上これは已むを得ないのだ。

若し政府が極端な反動政府であつて、反對黨のリベリズムの色彩が非常に顯著であるとするれば、反對黨はすべての悪政を悉く政府に轉嫁して「現政府さへ倒せば」といふスローガンを以て、幾分民心を收攬することが出来る。併しそんな時代はもう二度と來さうにない。政權はブルジョアの手に握られてしまつたのだ。このブルジョア内部の闘争が公然と民衆の面前に暴露された以上は、この闘争に民衆をまさこむことは益々困難となり、反對に民衆はこれを階級闘争に逆用しようとするやうになる。二羽の鳥が、俺の羽が白い、いや俺のが白いと羽をひろげて見せびらかしてゐたとしたら、これを如何にすべきであるかといふことだけがプロレタリアの問題だ。

議會が階級闘争の機關として少しも役にたかないとわかれば民衆（斷つておくが民衆といふ言葉は民衆の大部分なる無産者をさすのだ）は議會に對して絶對の冷淡を維持すべきだ。實際その傾向は隨所に起つてゐる。知識階級のラヂカルの意見は殆ど一齊にその方向に進んでゐる。今秋の日本労働總同盟（友愛會）大會には一労働團體から黨の綱領より普通選挙の主張を削除すべしとの動議が出た。これで見るとプロレタリアの間にも議會無用論が多少の勢力をもつてゐることがわかる。實際プロレタリアがブルジョアの議會に希望をつなぐことは徒勞だ。併し今日大多数の民衆にはまだ議會は傳統的信任をもつてゐる。

反對黨は民衆の後援に渴してゐる。併し民衆の中に投ずることが出来ない。この時

に民衆が議會を善用し得る道は逆に反對黨の中に投ずることである。押掛け女房に出かけることである。議會が存続する限り、而してブルジョアが政權をにぎつてゐる限り、無産者はこれを利用するか利用されるかである。

普通選挙と合法的労働組合とはブルジョア社會發達の頂點であると言はれてゐる。従つて普通選挙に賛成することはブルジョアの支配力を益々強めることになる。併しながら問題が制限選挙と普通選挙の何れかを選ぶべきである時、吾々は即座に普通選挙を選ぶべきである。リベリズムはブルジョアの特色である。併し問題が反動政策と自由政策との決勝である時には吾々は即座に後者に加擔すべきである。これは妥協ではなく、從來支配階級に慣用されて來た *divide et impera* のタクチックの逆用である。勿論これとても時と場合による。

歳は暮れんとしてゐる。政府は反動政策の爪牙を隨所に現はしはじめた。憲政會は獨立生計を削除して陣容を新たにして次期議會に普通選挙を提出せんとしてゐると傳

へられてゐる。そこに吾々無産階級の乗すべき機会があるかないかを吾々はしらべて見ねばならぬ。ワシントンでは國際間に決闘條件の制限が協定されたとの報がある。

國內國外のブルジョアは軍費の輕減によりて負擔を軽くし、それによりて生ずる犠牲をプロレタリアに押しつけて久し振りでない、正月或はクリスマスを迎へようとしてゐる。併しクリスマスツリーの裝飾の蔭には失業者の慘狀が映るではないか。歳末賣出しのイリュミネーションは薄給腰辨の古洋服の糸目をまざ／＼と見せるではないか。忘年会の歡樂の背後には小作人の怒號が聞えるではないか。

ブルジョア社會に於ては一つの問題が解決される度にその條件は「無産者を犠牲にして」であつた。それは無産者が利用されてゐたからである。ところが議會が無力になつて在野黨が後援を民衆に求めて來た時、民衆は逆にこれを利用して方法を講じ得るのだ。そしてこれによりて、凡ての問題を「ブルジョアを犠牲として」解決する方向にむけねばならぬ。民衆がその解放の爲めの第一歩を踏み出す機會は熟してゐるのだ。吾々は常に機會を捉へる用意が必要である。(一九二二年十二月)

ラッセルと社會主義革命

一

哲學者や思想家が、新しい學説を主張する時には、常に從來の學説を一夜の中に根こそぎひっくり返して、(少くも引っくり返したつもりになつて)、その跡に彼自身のオリヂナルな學説を打ちたてねば承知ができない。かういふ連中は、觀念の世界から、政治的、社會的、或は經濟的の現象の世界に降つて來ても、其癖から脱することが出來ないで、あらかじめ用意しておいた觀念の體系を事實の世界にあてはめやうとするさうして此の觀念の體系に合致しないといふだけの理由で、以前の學者が事實の進化に即して發見し又は構成した法則、甚しきは事實そのものをさへも「これは間違ひだ」と一目で斷定して、彼自身の獨創的或はそのつもりの觀念をこれに置き代へる。エン

ゲルスがドイツ人の理論癖を笑つたやうに、(註一)かくの如き人は「論理の第一原理も、宇宙の根本法則も、たゞ單に、最後に此の新発見の學說に導く目的のためにのみ太古から存在してゐたのである」といふことを證明しなければ」氣がすまないのである。バートランド・ラッセル君が社會主義、特にロシア革命を批評する態度もその一つである。雜誌「改造」の五月號に彼が寄稿した『未發達國に於ける社會主義』といふ一文は、ロシアの新經濟政策を批評して、未發達國(ロシア、支那の如き)に於ける社會主義實現の困難を主張し、從來の社會主義の理論及運動が凡べて間違ひであつて彼自身の説のみが正しいことを力説したものである。即ち彼によれば西ヨーロッパのマルクス主義(デモクラシー)もロシアのマルクス主義(ホリシエヴィズム)も等しく間違つてゐるのである。双方とも『真理の重要な部分を見逃してしまつたのである。』即ちボリシエヴィキは、理論的には左様でなくとも、實際的には、デモクラシーが社會主義の目的の一つだといふ事實を忘れ、その敵手は、デモクラシーは無教育な國民に突然

施すことは出来ぬといふ事實を忘れたのである。

吾々はボリシエヴィストと社會民主主義者とを一まとめにして健忘症患者と診斷したラッセル君の言をそのまま受け入れる前に、ラッセル君自身の健康状態を診斷しなければならぬ。

註一、エンゲルス、『空想的及科學的社會主義』英譯序文

二

『「社會主義」とは如何なる意味か。』

ラッセルと共に吾々はこの問題からはじめやう。ラッセルは社會主義の定義は政治的と經濟的との二つの部分から成ると冒頭し、『生産に關しては、凡ての土地と資本は國家の財産でなければならぬ』といふ。『資本』といふ言葉は曖昧だ。資本といふ言葉には剩餘價値の觀念がだにのやうにこびりついてゐる。(註二)これは『富の生産及び

分配機關』とすべきだ。國家の財産とは何だ。國家は階級支配の機關だ。社會主義の社會には階級はない筈だ。階級はなくとも『階級支配』だけが残るのか。若し残るとすればそれは何階級の國家か？ブルジョア國家か。プロレタリア國家か？

『分配の方面では、各種の仕事に對する報酬は、絶對の必需品を求めると必要な程度を最少限度とし、仕事の能率を舉げる上に最大の刺戟となる點を最大限度として、公共的權力によりて決定せられねばならぬ』

『報酬』とは何だ。『必需品を求めるとは何だ。『報酬』とは貨幣のことか、そしてその貨幣(切符或はカードの類でもいゝ)で、必需品を求めるとは何だ。社會主義の社會にも賣買があるのか。ラッセルは吾々を社會主義社會へつれてゆく代りに、彼の頭の中の小ブルジョア國家へ吾々をつれてゆく。吾々の解するところでは、社會主義の社會では(過渡期は例外だが)仕事に對する報酬なんていふものはない。賣買もない。必要なだ

けを誰でも社會の共同貯蓄所からとることができるとは。そんなことをすれば澤山一人でとつて他人の分がなくなると心配する人があるかも知れない。プハリンは此の種の、ブルジョア社會を離れて社會を考へることの出来ない人々の杞憂に對してかう答へてゐる。(註二)『今日人は電車に乗つて切符を三枚も買つて一人前の座席を占め、あとの二人前を空けてをくやうなことはしない。共產社會では一切の生産物についてそれと同じなのだ。誰でも要るときに得られるから、餘分の物を買つても何の益にもならぬ。——だから共產時代の初期に於ては仕事によりて貨物が分配されるが後には單に各員の必要によりて分配される。』これ以上の説明は蛇足だ。最大限度の『報酬』といふことも従つて社會主義社會では意味をなさぬ。報酬がなければ最大限度も最少限度

ラッセルの以上の定義が意味をもつとすれば、過渡期の、少くも初期の社会主義社会の定義だといはねばならぬ。それにしてもブルジョアの国家でもなければプロレタリアの国家でもないたゞの『国家』や『公共権力』などをもち出すのは説明ではなくて却つて神秘化であり事實をわざと混乱させるだけのものである。ところが彼はこれを過渡期の社会主義社会の定義だと解されは困るとでも思つたかのやうにわざ／＼次のやうにつけたしてゐる。

『けれども社会主義は、たしかに所得の平均をその理想とする。但し各種労働者の特殊の必要によりて若干の相違が課せられるかも知れない』。社会主義、しかもその理想状態に於て、所得といふ資本主義の幽霊がまだつきまとふのだ。ラッセル君によれば社会主義は私有財産、賃銀制度の廢止ではなくて、財産の均分、賃銀の平均、所得の平等といふことになるのだ。これが經濟方面のラッセル君の社会主義の定義だ。併しこれはラッセル君の獨創ではなくてブルードン以來の小ブルジョア社会主義者が千

萬遍も繰り返したたは、ことである。

註一、例へばラファクはかういつてゐる。資本とは利を生むもの、謂である。一ヶ月或は一年の終りに利子を生む貸金、耕作さるゝ土地、所有者によりて、なく賃借労働者によりて動かされる労働用具等がそれである、……資本といふ名詞には労働なしの利潤といふ觀念がネッサスの下着の如く附着してゐる『財産の進化』

註二、アハリソン『共産主義入門』

三

こんな風に穿鑿してゐてはきりがなから、ラッセル君の社会主義の定義の中で政治の部分に關するものは省略する。『社会主義は専制政治又は寡頭政治と兩立せず』といふやうな寢言は水と火とが違ふといふ以上の意味をもつてゐるだらうか。そして次を見やう。

『けれども現行制度より社會主義への推移は困難に満ち、その企てが成功するか、野蠻時代への復歸となつて終るかは疑問である。豫言者の洞察に於ては驚くべきものであつたが、必ずしも完全無瑕でないマルクスは、全然實現されさうもない、机上の計畫通りの單純さを以て此變革が遂行されるやうに考へた。』

ラッセル君は一體どこからこんな珍らしい材料を探して來たのか。『机上の計畫どほりの單純さ』とは何のことだ。吾々の解する限りでは社會主義革命或はプロレタリア革命の困難をマルクス以上に明瞭に洞察してゐたものはないといつてもいい位だ。しかも歴史の必然を信ずる彼はこの困難が打ち克ち難きものでないといふことを知つてゐたゞけなのだ。ラッセル君によれば百萬の敵をも恐れないものは、百萬の敵が『筋書通り簡單に』破れると考へてゐることになるのだ。そして一人の敵にでも恐れて逃げるものは、一人の敵を破ることの困難を最もよく知悉してゐたことになるのだ！

マルクスはブルジョア革命とプロレタリア革命とを比較して次のやうに言つてゐる

『十八世紀の諸革命の如きブルジョア革命は勝利から勝利へと迅速に進んでゆく……これに反して、十九世紀の革命の如き、プロレタリア革命は、斷へず自らを批判し、絶えず自らの進行を遮り、完成されてしまつたやうに見えるものへ後戻りして、改めて出發し直し、最初の計畫の不徹底、弱點、つまらなさを、慘酷な程餘すところなく批難する。』(註一)又彼はかうも言つてゐる。『労働者階級は彼等自身の解放を成就し、それと共に現在の社會がそれ自身の經濟的動因によりて否應なくそれに向つて進展しつゝあるより高度の社會形態を現出する爲めに、長期に亙る闘争と、一連の歴史的過程とを通過し、境遇と人とを變へてしまはねばならぬ、といふことを知つてゐる。』(註二)資本主義から社會主義への推移が困難に満ちてゐることはラッセル君の言ふとほりだ。しかしマルクスがそれを知らなかつたといふのは、マルクスが知つてゐたといふことをラッセル君が知らなかつたか知つて知らぬふりをしてゐるかどちらかだ。反マルクス主義者の常習癖たる獨斷かごまかしのいづれかだ。正直な、無類の好紳士ラッ

セル君の場合では勿論前者だらう。「批判」を得意とする哲學者の獨斷、論理で押し通さうとしてフランス派の哲學者と論戦さへした論理の達人の論理的誤謬！

ラッセル君はマルクスの社會革命觀を次の如く要約してゐる。

『彼(マルクス)は……十九世紀前半の英國の經驗に照らして尤も至極であつたやうに——資本家の存する限り、資本家と無産者との間の分界線は飽まで明確に留まり、無産者は自己と家族とが辛うじて生活し得るだけの、食ふや食はずの賃銀しか得られぬものと考へてゐた。資本の集中によりて資本家は次第に少數となり、無産者はその悲惨な生活の經驗や、それに對する鬭争の結果、一層不滿を強められ、一層よく組織せられるやうになり、その鬭争は最初は地方的、次には全國的、そして次には國際的となり、國際的になつた時に彼等は、無産者の非常な數的優越によりて勝利を占める。それから突然、革命によつて全經濟組織が變更せられ、國際的社會主義が確立せられる、といふのである。』

ところがラッセルによれば「これ等凡ての點を通じてマルクスは多少謬まつてゐたことが證明せられ」(註三)『マルクスの承認した賃銀の鐵則は、(註四)經濟學上の誤謬であつたのである。然らばラッセル君の『證明』とは何をさすか。曰く今日では『資本家とプロレタリアとの境界線は明確でない』何故かといふと『労働組合の領袖連で相當な収入を有するものはブルジョアの安逸な生活をしてゐるからである』！『僅少な大企業に於ける資本の集中は資本家の數の減少を意味しない』何となれば『合資會社の發達によりて』！日本のブルジョア學者の中にも、郵便貯金によりて労働者が同時に資本家になれると説いた人があつた。組合の領袖に五十人や百人、人間らしい生活をしてゐるものがあればそれで階級の分界線が明確でなくなつたといふラッセル君に對しても、ブルジョアが全部白装束をつけプロレタリアが赤ズボンでもはいて、小學生の源平遊戯のやうななりでもさせなければ階級對立を教へることはできないだらう。又合資會社は英語でも日本語でも読んで字の如く資本を分けるのではなくて資本

を合せるのである。第二インタナショナルお歴々の修正論の魔法の眼鏡を手に入れられたらしいラッセル君には何もかも逆しまに見えるに見える。

更にラッセル君の『証明』の傑作は次の一節だ。曰く『プロレタリアの不満は一向増さなかつた。イギリスのプロレタリアは今日よりも百年前の方が慥かに革命的だつた』これが一體證明なのか。理由を示さない断定が證明になるのか。こんなことはむし返しと獨斷と、そうして拙劣なごまかし以外の何物でもない。論理學の教科書にもこんなことが證明だとは書いてない。證明とはラッセル君が百も承知の通り判斷の眞偽を確定する證據を示すことでなければならぬ。

次に、『突然、革命によりて、全經濟組織が變化し萬國的社會主義が樹立される』とは何を指すのだ。勿論革命の中の一現象は一切の現象と同じく起る瞬間は突然だ。ギリシヤの勃興もローマの滅亡もこの意味で突然だ。それ以外の意味でマルクスは『突然』なんていふ言葉を使ふはづがない。一例をあげると彼はかう言つてゐる。(註五)

『労働階級の革命の第一歩は、プロレタリアが支配階級の位置に上ること、デモクラシイの戦鬪に勝つことである。プロレタリアは、その政治的優越を利用して、徐々にブルジョアジイから一切の資本をもぎ取り、一切の生産機關を、國家、即ち支配階級として組織されたプロレタリアの手中に集中し、生産の總量をできるだけ速かに増加する。』

これをラッセル君は突然といふのだ！

註一、『ルイ、ボナパルトのブルユメール十八日』

註二、『フランスの内亂』

註三、『成る程ペルンシュタイン先生によりて數學者には何より心強い統計によりてこれは證明された。併し數學者でない吾々にとつては統計だからといつて俄に信用できぬ。反射鏡を上から照らすのと、下からかざすのと横で受けるのとでは統計の結果がちがつてくることを知つてゐるからだ。

註四、ラサールの『賃銀の鐵則』が『誤謬』であつたことを證明したものはマルクス自身なのだ（ゴータ綱領批評参照）併しこゝではラッセルは『ゲーテの永劫の大鐵則』から『鐵』の一字を借りてきたのかどうかは知らぬが『鐵』といふいかめしい言葉に吾をわすれてマルクスの賃銀労働説を同じ名稱で呼んだのであらう。

註五、（共産黨宣言）

四

マルクスによるとブルジョア社會は二つの方面から必然に崩解する。一はその經濟的桎梏により、他は階級戦争によりである。この資本主義の「矛盾」、その「墓穴掘り」の中前者はマルクスによれば『自らを殺す武器』であり、後者は『武器を繰る人、近世労働階級、プロレタリアン』によりて意識的に行はれる。此の二つの要素は離れぬものではない、けれども同じものではない。前者は生産關係の矛盾であり、後者は

その意識的表現である。そこで國際的資本主義の戦線の最も脆弱な部分に、精銳なプロレタリアがあたると先づそこから崩解をはじめるのは當然のことである。一九一七年當時のロシアは戦勝にひきつゞく官僚とブルジョアとの間の内亂によりて資本主義が最も弱りきつてゐた。プロレタリアの前衛はこの好機を捉へた。そしてマルクスの所謂『第一步』を成しとげたのである。マルクスは社會革命の第一步は、資本主義の完成だとは言はなかつた。資本主義の成熟するまでまつてゐることだとは尙更言はなかつた。プロレタリアが支配階級の位置に上ることだと明言した。

經濟學は何といつても學問である。經濟學のカテゴリーをいくら巧みに組み合せて見たところで社會革命とはならない。それと同時にそれをどんなに精巧に『獨創的』に組みあはせて見たところで社會革命を防ぎとめる事もできない。ところがラッセル君によると社會革命はプロレタリア大衆の運動ではなくて、カテゴリーの組み合わせである。そこで彼は社會革命を論ずるにあたりて、労働大衆の内面的成長にはいつてゆく

き手段が大體に於て適用されるだらう』

ラッセル君の大発見、未開國に於ける社會主義實現の困難といふ大発見は、とうの昔にマルクスが簡單明瞭に発見して發表してしまつてゐたのである。ロシヤのボリシエヴィキもマルクスと同じく神でない。細部の政策に於て澤山誤算があつことは彼等が卒直にこれを認めてゐる。併し一九一七年のレーニンは一九一九年のウイルソンほどの見込違ひはやらなかつたことはラッセル君と雖も承認せざるを得ないだらう。

吾々は此の點をあまりに長く語つた。それはロシヤ新政策に對するラッセル君の勇敢な判断と不審との連続が凡べてこの一點に對する無知と誤解に因してゐると思ふからである。

註一、『共産黨宣言』

註二、アハリン『共産主義入門』

五

次にロシヤ革命に移る。

ラッセル君は先づ『ロシヤに於ける共産黨政府の樹立は、半ばマルクス説を確め、半ばこれを打破るやうな、新しい數々の考慮すべき問題を提出した。ボリシエヴィキは殆んど資本主義的産業の手を觸れてゐない國に共産主義を打ちたてやうとしてゐる。これは、マルクスが信じたやうに、資本主義に移るために必要缺くべからざる段階であるか、或は産業はこれまで發達してゐなかつた國に初めから社會主義的に發達し得るか否かといふ問題を提起する』といふ。

ロシヤ共産黨政府の樹立はマルクスの所謂『第一歩』を踏み出したただだ。ところがマルクス説を寄木細工と見るラッセル君はこの第一歩を分析して、半分はマルクス説を確かめ半分はこれを打ち破るといふ。先づ第一にロシヤが資本主義的産業の殆んど

手をつけてゐない國であるといふのは事實に反する。殊に世界大戦は急激に生産方法を工業化した。農業はもとより工業化されてをらぬ。併しそれはロシアに限つたことでない。若し小商工業者、小農が悉く絶滅するまで社會革命が起つてはならぬといふなら、マルクスは何の爲めに共産黨宣言を書いたり、共産黨の任務を論じたのであるか。次にボリシエヴィキが資本主義的産業の殆んど手を觸れてゐない國に共産主義を打ちたてやうとしてゐるといふのは嘘だ。もとより労働大衆の目的は共産主義の實現である。けれどもボリシエヴィキがロシアのバーバリズムの上にすぐにコミニズムの接木をしやうとしてゐるのでないことはラッセル君が長々とその次に引用してゐるレーニンの『農業税の意義』を見ればわかる。そこでロシア革命はラッセル君が考へたやうな問題を提起するものでない。却つてその問題を實際に解決したのだ。資本主義は社會主義に移るために必要な段階であるかといふ問に對し、ロシア革命は『然り』と答へてしまつてゐるではないか。ロシア革命はマルクス説と矛盾する問題を『提起』

するかほりに驚く程正確にマルクス説の五確を証明したのだ。ラッセル君のいふやうな疑問は、若し實際起つたすればロシア革命によりて解決されてしまつてゐるのだ。たゞラッセル君の實驗室にある模型のロシア革命だけが今頃そんな問題を『提起』してゐるのだ！

次にラッセル君はレーニンが『農業税の意義』の中で述べてゐる經濟的發達の五段階をあげ、『レーニンは、いかなる段階をも跳び越すことはできず、正當な順序を踏まなければならぬと考へてゐるらしい』と言ひ、そこへ括弧して『これはボリシエヴィキの政策とは殆んど調和しない』と附け足してゐる。ラッセル君が『農業税の意義』を夢の中で讀んだのでなく、一頁でも現實で讀んだとすればこんな疑問は起らない筈なのだ。ロシア革命が解決し、レーニンが『農業税の意義』の中で説明してゐることはそのことだけだといつていゝ位ではないか。

ボリシエヴィキの政策は共産主義實現のための刻々の條件に應ずる政策だ。資本主

カウツキーを駁す

マルクス、エンゲルスは、彼等の社會學說を社會民主主義と呼んでゐたが、ラサルレ、ブルードン一派のそれと區別する爲めに後には共產主義と呼んでゐた。併し名稱はどうでもいゝ、問題は實質である。吾々がマルキシズムの政策を社會民主主義と呼ぶことは少しも差支ない、けれども一の社會民主主義を奉ずるマルクスが他の社會民主主義に對して常に猛烈な皮肉と攻撃を浴せてゐた事實を見逃してはならぬ、即ち彼は二通りの社會民主主義を念頭にもつてゐたのだ。

カウツキーは解放二月號の『社會主義とデモクラシー』といふ論文で「制度としてのデモクラシーを念頭におく時ブルジョア的デモクラシーを云爲するは背理である」其處で吾々はデモクラシーを排斥するのではなく、プロレタリアを精神上成熟し獨立せ

しめねばならないと云ふことになるのである」と言つてゐる。

プロレタリアの支配即ちプロレタリアの獨裁とデモクラシーとを區別した點に於てカウツキーはマルクスに一致してゐる。併しマルクスは常にプロレタリアの支配權の擁得を高唱したに反し、『カウツキー』は制度としてのデモクラシーを何よりも大切にしこれを絶對視して、マルクスが引きはなしたブルジョア・デモクラシーとプロレタリア・デモクラシーとをつぎあはせることに腐心した。マルクスはプロレタリアの獨裁を資本主義から社會主義へ移る過渡期の政治形態として避くべからざるものであると見たが、カウツキーはプロレタリアの獨裁はデモクラシーに反するとして排斥した。この點がマルクスと違つてゐる。

カウツキー式(ブルジョア)デモクラシーに對してマルクスはかう言つてゐる。「社會民主主義の特質を要約するとかうである、資本と賃銀奴隷との兩極端を撤廢する爲めにはなく、この兩者の對立を緩和し、これを統一的全體に變形させる爲めに彼等は

民主共和的諸施設を必要とするのである」(「ブルメール十八日」)カウツキーはマルクスがすてた鼻紙の皺を伸ばして、マルクスの眞筆として有難がつてゐるのだ。

マルクスは徹頭徹尾階級闘争に終始してゐたが、カウツキーは階級闘争を忘れてしまつて「デモクラチックな制度とは總ての精神健全なる成年國民が、階級や、國民性や、宗教や、最近に於ては又男女の上の區別なしに平等なる政治上の權利を有するところの一制度である」といふ。カウツキーにとつては社會革命は十八世紀の哲學者にとつてと同じやうに、階級戦争ではなくて凡ての人間が政治的權利の空證文を與へられることである。マルクスはそれに對して前もつてかう答へてゐる。

「デモクラットは彼等に對立する一特權階級の存在は認めるけれども、彼等自身は爾餘の大衆と共に人民を形成するものであつて彼等の代表するものは人民の權利であり彼等の利益は人民の利益であると考へてゐる」と。カウツキーもフランスの民主黨員も階級を忘れてマルクスが五つ六つの要素に分解した人民或は國民といふごもく飯をこ

しらへる、さうしてそれが『平等』なのだ。

レーニンがブルジョア民主主義とプロレタリア民主主義とを區別したに對して、カウツキーはマルクスが念頭にはそれを區別してゐたに拘らずその文句を使用してゐないことを唯一の頼みとして、階級を超越したデモクラシーそれ自身をひっぱり出して、ポリシエヴィキ攻撃の武器としてゐるのであるが、眞のマルクスは武器を逆まにして、皮肉にも七十餘年前のフランスの例で彼の正體をあばいてゐる。カウツキーが『デモクラシーは伸縮自在なものであつて』、と言へば前もつてエンゲルスは『伸縮自在なデモクラシーといふ名稱をつかふことは不可能だ』と言つてゐるのである。

次にカウツキーはロシアのソヴェット制度に對し「最も奇怪なるプロレタリア的アリストクラシー」であるとの奇怪なる攻撃を加へたあとで「デモクラチツクな國家形態をば一定階級の支配と同一視することの不條理なるは、我々の知るところである」一定階級の支配を明白に確認するところの制度は常に一のアリストクラシーである」

との奇怪な言説を吐いて居る。所でカウツキーの言ふ「吾々」の中へは少くもマルクスやエンゲルス等が含まれてゐないことは明かな事實である。國家と階級との無關係、しかもマルクスの名によりて彼はそれを主張するのだ。辯駁は無用だ。たとへばエンゲルスはかう言つてゐる『共產主義の究極的の政治上の目的はあらゆる國家従つてデモクラシーの粉粹である。』又彼はかうも言つてゐる『けれども實際上國家は一階級が他階級を壓制する機關に外ならぬ。それは民主共和國に於ても君主國に於ても同じである（マルクスの『フランスの内亂』の序文）マルクス、エンゲルスから見れば階級支配の機關以外に國家はない。カウツキーから見ればデモクラチツクな國家形態と階級支配とは同一視することが出来ない。しかも猶ほカウツキーは厚顔にも無恥にも「在來の見解に對しマルクスの所見が一頭地を抜いてゐることは疑ひを容れない」など、方々で寢言を言ふのである。

次に彼は彼の一般論から圓曲に矛盾した方面へ論點を進めプロレタリア的アリスト

クラシー（無産階級獨裁）はロシアに於ては異常なる事情の産物であるから成功したのであると言つてゐる。ロシア共産黨が四年以上に亘りてまだ政權を失はないと事實に對し、流石に自説と矛盾するのまかまはず何とか言つておかないと氣がすまなかつたと見える。そこでマルクスによれば過渡期の政治形態として缺くべからざる無産階級獨裁がカウツキーの手にかゝると、異常なる事情の産物』となつて『ロシアに於ては』是認される。併し往生際のわるい彼はそのすぐあとでまた横車を押しはじめた。曰く「實にロシア以外に於て人爲的に斯くの如き事情をつくり出さうとする一切の企圖は悉ての暴動が頓挫せねばならぬ如く頓挫したのである」と。

勿論ロシアの事情は人爲的に他國につくり出せるものではない。併し如何なる事情に於ても社會革命の過渡期に無産階級獨裁、カウツキーの所謂プロレタリア的アリストクラシーが必要であることは眞のマルキシストの擧つて認めてゐるところである。たゞ獨裁の寛嚴、その程度等は、各國の事情、搾取階級の抵抗の強弱によりて異なるこ

とは無論である。次にカウツキーはかゝる企圖は暴動と同じく頓挫したと言つて何か頓挫するアプリアリの理由があるやうに言つてゐるが、暴動にしろ革命にしろそれが頓挫するのは、反對勢力がより強いからであつて、それ以外に何等神祕的な理由はないのだ。若しどこかの國、例へばドイツ、ハンガリー等でロシアのやうな企圖が行はれて、それが頓挫したとすればそれは、自國の搾取階級と國外の資本主義の壓迫がより強かつたからに過ぎない。吾々はハンガリーのソヴェイエツト共和國が如何にして倒されたかはカウツキーの宣托でなしに、原因結果の法則で理解することができる。

最後にカウツキーは現在の奴隸制度を永遠に確立し、今日のプロレタリアを永久に賃銀制度の鐵鎖につないでおかうとする使命を完うする爲めに、得意の經濟論を振り廻し、各國のプロレタリアに對してブルジョア經濟學者、といふよりも代言人らしい講義をはじめた。曰く「今日の勞働プロレタリアは普通教育に於ても又軍事上行政上の専門知識に於ても、従前自己を凌駕してゐた諸階級に打ち勝つべき資力も閑暇も有

してをらぬ。従つてプロレタリア的アリストクラシーが成立するとしても、軍隊の指揮はこれを舊來の將校等の手に委ね、國家の行政はこれをブルジョア出の知識階級の手に委ねねばならぬであらう。然らずんばプロレタリア自身これに必要な知識を獲得しなければならぬ。此場合には、プロレタリアは最早や生産に従事するプロレタリアではなくなる。即ちかくの如きことは生産行程を犠牲としてのみ行はれるのであつて生産行程は爲めに忽緒に附せられ破滅に歸することゝなるのである。カウツキの師事するマルクスにとつては革命は労働者の武装である。ところがカウツキによると労働者が武装することは、政治を行ふことは、生産の破滅を意味する。マルクスにとつてはプロレタリアの歴史的使命はブルジョア社會に代る共産制の樹立である。カウツキにとつてはプロレタリアの使命はブルジョアをして益々搾取を便利にするためにいつまでもだまつてブルジョア生産をつゞけゆくことである。

資本主義國では平時に於て龐大なる常備軍をもち、どこの國でもその將校は兵卒と

比べて比較にならない給料を國家から與へられてゐる。戰時に於ては實に數百萬乃至一千萬の軍隊を動員した。更にその行政組織の複雑なことは驚くばかりである。國務大臣から巡查に至るまでの官吏の等級、それに仕拂ふ國家の給料は莫大なものである。それにも劣らぬのは民間諸會社に遊食してゐる重役以下の元員である。然るにカウツキはかくの如く高價な非生産階級を包容する資本主義國家には眼を閉ぢて、所謂プロレタリア的アリストクラシーに向き直り、これを維持する爲めには多數の生産者が非生産者となるから、生産行程を犠牲にしなければならないことは出来ないといふのである。これは明かにロシアを念頭において言つたものと思はれるが、カウツキはマルクス經濟學の蘊蓄は深いさうだけれども算術は下手だと見える。ロシアでは前に言つたやうな遊食階級をなくしやうとしてゐる。ブルジョアには強制的労働をさせて一人前の人間にしやうとしてゐる。そして給料の上からいつても政府委員と普通の労働者との間に殆ど變りない最も『經濟的な』行政を行はうとしてゐる。赤軍も初めは少數

の志願兵で組織されてゐた。どちらが生産的であるかは簡単な算術の問題である。それが今日の如く龍大の赤軍を必要とし、多少生産行程を犠牲にしなければならなくなつたのは内外ブルジョアの陰謀と反革命運動の爲めである。

マルクスは『活動寫眞』といふ言葉を知らなかつたやうにブルジョア・デモクラシーといふ言葉も或は知らなかつたか知れぬがブルジョア共和国といふ言葉をよく使つてゐる。そして「革命と反革命」の中で一八四八年のドイツのブルジョア共和主義者を笑つて、彼等はフランスで今や非難的になつてゐるものをこれからドイツにうち建てやうとしてゐるのだと言ふ意味のことを述べてゐた。或る點まで今日のドイツにもあてはまるやうに思へる。カウツキーは獨立社會黨員と共にブルジョア共和国を謳歌してゐる。しかしドイツの無産階級は不屈きにも此の『デモクラチックな國家形態』をブルジョア階級の支配と『同一視』してゐる。(一九二二年二月)

文藝運動と労働運動

—

明治以來の文藝運動は流派と流派との争であつた。それは單に個々人の性質や、趣味や、學問や、交友關係によつて集る群と群との争ひであつた。論争點は主として描寫の様式、文體、せいとくのところで藝術價値の見方、人生觀の相違にとゞまつた。

最近に起らんとしてゐる階級藝術の運動は、少くもその本質に於ては階級闘争の一現象、階級闘争の局部戦、階級戦線の一部面に於ける闘争でなければならぬ。従つてこれは單なる文學運動、紙上の運動としては解決の見込みがない。階級戦の主力なるブルジョアとプロレタリアの決勝によりてのみ解決されるものである。

かくの如くプロレタリア文藝運動の意味を局限することは、文學者にとりては不満

であるかも知れない。文藝に一生を捧げてゐる人達にとつては文藝運動は一切であり、絶對であつて、階級闘争の一小部分の戦線を分担するといふだけに止まらぬといふ人があるかも知れない。然しながらさういふ人々は階級藝術の意義を遂に理會し得ず、調子に浮かされて吾知らずその運動の中へ飛びこんでゐる周章者に他ならぬのだ。さういふ人々は今の内に、けちくさい、あまり見榮へもしない階級戦の隅つこの方に陣どる代りに、『階級』といふやうな窮屈な鎖はかなぐりすて、藝術そのもの、晴れの舞臺へ出づべきだ。

如何なる運動にも不純分子が集る如く、階級藝術の運動にも不純分子が寄つてたかつてそれを利用し、くひものにしやうとする。階級藝術の旗じるしの下にかくれてこそ泥をはたらかうとする者がある。かくてはじめの中は階級藝術の問題は無名作家と流行作家との争ひのやうに見られてゐた。實際、社會主義運動の中に、働くことのきらいなごろつきや食ひたほしやがまじりこむと同じやうに、階級藝術運動の中にも、

文藝のいろはもわきまへない連中が、糞真面目な月給取商賣はいやだからといふのであはよくば流行作家になりすまさうといふどえらい野心を抱いて飛びこんだものゝあつたことは事實である。プロレタリアの運動としての文藝運動はまづかういふ人々の蟲のよい野心に對して答ふところがない。プロレタリアの文藝運動は流行作家の悪口をいふ運動でもなければ、新進無名作家を引きたてたり擁護したりする運動でもない。無名と有名、流行と非流行とは問ふところでない。それは階級戦である。ブルジョアに對するプロレタリアの對抗運動である。

次にプロレタリアの文藝運動は文藝運動であるよりも先づプロレタリアの運動であることを念頭にをかねばならぬ。だからその綱領は文藝上の綱領ではなくて、プロレタリアそのもの、綱領でなければならぬ。プロレタリアの解放——それがプロレタリア文藝運動の唯一の綱領である。それ以外のものを求めるものもまたプロレタリア文藝運動の陣營を去つて『階級』の『上』に赴くべきだ。文藝の争ひの奥に階級の争ひを認

むるものゝみ、影法師のうしろに實體を、枝葉の下に根幹を認むるものゝみが階級藝術運動の戦士となり得るのである。

階級闘争の決勝戦はたゞ本隊の衝突によりてのみ決せられる。文藝運動はこのプロレタリア大衆の運動と協調聯絡を有しなければ全然無効である。大衆と離れた運動はたゞ徒勞であるか或は邪魔になるだけのものである。自ら階級文藝運動の戦士を以て任ずる人々にして往々これを理會しない爲めに大衆に對する運動を個人同志のこせりあひと勘ちがひしてゐるものがある。論敵や流行作家を緘口せしめることが何等かの絶對的意義を有してゐるかかのやうに彼等は思ひこんでゐる。併しながら、局部の些々たる勝利から全線の勝敗が逆睹されないと同じく、そんなことはいふに足りない。文藝家が凡てプロレタリアの軍門に降るとしても、依然としてプロレタリアの文藝運動は繼續される、一層の熱心をもつて、大衆がブルジョア觀念から解放されるまで。ブルジョア階級がたをれるまで。

要するにプロレタリアの文藝運動はそれ自身に絶對意義を有するものではない。プロレタリアの政治運動や労働運動との提携によりてのみ意味があるのである。そんな相對的意義しかない運動では張り合えないと思ふ人は、絶對運動に携るがよい。そして神でも射とめるがよい。太陽でも吹き落すがよい。

プロレタリアの文藝運動は單なる觀念と觀念との戦ひではない。その背後に利害と利害とが睨みあい、権力と権力とが對峙してゐる。だからその運動は觀念の一起一休でけりがつくものではない。それは長期にわたる、あまり華々しくなく、しかも困難に満ちた運動である。萬人歡呼の裡に決勝線に入るマラソン競争ではなくて、雪と險路と窮乏と寒氣とのシベリヤ旅行のやうなものである。そしてマラソン競争のやうに勝つても褒美が貰へるわけではなく、途中で行き倒れるかも知れない運動である。その報酬はたゞ無産階級の解放があるのみだ。この困難に辟易し、この忍耐に怖じけづ、人々は、プロレタリア文藝運動の行列を去つて、紅白の漫幕でめぐらした運動會場へ

赴くがい。そこにはすぐに喝采してくれる群集がある。おまけに子女もゐる。

プロレタリア文藝運動は氣質や趣味で決せられるものでない。況んや一時の酔興でこれにまじらるべきものではない。前途は險難だ。光明の此方に闇黒と茨と鐵條網がある。しかもあまり榮へない運動だ。決勝力をもたない、一種の補助運動、牽制運動と言つてもいい位だ。この運動にたずさはる人はあまりに自己の役割を過大視してはならない。

しかし大衆運動の一成員、壓迫されたもの、運動の一員として、たとい隅つこの一部分でも、或は前衛隊の一員でもを分担することは光輝あることではないか。特に後者たり得るならばこれ以上生き甲斐のある仕事はまたとないではないか。

(一九二二年五月)

中西氏に答ふ

前掲『文藝運動と労働運動』の一文句に對して中西伊之助氏が『種蒔く人』八月號で猛烈に批難された。これはそれに対する回答である。讀者の中にも同じやうな疑問をもたれる人があるかも知れぬと思つて轉載する。

大抵の非難には黙つてゐられる程僕も修業をつんできた。『文藝運動と労働運動』に對する中西氏の批評も相手が別人なら有難くお受けしてをいて差支へないのである。併し相手が日本に於ける労働運動の先覺者であり、プロレタリア運動の一闘士であり多くの點に於て僕等の先覺と信じて疑はざる中西伊之助氏であつて、しかも、氏の批評が、或は懇々として教へ、或は嚴然として叱正し、或は浩然として歎息され、凡ゆる點に於て親切を極め、好意に満ちたものである以上、そして最後にあまりに甚だしい誤解である以上、おまけに編輯者からわざわざ僕の手許まで中西氏の原稿が廻送された以上一言挨拶して中西氏の誤解を解く責任があるやうに感じられる。

問題の文句は『社會主義運動の中に働くことの嫌ひなごろつきや食ひ倒しがまじりこむと同じやうに——』といふ一句である。僕は急いで原稿を書くので、これまでにあとから訂正したくなるやうな不用意な文句を書いたことは屢々ある。併し、この一節は今でも少しも訂正する必要を感じない。文字通りの意味で今なほさう信じてゐるのである。ところが誰が讀んでもわかりきつた平明の文句の中から、中西氏は一ダースばかりのすばらしい概念をひつぱり出された。何にもない袖の中から一ダースも卵を出して見せる手品師のやうに。

中西氏はまづ、この文句を讀んで『何といふブルジョア的な口吻だらう！』と概括的な第一矢を投げつけ、次に僕(平林)が『ブルジョアの眼光をもつて今の社會運動を見て』あるものと断定し、『僕等(中西氏)プロレタリアの感情からすれば到底そんな輕薄な概念で片づけてしまふに忍びない』と自らの立場を表明され、一轉して、僕の例の文句を『失業労働者』『餓死か破壊か二中一を選ばなければならない悲しい人々』を

意味するのだと獨斷し、この獨斷を僕に無雜作になすりつけて、なすりつけられた泥人形の『平林』に向つて『平林君は果してその人々を指してごろつきと言ひ食ひ倒しといふ理由を見出すことが出来るか?』と色を作してきめつけられる。かくして泥人形の『平林』は參つた。生きた人間の平林は參らぬ代りに自分が『泥人形』でないといふことをわざ／＼辯明する『責任』を脊負はされた。僕が、中西氏のいふやうに『現實』を見損つて『輕薄な概念』に走つたか、或は中西氏が周章て、千慮の一失の誤解をやられたかは何人の判斷にでも僕はまかせる。

實を言ふと辯明するよりもあの文章をもう一度讀み直していただくだけの努力をおしまれなかつたら誤解は氷釋する筈だ。僕は『失業労働者』と『ごろつき』とを混同する程の血迷ひ方は決してしなかつたつもりだ。中西氏自身で勝手に二つの概念を結びつけて、こん度は自分でこしらへた假想敵に向つて批難を浴せかけられるのだ。しかしおのぞみなら辯明する。第一に無論あの文句は『失業労働者』をさしてゐるの

ではない。こんなわかりきつた誤解をしたりそれに答へたりするのは吾々の恥辱だ。失業労働者は誰でも知つてゐる通り、資本主義経済組織に必然的に伴ふ犠牲だ。しかも失業によりて資本主義社会のからくりが最も直接にわかるから、失業者の中に最も革命的分子が生ずることさへあり得る。その失業者が社会主義運動の障害になるといふやうな理屈を創造する程僕の頭は獨創的でない。

次にあの文句は中西氏の批難するやうに概念ではなく事實を指してゐるのである。不幸にして社会主義者と名乗つてゐる不良青年組や、何ぞ言へば日本刀を振り廻すやうな連中のあることを吾々は耳にしてゐる。しかもその背後にかさま師がひそんでゐる場合のあることも聞いてゐる。それが爲めに健全なる労働大衆に社会主義が如何に誤解され、従つて社会主義運動が障害されたかも知つてゐる。殊に社会主義運動に古い歴史を有する歐米諸國ではこの種のいかさま者が風向次第で社会主義者になつたり、反動派の手先になつたりした例がいくらかもある。マルクスが『頼み手のない辯護

士、患者の無い醫者、田舎新聞のもぐり記者其他々々と』これ等いかさま社会主義者の合成分子を指摘したのでそのことは知れる。

『現實』を尊ぶ中西氏が僕の文句を『現實』のまゝに解釋し、文字通り『ごろつき、食ひ倒し』と解釋されたら、こんな下らん論争は起らずにすんだらう。ところが氏はどうしたものが雪と墨、鷲と鳥ほど似もつかぬ『失業労働者』といふ『概念』を『ごろつき』といふ現實の中から引つぱり出したゝめに、無益に憤慨し、切齒し、罵言し憐憫する必要が起り、ひいて『泥人形』ならぬ『現實』の僕自身もそのまきぞへを食ふべく餘儀なくされたのである。『概念』を排する中西氏が『概念』の俘となつたわけである。

併し勿論これは千慮の一失である。弘法にも筆の誤りがあるのだから神ならぬ中西氏に解釋の誤があるのは怪しむに足らぬ。しかもそれは僕に『プロレタリア運動の現實に接して貰ひたい』といふ親切あまつての誤解であるから僕は良心から感謝する。尙僕は實際直接労働運動に携はつたこともなく、またその能力も覺束ないから、その

點に關しては指導されんことを希望する。たゞ僕も『失業労働者』と『ころつき』との區別がつかん程血迷つてはゐないからその點は御安心が願ひたい。最後に同志中西氏の健在を祝つて妄言を擱く。(一九三二年七月)

都市問題と無産階級

無産階級にとつては凡ゆる問題の解決に先だつ當面の問題としてたゞ階級闘争があるのみである。何となれば都市計畫でも住宅問題でもそれが無産階級の立場から無産階級自身によりて解決される日があるまでは、殆んど無産階級の眞面目に考慮すべき問題とはならないからである。今日の社會は有産者のための社會である。凡ての決定權をもつてゐる者は有産者にかざられてゐる。如何に立派な都市計畫を無産者が提案してもそれが實現される爲には有産者の都市計畫となるより外に仕方がない。無産者は都市をもたない。住宅をもたない。もたないものゝ計畫に少しでも實現の可能性があるか。もたないものゝ發言に少しでも決定力があるか。無産階級は先づ決定權の獲得にむかつて進まなければならぬ。それまでは無産階級が凡ゆる改良計畫に参加する

ことは凡べて徒勞である。

エンゲルスは一八七二年に發表した住宅問題に關する著書に於て次の如く述べてゐる。

住宅問題はどうしたら解決できるか？ 近代の社會に於ては、此の問題は他のあらゆる社會問題と同じく、需要と供給とを徐々に均等することによりて解決される。けれども、この種の解決は、常に新しい問題を生む解決である。即ちそれは決して解決ではないのである。社會革命が如何にしてこの問題を解決するかは、單に時間的空間的の事情によるのみでなく、それよりも一層根本的な諸問題と關係してゐる。その中で最も重要な問題の一つは、都市と田園との差別を撤廢することである。吾々は今將來の社會の空想的建設案を考究してゐるのでないから、それを論ずるのは無益だ。たゞ確實なことが一つある。それは現今に於てさへも、大都市には住宅は十分にあるから、これを上手につかへば、實質上住宅難は優に救ふことができるといふことだ。勿論

これは、家屋を現在の家主から收奪して、それに現在家をもたぬ労働者や、狭い家屋に密集して群居してゐる労働者を住ませるやうにしての話である。而して、労働者が政治的權力を獲得するや否や、社會の利益に基くかゝる手段は、近代の國家がやつてゐる他の一切の收奪及び徵發と同様に容易に實行されるだらう。』

無産階級によりて徵收された家屋は誰のものになるかといふと、ブルードン派の社會改革案によると労働者が新たにその持ち主となるのであるが、エンゲルスによるとそれは社會の共有になるのである。尤も過渡期に於ては一定の家賃を廢止するわけにはゆかぬが、しかし家賃は個人的所有主に支拂はれるのではなくして社會或は無産階級國家に支拂はれるのである。(以上レーニンの國家論による)

無産階級には家屋も都市もない。故にその都市計畫は、先づ都市を少數の特權階級資本家の手から解放することではなければならぬ。そして無産階級が自己の都市をもつことである。でなくば如何なる都市計畫も無産階級にとつては無關係である。

近世都市は資本の集中の結果として生じた商品交換の中心地である。無産階級の社會に於ては本來の意味——即ち剩餘價值と結びついた所の私有資本はなくなる。さうなると射利、投機、一言にして言へば商業を目的として都會に集まる人間はなくなるだらう。一切の社會的設備が行き渡り、農業は工業化され、地方の不便は餘程の程度まで取り除かれるから、都會に密集する必要はなくなるだらう。中央都市と地方都市との聯絡、都市と村落との聯絡が密接になるから都會に居住する必要は減するだらう。以上及びその他の政治上經濟上の理由で都市と田園との今日の如き區別は徐々に廢止されてゆくのは當然と見ねばならぬ。

過渡期に於ける無産階級都市の見本が見たいならモスコウ及びペテログラードを見ろがいゝ。もつと進んだ段階に於ける無産階級都市を知るためには想像力によらねばならぬ。

私はユートピア的都市の鳥瞰圖をスタッツする興味はもたぬが、將來の無産階級都市の大まかな特色だけなら想像される。

無産階級都市には賣買がなくなるだらう。今日の都市は商品交換の舞臺である。即ち商業のための都市である。無産階級の都市には商業の必要はなくなる。従つて街頭に軒を並べて競争しあつてゐる私人の商店は消滅するだらう。必需品の分配機關としては各處に大規模の貯藏所が設けられ、そこで簡単に敏速に分配が行はれるだらう。消費者は代金を支拂つたり、値切つたりする手数が省けるから、それだけの時間を生産なり運動なり娛樂なり讀書なりに費やすことができるだらう。

無産階級都市には貧民窟と、個人の大邸宅とは見られなくなるだらう。資本主義社會の遺物たる大邸宅は或は取りこはされたり、或は社會の共有として、何かの用途にあてられるだらう。同時に貧民窟は貧民がなくなるから消滅するのは當然である。無産階級の社會秩序に於ては貧乏が輕減されたり、所得が平均されたりするのはなく、それらのものがなくなるのである。従つて市中を歩いても今日のやうに錦の着物

をきた人のそばにぼろを着てゐる人がゐるやうな光景は見られないだらう。

無産階級都市には遊廓や淫賣婦がなくなるだらう。それは婦人は男子と同じやうに働くことが出来るからだ。動き得ない婦人も社會が養つてくれるからだ。男女の關係が正しくなつて、婦人は男子の所有物でなくなるからだ。即ち男子に隸屬しなければ婦人が生活のできないやうな社會制度がなくなるからだ。而して最後に制度の變革は男女間の新道徳を樹立するからだ。

無産階級都市にはあらゆる種類の罪惡が激減するだらう。それは罪惡の原因がのぞかれるからだ。今日の都市はあらゆる罪惡の巢窟であり、墮落の門であると云はれてゐるし、實際またさうであるが、將來の無産階級の都市ではそんな言葉は無意味以上ではなくなるだらう。勿論罪惡が絶滅する氣遣ひはないが。

無産階級都市では病人や怪我人が減るだらう。それは衛生設備が行きわたり、交通が整理されるからだ。

無産階級都市にはその理想状態に於ては軍隊、警察、監獄等がなくなるだらう。それは戦争や犯罪が消滅或は激減するからだ。勿論、ある種の警察制度は存置されても今日の如く支配階級の壓制機關ではあり得ない。何となればその時には既に階級が消滅してゐるからだ。

以上は消極的方面の特色であるが、積極的方面には更に著しい變化が見られるだらう。

無産階級都市には學校は非常に擴張されるだらう。それは凡ての人に就學の機會が與へられ、知識の獨占が消滅し、凡ての人に知識が重んぜられるからだ。圖書館も著しく増設擴張されるだらう。それは凡ての人が書物を讀む力と暇とをもつてゐるからだ。

無産階級都市に於ては美術館、博物館等が増設擴張され、その觀覽者數も激増するだらう。それは一般民衆の知識と趣味のレヴェルが甚しく向上してゐるからだ。そし

て観覧する暇ができるからだ。

無産階級都市には病院が完備擴張されるだらう。それは病人が増加する爲ではなく病人は減少するけれども、人命が尊ばれ、そして凡ての人が醫療を受ける機会を與へられてゐるからだ。今日のやうに人間の生命が金銭で左右されないからだ。

無産階級都市に於ては大規模な食堂、育兒園、クラブ等が設けられるだらう。それは婦人が家庭労働から解放され、臺所の仕事が社會の手に移されるからだ。

無産階級都市では科學の應用が大規模になつて、電氣化が普及し、從來人間の手で行はれてゐた少からぬ仕事は機械の手で行はれるやうになり、動力は極めて豊富になるだらう。それは利潤を目的とする資本家的企業がやんで、社會全體の利益を目的とする共產制度の産業がこれに代るからだ。その結果産業は企業家の自由競争に放任されないで一定の計畫の下に行はれるから労働時間は著しく減少するにも拘はらず、生産は是に反比例して増加するだらう。

劇場、オペラ、音樂會等が擴張されると同時に、美術展覽會、學術講演會等はさかんに開かれ、民衆の教化の爲めには凡ゆる努力が拂はれるだらう。これに反して無論食はせもの、山師的興業はあとを絶つだらう。

道路、交通、通信、住宅等は非常に改良されるだらう。それは如何なる事業も少數の特權階級のためでなく、社會全體のために行はれるからだ。

以上私の述べたところは勿論想像にすぎない。しかも想像の一部分に過ぎない。けれども此の想像の少くも大部分は單なる机上の空想ではなく、さうなるべき必然性が今日の社會そのもの、中にひそんでゐるのである。

無産階級はブルジョアの都市計畫、搾取を便利にするための都市計畫、道路の一角をいじくりまはしたり、家屋を動かして見たり、貧民や労働者にごみだらけの一隅を與へて大きな顔をしたり、ほんの義理だてに貧民窟を一寸ばかり改良したり、營養不足の食堂を二つや三つ増設して見たり、片手落ちの職業紹介所をこしらへたり、其の

他／＼の所有者階級にのみ関係のある都市計畫に決して満足するものでない。どうにもやりくりがつかなくなつて溺れる者が藁をつかんだからといつて、溺れる者が藁で満足してゐると速断してはならぬ。成る程無産者は生活費が一錢でも安くなり、少しでも日常生活が便利になれば、さうでないよりは歓迎する。けれども都市プロレタリアは如何なる都市計畫にも、如何なる改良案にも満足しないで結局階級闘争に幕進するだらう。何となれば無産階級にとつては一切の問題と同じく都市問題の解決もそれより外には方法がないからだ。無産階級は彼等自身の手で計畫することの出来るまでの何等の改良計畫をも知らぬ。(一九三二年六月)

社會思潮の新傾向

一

官僚も政黨も、學者も文人も、資本家も労働運動家も、社會主義者も文化主義者も今日の社會は全力を擧げて労働問題の解決に従つてゐる。今日の社會の大部分の問題の解決が、一労働問題の解決にかかつてゐることが益々明白になつて來た。

解決の提案は千差萬別であつたが、その根本に於ては階級闘争を主張するかこれを否定するかにかかつてゐた。即ち一方官僚政黨資本家及び小ブルジョア階級に屬する「思想家」は人類精神の最も普遍的な要素を抽出して「階級調和」の觀念をつくりあげ、この夢のやうな「觀念」の上に具體的の生活を打ちたてやうと宣傳した。此等の人々の主張は概ね公平であつた。彼等は常に資本家の横暴を戒め、温情を以て労働者を遇す

るやう警告すると同時に、労働者に向つてもその「專制的」態度を戒め、飽まで合法的に進退し、労働運動の悪化せざらんことを不斷に警告することを忘れなかつた。忘れてゐたのはたゞ階級對立、階級闘争といふ事實だけであつた。

ところが少數の社會主義者は階級調和が一片の空想に過ぎないことを知つてゐた。資本家の温情も寛大も、労働者の勤勉も従順も到底抹殺することの出来ない階級對立を明白に認めた。そこで勢ひその議論も片手落ちとなつた。彼等は多數民衆の爲めに少數の支配階級に對して敵對した。公然とその綱領を發表することは出来なかつたが反對派の矛盾を指摘することにより、歴史或は外國の事實を示すことによりてほゞその結論のありかを明かにした。

これが大正十年度の社會問題に對する思想家側の態度であつた。その何れが正しかつたかを定める権利をもつた人は一人もない。それを定めるものは事實でなければならぬ。

二

戦時中の好況時代について、資本主義社會につきもの、定期的不況期が昨年以來本年へかけて各種の産業に襲來して來た。これに對して資本家側はどういふ態度をとつたか？ 麻生久氏は「足尾銅山労働争議顛末」(解放六月號所載)にかう述べてゐる。

不景氣の襲來は最近に於て深酷なる打撃を各鑛山に與へつゝある。既に休山の止むなきに至つたものも僅少でない。未だ休山に至らないものも極端なる事業の縮小をなしてゐる。賃銀の低下したことは言ふを俟たない。近來炭山に於ては採炭制限を盟約し、労働者の馘首を一齊に行ふべきを宣してゐる。……………

昨年以來鑛山に於ける失業者の數は莫大なる數に達し、其中九州は殊に甚しく、其數既に數萬と稱せられ、常磐東北地方これに次ぎ、北海道も亦最近に至つて馘首の報道は頻々として傳へられてゐる。年將に暮れんとする昨冬、雪に埋もれた

る北陸の一鑛山は突如として休山し、労働者は十圓にも足らざる涙金に泣く／＼山を逐はれた。九州の七福炭鑛に於て賃銀不拂のため數千の家族が饑餓に迫つたのはつい最近のことである。

これはその一例に過ぎないが、凡ての産業にはその打撃の大小により、これと同様の現象が起つた。この現象はとりも直さず資本家自ら、その温情と寛大をもつてしても階級調和の夢想を實現し得ないことを雄辯に自白したものであつた。階級對立は資本家個々人の温情と寛大とが如何ともすべからざる事實であることを證明したものであつた。

労働者側もまたこれと同じことを證明した。麻生氏によれば「未だ労働組合の存せざるところに於ては資本家はあらゆる手段を以て其暴虐を恣まゝにする。労働条件の低下は勿論である。馘首と雖も何等はゞかるところはない。先頃九州の某炭山に於て月末賃銀仕拂に當つて其袋を開けば二割以上の値下になつてゐたといふことである。

團結なき労働者は斯くの如き横暴に對して何等反抗すべき力を有しない。「こゝには労働者にとつて階級調和の道は塞がれてゐる。労働者が如何に手をさしのべても資本家はそれを握らない。資本家的生産を維持する爲めには、どうしても握れないのである。こゝに階級調和は夢消して階級闘争の萌芽が見られる。

三

ところで團結ある労働者はどうであつたか？ 團結なき労働者と資本家との間に於ては労働者が無力の爲に階級闘争は萌芽だけにとゞまるが、前者が團結した場合には公然たる紛れもない階級闘争が行はれる。最近一二年同盟罷業は愈々大規模に愈々眞劍になつて來た。本年に入つてからでも主なるものを舉げて大阪電燈の罷業、藤永田の罷業、足尾の罷業、神戸三菱、川崎の罷業、横濱船渠の罷業等があり石川島の罷業は本文草稿中(十一月十二日)に至つても月餘に亙つてまだ繼續してゐる。これ等の

罷業の特徴は山川均氏によれば「労働者が過去二三年の好景氣時代に獲得した多少の地歩を擁護しようとする、防衛の闘ひである。」即ち不景氣に基く資本家の挑戦に對する労働者階級の應戰であつた。尤もそれだから手出しをした資本家が悪いといふのではない。究極に於ては資本家が悪いので、労働者が悪いのでもなく、兩者を對立させてゐる資本家的生産組織が不合理なのである。

これ等の同盟罷業は何を齎したか？ 山川均氏によれば「この二三年間に於ける日本の労働運動が不幸にして何物をも遺さなかつたにしても尙労働者の間に、抹殺することの出來ぬ、階級的の自覺を遺したことは争はれぬ。」賃銀奴隸制の廢止の爲めには合法的労働組合の容認や、議會労働黨の設立よりも、何よりも先づ賃銀奴隸自らの階級的自覺が必要である。資本家の温情や、小ブルジョアのセンチメンタリズムにくじけてしまはない階級的自覺が必要である。此の意味に於て「昨今の労働争議は、最近兩三年間に於ける日本の労働運動の決算と見る時に、その裡には重大な意味がある」

のである。(此項鈎括弧内は山川均「梅雨期の日本」——改造七月號所載——による。)

四

そこで今少し具體的に之等の同盟罷業の特徴を述べて見る。先づ罷業の骨子たる労働者側の要求條件を見ると單なる個人對個人の問題が階級對階級の闘争に一步を進めたことがわかる。即ち足尾坑夫聯合會の要求條件には

第一條、團結權ヲ認め爾後労働條件ノ維持及び改善ハ本組合ト協議決定ナスノ件とあり、三菱内燃機工の提出した第一回歎願書には

第一條、横斷組合ノ存在ヲ認ムルコト

第二條、團體交渉權ヲ確認サレタキコト

とある。次いで三菱造船部工作課職工の提出した歎願條件には

一、工場委員制ヲ採用サレタキコト

一、他ノ労働組合ニ加入スルノ自由ヲ認メラレタキコト

とある。この團體交渉権及び工場委員制度等の要求はたとひその効果が少く、これが成功してもたゞ資本家をして一步退いて背水の陣にやらしむるだけのものであるとしても、少くも労働者の階級意識を示してゐるものであることは争はれない。

果せるかな資本家は一步退却した。工場委員制度は住友其の他の工場では實施され三菱でも追つて實施する旨發表された。無論これは資本家にとつては労働者の應戦を喰ひとめるための前哨線であり偵察隊たるに他ならぬのだ。資本家の地位を却つて堅固にする爲めの道具に過ぎないのだ。

ところが、十月初旬に開かれた友愛會大會に上程された提案を見ると少くも此の組合員の階級的自覺は、資本家側の策戦を觀破してゐたことを示してゐる。工場委員制度實施案は一度び提出されたが討議に入るに先つて提出者から撤回された。これは工場委員制度といふ如きものゝ無益を労働者が自覺したからに相違なからう。次に、團

體交渉権に至つてはこれに反對の決議が提出された。これは討議の結果否決されたが提出者にも反對者にも階級的自覺に基いた相當の理由があつた。其の他稍や間接的提案としては友愛會の主張項目より普通選舉の項目を削除すべしとの提案があつたこと並びに軍備縮小の提案が葬られたこと等はブルジョア・デモクラシー或はブルジョアの正義に對するプロレタリアの態度を明白に示したものであつた。

五

翻つて資本家は、此の労働者の階級的自覺に對して如何なる態度をとつたか？ 彼等はその實力に應じて或る點については退却して萬全の策戦を講じ、或る點については全然高壓的態度に出た。政府は警察と軍隊とを資本家の爲めに動員し、主なる罷業は殆んど同胞の流血を見ずにはすまなかつた。労働者は今日の政府が彼等自身の政府ではなくて資本家の政府であることを經驗した。此の、労働者自身による階級調和不

可能の裏書きと、政府がブルジョアのものであるといふ經驗とは本年度の労働運動の
二大收穫であつた。それは將來の労働運動に何等かの方向と色彩を與へることになる
であらう。

かゝる勞資戰の酣なる時にあたつてブルジョアとビュロークラシーとの間には醜惡
なるデコンポジションが行はれてゐた。東京瓦斯、阿片問題、滿鐵等の疑獄はたまた
ま彼等内部の醜狀の一端を國民の面前に暴露したものであつた。

都市労働者は何處の國に於てもプロレタリア階級解放運動の前衛にたつものである
が、工場に於ける勞資の對立はまた農村に於ける地主對小作の關係とつながつてゐる
從來地主の爲めに搾取を恣まにされてゐた全國數百萬の小作人も都市労働者に刺戟
されて最近漸く階級的自覺を喚び起した。本年に至つて農村問題は双方階級具眼者の
熱心な注意を喚起した。アジテーターも爲政者も、經濟學者も社會主義者も一齊に農
村に注意を集中した。此の問題が如何に展開するかは併し今後に残されてゐる。

六

さて階級闘争を事實として認めると(事實を否定する術を吾々は知らないから)それ
は今後如何なる道程をとつて進むか? 吾々は大膽な豫言を敢てする勇氣はない。ほ
ゞ明白な一事は今日のまゝで進めば資本家はまだゞ退却するだらう。それは特別の
事情がない限り資本家的産業の發達に正比例するだらう。八時間制は實施されるだら
う。普通選舉も實施されるだらう。労働組合も容認され、労働者の待遇は絶對的には
(不景氣の襲來の場合を除けば)益々改善されてゆくだらう。それにも拘はらず相對的
には労働者の境遇は益々みじめになり、資本家は益々資本を集積してゆくだらう。換
言すれば資本家の社會政策に拘はず階級對立は益々明白となり階級闘争は益々熾烈
となるだらう。

エンゲルスは「千八百四十五年の英國と千八百八十五年の英國」といふ論文の中で

次の如く述べてゐる。

「かつては凡ゆる工業家の妖怪のやうに恐れた工場法は進んで工場主から提出されるばかりか更に擴張されて一切の産業に適用されることゝなつた。従來惡魔の發明したものゝやうに思はれてゐた労働組合は今では全く合法的な制度として、且つ労働者の間に健全な經濟學説を流布せしめる有效な手段として重寶がられ、保護されてゐる。千八百四十八年まではこれ以上不埒なものはないかつたストライキさへも今では時によると妙だといふことがわかつて來た云々」

かうなると階級調和論者にはもはや問題は残らなくなる筈のだが、英國の産業は最近に至つても階級調和を實現するどころか一年に二三度は必ず大暗礁に打つゝかることを年中行事としてゐる。日本は英國の轍をふむかどうか？ それは今年以後の事實に解決せしめるが一番安全だ。これだけの豫言でも「特別の事情なくして今日のまゝに進めば」といふ假定なしには出來ない。否これだけの假定を設けても時代と産業

婦人運動の目標

一

吾々は自分で選擇して世の中に生れて來たものではありません。吾々が生れる前から、吾々の意志とは獨立無關係に社會はできあがつてゐて、吾々の意志には頓着なしに進化して來たのであります。この社會の中へ吾々は凡べて生み落されるのであります。して見ると、世の中の現象には、吾々の意志ではどうにもかうにもならない部分があるといふことになります。それを私は社會制度或は社會的生活條件とこゝで名づけておきます。

併しながら社會的生活條件は自然法則のやうに人間の力で如何ともすることのできぬものではない。それは太古から今日まで少しも變化せず繼續して來てゐるものでは

ない。長い歴史の間に人間がこしらへて来たもので従来も變化して来たものであるし將來も變化させることの出来るものであります。これを別の言葉で言ふと、吾々人間は吾々の意志から獨立した一定の社會制度の下に生きることを餘儀なくされる。併しながら、この制度の變革は吾々の努力に俟つより外にないと、かういふ一見矛盾した關係になつてゐるのであります。

ところで男女關係はどうでありますか。吾々は自分の意志でもつて選擇して、最も合理的だと思ふ男女關係を創造してゆくのかといふとさうではない。吾々の自由意志ではどうもかうもならない部分が、吾々の生れない先から吾々を待ち受けてゐる。法律ではちやんと婚姻法や相続法がきめてある。男女關係に關する無數の習慣や道德がちやんと出來あがつてゐて、吾々の自由意志ははじめから新しい男女關係を創造してゆくことはできず、たゞ既成の男女關係に對して働らきかけていくことだけしかできなくなつてゐる。たとへば、吾々は賣淫といふやうなことは道德上からも衛生上から

も望ましいことゝは思はぬ。けれどもそれは吾々の意志には無頓着に今日の社會に行はれてゐるのであります。して見ると男女關係の中には社會制度と密接に關係してゐる部分があることは争ふべからざる事實であります。

二

現在の男女關係は誰が考へても不合理な、不平等なものであります。即ちそれは男子に非常な優越的地位を與へ、婦人の位置はまことにみじめなものとなつてゐる。言ひかへると男子の專制の上に今日の男女關係は打ち樹てられてゐる。然らばこの男子の專制といふ事實は今日の社會に住んでゐる個人々々の男子の意志によりて生じたものか、それともこれは個々人の自由意志から獨立した社會制度に基くものであるか。先づ第一に私はこの問題から考へて見やうと思ひます。

わかりやすい爲めにこゝに二人の男女を想像して見ます。生れ落ちた當りは男女の

區別は殆んどないやうなものだから今日では別に男兒に比べて女兒が虐待されるといふことはない。けれども生れた時ですら男兒は親の家系、財産を相続するあとゝりだといふので多少の手心が加へられることはあります。だん／＼と物心がついて小學校へ行き出すやうになると、男女の位置には次第に懸隔が生じて来る。長い間の歴史によりて、既に生れた時から女兒は一般に男子よりも體格がよくない所へ、男子は外へ出て活潑な遊びができるが女兒は大きくなればなる程家の中へ閉ぢこめられる。さうして家が貧しい場合には色々な勞役を課せられる。おまけに言葉から動作から着物の着方から歩きぶりから、何から何まで『女らしく』することを強要される。身體の發育はかうして益々わるくなつて来る。男子には學問が必要だけれども女子には學問はいらぬといふ因襲的道德のために、學校へゆくやうになつても女兒は思ふやうに勉強することが出来ない。そして家計が苦しい場合には眞つ先に女兒は學校をよして家事の手傳をさせられる。それから女中奉公や女工にも出される。こんな風で男女間の知力

の懸隔も次第に著しくなつて来る。小學校時代には男女の知力に左程顯著な相違はないが、中學校の生徒と女學校の生徒とを比べて見るとそこにはもはや著しい相違がある。それは或る學者が言ふやうに單なる生理的原因のみによるものではない。長い間に積み重ねられた社會制度、習慣の結果が少からぬ原因であることは公平な觀察者には一目でわかることでもあります。

女學校を出るともう婦人には教育の必要はないとされてゐる。それ以上の婦人教育機關はごく少ない。これは婦人は社會生活の單位となつてゐないからである。早晚父の家を離れて新しい専制者夫の家へ行かなければならぬからであります。勿論對等の關係で行くのではなく、夫の從屬物として行くのであります。男子は父の家をつぎ、或はそれから獨立した一つの家をもつてゐる。婦人は何物をもつたないで父の家から引き離されて夫の家へ行き、夫に服従するのである。だから婦人には學問はいらぬといふことになつてゐるのであります。かくの如く學問も技術も體力も劣つた婦人はも

はいかに獨立しやうと思つても獨立できない。そこで萬一保護者を失ふと婦人は生計の道がなくなる。さうなると生活するためにはひどい勞役に服するか或は醜業婦になるかより他には婦人の働き場所は今の社會にはないといふことになつてゐるのであります。統計によつて見ると醜業婦の中で、孤兒、寡婦等のやうな保護者を失つた婦人、及び貧困といふことがその原因の大部分を占めてゐるのであります。而て貧困といふことも亦天然の現象ではなくて社會制度から生れたものでありますから、これを以つて見ても男子の專制、婦人の奴隸的境遇といふことが大部分社會制度の罪であることがわかるのであります。今日の社會はまともでは生活することのできない婦人を收容するために賣淫制度を有し、おまけにこの制度を維持するために、わざと婦人を肉體的にも精神的にも劣等にして男子にたよらねば生活できないやうにしてゐるのであると言つても過言ではないのであります。

三

或る時代の社會制度を最も明瞭に表現し、これを各人の意志に強制する機關は法律であります。私は法律のことはよくわかりませんが、ごく大まかな點を見ましても今日の法律は男子の社會的優越を維持し、婦人を壓制するために設けられたものであることがわかります。その代表的なものが婚姻法と相続法とであります。ジョン・スチユアート・ミルといふ人は今日の結婚は法律によりて認められた奴隸制度だと申しました。今日の法律によりますると社會生活の單位は家庭となつてをります。ところで家族の支配權を握つてゐるものは男子であります。封建社會が亡びて資本家的社會が生まれてから人民の權利が非常に認められてきました。法律の前では凡ての人が平等となりました。フランス革命の時には有名な人權の宣言といふものが發布されて自由平等の原則が法律上で認められました。けれどもこれ等は凡て男子に關することであ

ります。今日の社會で權利と言ひますとその大本となつてゐるのが財産を所有する權利であります。ところがその財産は男子が占有してゐる。従つて他の諸々の權利は悉く男子の特權となつてゐるのであります。國家の重要な官吏になることも、議員に選舉されることも、軍人や辯護士や裁判官になることも、議員を選舉することも今日は男子のみの特權であります。かくの如く司法、行政、立法の凡ゆる方面に於て婦人は權利を奪はれてゐる。婦人は國家の政治立法に何等の代表者をも出すことが出来な。かやうな仕組になつてゐる社會で婦人が重せられ、婦人の利益が保護されることにはあり得ないのであります。たとへば離婚の場合にしても、離婚の權利をもつてゐるものは男子である。よし相方合意の離婚が行はれるにしましても男子は家をもち、財産をもつてゐる上に、將來生計して行く能力と機會とをもつてゐるが、婦人はその何れをもたない。そこで夫の家を出れば婦人は兩親の家へ厄介になり、世間の不合理な誹謗を一身にひきうけなければならぬのです。更に兩親の家へ歸へることのでき

ない場合には前に申し上げたやうに貞操を賣つて墮落するか、生命をすてるか、過激な割に合はない勞役に服するより外に生活の道はないのであります。こんな風に婦人は習慣、道徳、慣例によりて知力的精神的に壓迫されてゐる上に、國家の法律によりて壓迫されてゐるのであります。

四

此のやうな壓迫は一體正しいものでありませうか。當然なものでありませうか。婦人の自業自得で何とも致し方のないものでありませうか。若しこれが自然の法則であつて人間の力でどうにもできないものであるとすればお氣の毒ながら婦人は現在の地位にあきらめて甘んじてゐなければならぬのです。ところが事實はさうではない。男女は互に異つたものであるけれども何れも社會の進化に缺くべからざるものである。どちらも缺くべからざるものであるとすればそこに輕重はない。従つて差別を設ける

のは不合理だといふことになります。勿論今日の婦人は男子に比較して明かに知力に於ても體力に於ても劣つてゐることは事實です。併しそれは今日の婦人の責任ではなくて長い間の男子の専制によりてさうなつたのであるといふことは、古代社會の研究によりて證明されました。男子の支配が確立しない以前、私有財産と父長制度とはじまらない以前の古代共產社會では男女は凡ゆる意味に於て全く平等だつたのであります。今日のやうに男女が不平等になり、男子が婦人に對して優越的地位を占めるやうになつたのは生理的原因や、先天的理由による當然のことではなくて、社會制度による不自然な、不正當な現象であるといふことは疑問の餘地がないのであります。

然らば一旦かやうな社會制度が出来上つた以上は今日の男女關係は未來永劫侵すことのできないものかと申しまするとさうではない。それではどうしたらいいかといふと、結局に於てはこの制度を變へる以外に婦人が今日の奴隸狀態から解放される道はないのであります。一人々々の婦人が父兄や夫に向つて男子の専制を攻撃し、その不

合理を攻めて見たところがどうも致し方がない。國家の法律によりて武装された數千年來の慣習は個人の方で到底動かすことができない。これは團體的の運動となるより外に道はない。そこで集合的の婦人解放運動が今日男子専制の社會を漸次脅かして來てゐるのであります。

今日の社會には婦人の外に今一つの古來から不當な壓迫を受けて來てゐる階級があります。それは勞働無産階級であります。この二つの人々は境遇が似てゐるばかりではなくその運動の目標も共通してゐる。

私は今のところさしあたり、これ以上に有效な婦人解放の道を知らぬのであります。婦人が今

日の制度に満足してゐるといふことは美德でも何でもありません。却つて不正義、不平等を是認するか、或はこれを見て見ないふりをしてあきらめる怯懦かのいづれかで。今日の婦人は正しく生きる爲めにも、自己の利益をまもるためにも婦人解放の運動に積極的に投じなければなりません。 (一九二二年八月)

無産婦人の運動へ

男子と女子との間に生理的の區別があることは醫學博士の議論をまつまでもなく誰にでもわかることである。けれども、この生理的相違——例へば女子の脳髓が何瓦輕いとか、女子の乳房や骨盤が發達してゐるとか其の他これに類似した細目をいくら列擧して見たところで、女子は男子の所有物でなければならぬとか男子の奴隸でなければならぬとかいふ結論がひとりでに生れて來るものではない。この種の議論は女子の現在の奴隸的境遇、若しくはかゝる境遇に女子を陥れてゐるところの現存制度を維持し、擁護する目的のために、ことさらに、支配階級によりて構へられた議論である。

舊思想家や御用學者は男子と女子との間に生理的或は心理的區別があることさへ證明すれば、それで女子が男子に隷屬すべき理由の證明にもなるのだと考へてゐる。併

しそれは過去數千年の婦人壓制の歴史をわざと勘定にいれない支配者の論理であり、征服者の論理である。吾々は他の論理を採擇しなければならぬ。

今日の如き婦人運動、婦人の社會的解放運動は生理上の問題とは全然無關係であるそれは純然たる制度の問題である。生理的には何等の相違のない無産者が有産者に支配されてゐる事實を見てもそのことは明瞭である。而して實際古代共產社會では男女の位置は平等だつたのだ。吾々が支配者と被支配者との關係を先天的生理の問題や知能の問題として論ずるのは、既に支配者の戰術に一步を譲つたものである。労働者と官吏とに民法の試験をして見て、官吏の方が答案が上出来であつたら、労働者は『先天的』に官吏より知能の劣等なものだから、労働者が官吏に支配されるのは當然であるといふのが支配階級の論理である。女子は子供を生むために骨盤が大きく、乳房が大きいのだから女子は子さへ生んで育てればいゝといふのが征服者の論理である。吾々はそんなごまかしの議論に耳をかたむけてはならぬ。

男女間に優劣がないといふやうな主張は無意味だ。優劣を比較するには標準がなければならぬ。體力とか知力とか何か標準がなければならぬ。そして標準によりては男女間に著しい優劣のあるものがある。併しこの種の優劣の多くは先天的のものではなくて制度によりて生じたのだ。従つて支配の是認になる代りに支配の否認になる。それはこの種の優劣は支配の廢止によりてはじめてなくなるからだ。女子を男子の奴隷としてゐるのはかゝる優劣關係ではなく、父長的家族制度と私有財産とを根幹とする今日の社會秩序そのものなのだ。この秩序の埒内で婦人解放の實をあげんとするのは、資本主義社會の内部で労働者を解放せんとするのと同じく、到底成功する見込みのない、自分の影とかけつくらをするやうなものである。普通選舉で労働者の自由が買へぬと同じやうに婦人參政權の獲得で婦人の自由は買へない。婦人運動は一部の婦人がブルジョア男子の權利の分前を要求することではなくてブルジョア權利の廢止を目標とせねばならぬ。こゝに於て婦人運動と労働運動とは、新しき社會秩序を眼ざし

て進まねばならぬといふ點に於て共通點がある。眞の婦人運動が無産婦人の運動でなければならず、更に無産階級運動そのものでなければならぬ理由はこゝにある。……
……、……のみが婦人問題を解決する實際上の力をもつてゐるのである。而して………する可能性を有するものは……のみである。しかも新しい秩序は今日の秩序から必然に生れんとしてゐるのだ。

無産階級の社會秩序即ちコミユニズムの社會に於ては家家の團欒が破壊されると非難する人がある。併しながら大部分の家庭からその『團欒』を破壊したものは資本主義である。資本主義社會に於ける多數者即ちプロレタリアは團欒を楽しむべき家庭をもたぬ。家内の仕事を工場に吸収して、封建時代の家庭を破壊したのは資本主義の仕事だ。ブルジョア制度は家族制度の上にとつ。

アレキサンドラ・コロンタイは『共產主義と家庭』といふパンフレットに於て資本主義の家庭破壊の徑路を次の如く語つてゐる。

『——吾々の見なれてゐるやうな家庭に於ては家計を維持し妻子を養つてゆくものは夫である。妻は家事並に子女の養育に従つてゐる。けれども、既に過去一世紀間に、資本主義が優勢で、工場及び、労働者を使役する其の他の資本家的企業の數が急速に増加してゐる凡ての國に於ては、かゝる慣習的の家庭の形態は次第に破壊されて行つた。家庭の慣習及び道德は周圍の一般生活條件と同時に形成されつゝある。急激に家庭の慣習を變化するにあづかつて最も力のあつたものは疑ひもなく、賃傭労働婦人の一般的増加であつた。以前には男子ばかりが家庭の支持者であると考へられてゐた。ところが五六十年以來吾々はロシアに於て(他の國ではもつと早くから)資本家制度が婦人をして家庭外、戸外の仕事を求めるべく餘儀なくしたことを見た。

男子の賃銀は家族の必要を充すには不十分なので妻も賃銀労働をせねばならなくな

り、母も工場事務所の門を叩かねばならなくなつた。而して労働婦人職業婦人の数は年と共に増加した。世界大戦前の統計によるとヨーロッパ及びアメリカの賃銀労働婦人の数は約六百萬に上り、戦時中にはこの数は頗る激増した。これ等婦人の大半は既婚者であるが、彼等の家庭生活がどんなものであるかは容易に推察できる——妻と母は屋外へ一日八時間——往復時間を入れると十時間労働に出てゐる家庭生活だ！家族は必然的に等閑視される。子女は母親の世話をうけずに成長し、危険な街路へ出て一日の大部分を暮すのだ。——資本主義社會に於ては、婦人は三重の重荷を脊負はされてゐる。即ち男子と同じやうに働き、夫に事へ、子女の世話をしなければならぬのだ！』

これが、資本主義社會に於ける無産者の家庭なのだ。これがその破壊を惜しむに値ひする家庭だらうか。ブルジョアジイは、反動的國粹論者と聲を合せて美しき家族制度の保存を云々する。しかしながら『美しき家族制度』や團樂を樂しむべき『家庭』はブルジョアのみの専有物だ。プロレタリアには舊い意味の家庭がない。それを壊した

のは資本主義そのものに外ならぬのだ。

新しい家族關係、新しい男女關係は、一般的の新しい社會秩序と同様に今日の社會秩序から必然に生れるのである。それは復古的のものではなくて前進的のものである。資本主義によりて取りのぞかれたセンチメンタルな被物で家庭を再び包むのではなくして、新しい基礎の上に社會生活を築きあげるのである。新しい社會に於ては古い意味の家庭は古い諸制度と同様にもう必要でなくなる。それどころか却つて障害になるのである。

此の新しい社會秩序に於て婦人は如何なる地位を占めるか、婦人の境遇に如何なる變化が起るか。

先づ第一に資本主義社會では一戸毎に別々に行はれてゐた臺所の仕事が主婦の手から社會の手に移される。労働婦人は僅かばかりの餘暇を面倒な臺所仕事にさかなくともすむやうになる。洗濯だとか針仕事だとかいふこま／＼した仕事も同様に社會の手

で行はれるやうになる。これだけでも非常な時間の經濟だ。これまで百人の主婦をわすらはしてゐた仕事が一十人足らずの手でできるやうになる。これは今日の社會のカフェや料理店や公衆食堂で吾々が現に目撃してゐる所だ。只だ今日では金持ちの人だけしか浴することの出来ない恩典が新しい秩序の下では凡ての人に及ぼされるといふだけだ。

次に子女の養育が社會の手に移される。これも左程驚くにあたらない。今日の資本主義社會に於ても、子女の教育は學校で行はれてゐる。新しい秩序はこれに一步を進めるだけのことだ。

次に男女の社會的地位は全く平等になる。それは父長制度、私有財産制度の廢止と共にこれに基く男女間の不平等がのぞかれるからだ。妻の絶對無權利の服従を基礎とする夫婦關係は、双方共に自由獨立な、對等の權利と義務とを有する夫婦關係に置きかへられる。勞農ロシアの婚姻法や離婚法は既にこのことを實證してゐる。今日では

詩的空想としてのみ描かれてゐる自由戀愛が新しい社會では現實の男女關係となるのだ。

要するに、……………は今日の社會の一切の不合理的をとりぞき、眞に人類全體の幸福を保障するものである。自由も平等も正義も愛も此の無産階級の社會秩序に於てのみ吾々は現實のものとして語り得るのである。婦人問題の解決は即ちこの新しい社會秩序の樹立に外ならぬ。婦人運動の目標はこの……………に外ならぬ。

(一九二二年六月)

婦人の享樂的傾向に就いて

或る民族、或る國民、或る階級の衰頹期にはその社會の綱紀が弛み、將來に對する人々の希望が消失して、努力の感じがなくなり、一世をあげて自暴自棄的の刹那生活に没頭するやうになる。かういふ時代の特色は享樂的傾向を帯びる。

ローマの滅亡期や、平安朝、室町時代の享樂的、頹廢的風潮はどんな簡単な史書を讀んでもわかることである。それで私はこれは省略して先づ今日の平民時代のすぐ前の時代、即ち貴族時代の衰頹期の享樂的傾向を一瞥して、現代の傾向を理解する一助にしようと思ふ。

封建時代、貴族時代の没落を劃するものは日本では明治維新であり、西洋ではフランス革命時代にその典型を見ることが出来る、明治維新の前期に、まだ新しい平民の

勢力が大部分地下に眠つてゐた時、貴族の間にどんな風潮が流れてゐたか。次に竹越三又くの名文によりてそれを紹介しやうと思ふ。

『斯氏て江戸は恰かも權勢富貴の海となりしかば、幕府の士人漸く此に漂ふの人となり、貞享元祿(紀元二千三百五十年)の頃に至りては人を斬り身を護るの刀劍、今は黄金を鏤めて人に誇るの具となり、劍を執り銃を取るの手は、今は三味線を習ふの手となり、士太夫縮緬の覆面頭巾を被りて道を行き、小袖の裏を紅にして風に飄らしめ、或は端歌淨瑠璃を習ふて公會の席に謠ひ、或は茶の湯、插花の堪能に誇り、甚しきは位ある士太夫にして妓婦と情死するものあるに至り、一身、死生の道を往來し、刀劍馬蹄にかけて天下を取り、四方の諸侯をして風を聞て震ひ驚かしめたる三河豪傑の子孫、今は驕惰に習ふて馬に跨る能はざる者ある至り、慶長以來の貨幣半ば、元祿年間に海外に飛び去れり。

人心を發揮すべき學問も、今は詞章の一事に偏し、氣魄あるものは、藉て以てその

不平を寫すの具となし、卑屈なるものは資つて以て、上長の權勢を頌するの具となし、その詞章を卑しむるものも、また訓話の一方に偏し、楓橋夜泊の詩を解するに三年の歲月を費し、「日新又日新」の句を解するに一年の力を極めたる儒者あり、經世實用の學、蕩然として地を拂つて去れり。人心を清潔ならしむべき宗教も今は腐敗の極頂に達し、俳優にして身を變じて寺院の主座となり、高貴の婦人を誑惑して淫樂を貪るあり、美少年を寺院に養ふて男色に耽るあり、江戸の町々に軒を並べたる男色店の好得意は御殿女中と僧侶とその大部を占め、頰頰を抱えて遊里に入り、極樂を發見せりと戯るゝ高僧あるに至れり。』……(新日本史一〇——一二頁)

これは封建社會が爛熟して、もはや未來に發展する力を失つたので、支配階級の内部に崩壊作用が行はれ、自暴自棄に流れ、たゞ現在の生活を享樂しやうとするやうになつた結果である。三百年前にその精銳を誇つた三河武士の末路は實に絶望的刹那主義に墮落し、噴火山上の舊社會の澱を嘗めて滅亡を待つ以外には何も出來なかつたの

である。その時に薩摩隼人を前衛とするブルジョアはその脚の下から起き上つて來たのだ。

このことは大革命前のフランスに於て更に顯著である。ルイ十四世時代を頂點とする貴族文明はルイ十五世時代になつて恐しい急速度で崩壊をはじめていつた。箕作元八氏の『第十八世紀佛蘭西文化史』には當時の享樂的傾向が甚だ詳細に記述してある。次にサロン生活に關する記事の一部を抜萃してをく。

「サロンの享樂的生活の犠牲となつて頽廢して行つたものは何であるかと言ふと、實に總ての人が活動の源泉とする家庭生活そのものに他ならなかつたのである……従つて夫婦でありながら互に口をきくひまもないといふやうな不自然が生じ、妻は夫に冷淡であり夫は妻に無關心となつた。夫婦既に斯くの如くであるから親子の間も亦同斷であつたのは固よりのことである。……夫婦の關係が前述の如く甚だ冷淡になつて來た必然の結果として婦人の貞操も堅固でなくなり、従つて男子の素行

亦非常に亂れて來た

………サロン生活は多くの人々に接する所から交際は益々巧みになり、會話は愈々洗練されて圓轉滑晚の妙味を發揮し、殊に婦人に對しては表面極めて丁寧親切の最善を盡したが、實際は一人の婦人を何處までも保護せんとする中世騎士的の同情はまるでなく、却つて婦人を玩び、其の弱點に乗じて煩悶せしめ、其間に一種の快樂を見出さんとする弊風を生じた。併しながら婦人の方でも亦交際に慣れてくると左様なことは百も承知二百も合點の上で、表面には不斷の愛嬌を湛へつゝ、却つて攻勢的態度をとつて男子を惱殺させるといふ勢を示し、まるで世界が遊冶郎と娼婦

とで充滿されたかの如き奇觀を呈した』(第十八世紀佛蘭西文化史七八—八二頁)

所が支配階級が斯くの如く有頂天になつて享樂生活にふけつてゐた間に、彼等の知らぬ所で革命の形勢は熟してゐた。そこで箕作博士の言によると『マルエー、バイイの如き當時の社交界の花形は、革命の最中には全く途方に暮れて手を拱いてゐたのである、之に反して、革命の氣勢に乗じて斬然として頭角を現はし、一時は革命時代に靜穩状態を現出せしめたミラボーの如きに到つては當初餘りサロン等へ出入せぬ白面の一青年に過ぎなかつたのである』『サロン生活に親しむ人々は、大抵自分達の交際する社會のことだけしか知らず、丁度温室に育つた草花のやうに外界に不斷の風波あるを知らずして世は永却の春だとのみ考へてゐた』のである。『然るに何ぞ計らん平民階級下層階級の間には絶えざる誅求や冤罪があり、不平怨恨の觀念は將に爆發せんとする狀況であつた』のである。

私が徳川末期の日本と十八世紀のフランスに於ける享樂的傾向を長々と語つたのは

それが今日の場合に非常に酷似してゐるからに外ならぬ。私は今日の享樂的傾向は決して婦人に限られたものではなくて男女に共通の現象であると考へる。しかもそれは今日に急にはじまつた偶然の出來事ではなくて、長い間に、徐々に醸成されて來た必然の傾向であると思ふ。

今日の平民即ちブルジョアの社會がその發達の絶頂に達した時、既に人々の心から今日の社會に對する希望が消え失せたのである。未來にはもはや光明が見えなくなつたのである。ブルジョア社會の初期には自由民權が叫ばれて、布衣にして宰相になる希望もあつたし、天秤棒から百萬長者になる希望もあつた。それと反對にうか／＼してゐると後進に追ひ越されるといふ心配もあつた。一言でいふと人々の生きてゐる社會が新鮮で、刺戟に富んでゐた。明治二三十年代の言論を見ると國民精神が緊張して凡ての人が未來の光明を翹望してゐたことが一見してわかる。福知源一郎、竹越三又、徳富蘇峯等の當年の言論はそれを代表したものであつた。國民的統一、國力充實、海

外發展などが全國民の思想を統一し『成功』といふ言葉があらゆる階級の合言葉となつた。雑誌『成功』や『實業の日本』などが一攫千金の的の記事によりて讀者を喜ばせたのもこの時代であつた。押川春浪や江見水蔭の冒險談が少青年に喜ばれたのもこの時代であつた。

ところが明治四十年代から大正年代へかけて、ブルジョア社會の幻影は漸く消え初めた。宰相になることも、百萬長者になることもたゞ『可能』であるだけで、實際は貧乏人は一生貧乏で終るのぞみの方が遙かに強くなつた。おまけに一旦得た地位も財産も何かの拍子で浮雲のやうに飛び散らされることも明白となつて來た。資本家といふ少數の特權階級が生じた、めに、以前には國民がすべて、自分の國家、自分の社會であると思つてゐたものが、自分には殆んど關係のない、自分の力ではどうにもならない少數者の社會であり、國家であると思ふやうになつて來た。そこで政治家や經世家が國家を云々し、國民を云々してもそれが切實に自分の問題とは考へられなくなつた

數日前の朝日新聞の夕刊に『以前には外交の失敗の度に民衆が霞ヶ關の鐵柵に押し寄せたが今では國民は知らん顔をしてゐる』といふやうなことが書いてあつたが、これなどは國民が國家の政治に無關心になつて來たことを示してゐる。獨りそれは政治に限つた現象ではなく、凡ゆる部門に於て今日の社會は希望と光明と刺戟とを奪はれてゐる。進んで行くべきはつきりとした目標がない。無關心と軽い絶望とが閉ぢこめてゐる。かういふ時代に人心が享樂に奔り、刹那の歡樂を求めるのは自然の勢ひである。そしてこの享樂的傾向が最もよく外部に目立つのは婦人である。婦人の享樂的傾向は先づ第一に服裝に現はれる。實生活の緊張を缺き、目標を失ひ、努力感を失つた婦人は常に服裝の美に専念する。それは魂と魂との接觸に絶望し、精神生活の空虚を充す手段を知らない人の最後の手段である。その最も典型的なものが賣笑婦である。彼女等を取り圍むものは凡て虚偽であり、陥穽である。そこで魂の接觸の代りに形式だけの取引が行はれる。一つの指環に數千金を投じ、一つの頸飾に數萬金を投じて空虚な

心を満さうとする貴婦人令嬢の心理もそれと同じである。併し私はそんなことで空虚な心の満された女を一人も聞いたことがない。眞面目な男子が服装の美によりて女に戀をしたといふ話も聞いたことがない。

外部に於ける享樂的傾向は同時に内心の弛緩頹廢である。男子が家庭生活にあきて遊里の巷に形骸的快樂を追ふ社會に婦人の堅固な貞操を望むことは出來ぬ。社會がまだ若くて未來が光明に充ち、現在が刺戟に溢れてゐる時代には此の不自然も維持されたであらうが、今日のやうに制度が完成爛熟して行き詰つた時代には猶ほ更それを望むことが不可能である。そこで『貴人』の内室が運轉手とかけおちしたり、百萬長者の令夫人が若い情夫のもとにはしるといふやうな現象が頻々として起つて來る。

或る『自由思想家』はこれをもつて『婦人の自覺』と言ひ『婦人解放』の曙光と言つた。併しながら、この『婦人の自覺』や『婦人の解放』が自己の脚下から起つたとしたら、これ等の『自由思想家』は何といふだらう。

風紀の頹廢や、享樂的生活の追求や、上流社會の『悲劇』や、ダンスの流行や其の他其他の現象は舊社會の崩壞現象以外の何物でもない。婦人の『自覺』や『解放』をそこに求むるのは幻影の中の實體を探すと同じことである。吾々は今日華族の家庭生活の紊亂や、富豪の家庭の内幕をよく耳にする。警視廳の不良少年、不良少女狩りは年中行事の一つとなつてゐる。それと同時に『善良』な大人共の間にも瀆職事件、收賄事件の頻々たること今日が最も甚だしい。大規模な公共事業でその背後に『秘密』のひそんでゐないものはない。この種の傾向は資本主義が大規模で、その爛熟振りも甚しいアメリカなどでは更に顯著だと見えて、アプトン・シンクレアの『ブラッス・チエツキ』を見ると今日の支配階級の腐敗が極めて赤裸々に描いてある。

政府の役人は聲を潤して綱紀の肅正を唱へてゐる。節約の必要を叫んでゐる。道學者、宗教家、教育家は聲を揃へて國民道德の危機を叫んでゐる。併し、綱紀が弛廢し國民道德が危機に瀕したのは彼等の聲が權威を失つたからに外ならぬ。現實の社會は

行き詰つてゐるのに、彼等が心にもない二十年前のメツキのはげた『理想』や『道德』で國民を動かさうと思つてもさうはいかぬ。婦人の享樂的傾向は、絶望と自暴自棄とに陥つた今日の社會そのまゝの反映である。それは悲しむべき現象でもなければ喜ぶべき現象でもない。個々の婦人が全責任を脊負ふべき道德問題でもなければ、婦人解放の出發點でもない。腐敗したものに必ず起る崩壊作用である。

古い社會の維持者達は未來を失つて享樂生活に投ずる。その中へ新興階級男女の犠牲者が捲込まれてゆくことは事實だが、それと同時に大多數の男女にとつては『享樂的傾向』などは無關係である。大多數の人々には節約の餘裕がないと同様に享樂の餘裕もない。彼等の現在の生活は生活のために充實し、未來に對しては希望が充ちてゐる。彼等はこれまで一度も使つたことのない力を貯へてゐる。それが歴史を創造する力であることには、彼等自身さへも恐らく氣がつかぬであらう。私は華族の家庭紊亂や、富豪の内幕や、官吏の瀆職や、百萬長者の脱税や、商人の暴利や、不良少年の跋

扈をそんなに慨嘆はしない。それと同時に婦人の『享樂的傾向』をもあまり悲しまぬ。むしろそれは新しい歴史の創造を促進する意味に於ては歓迎すべきであるかも知れぬ。平和な秋の夜に、浮世の波風を知らぬ、暇でこまる貴顯の男女が一堂に集つたとしたら、そこで肉感的なダンスでもはじまるのは當然である。その内に風が起り雨が降り初める。暴風雨の兆候が現はれる。併し、歡樂に狂う中の男女にはそんな事はわからぬ。彼等にとつては、此のダンスは歡樂のダンスであるだらう。併し氣象學者の眼から見れば、否學者でなくともこの舞踏場の外からこれを見れば、それは彼等が自らを葬ぶダンス・マカールブルでなくて何であらう。腐敗した社會は自ら崩壊しながら自滅してゆく。新しい社會を構成する『勢力』はそんなものをおしんだり、嘆いたりしてはをられぬ。況んやそんな現象に『自由』や『解放』の幻影を息がいて喜んでゐる暇などはない。崩壊は崩壊であり、頽廢は頽廢である。頽廢の後には新しいものが生れるとしても頽廢それ自身は新しいものではない。婦人の享樂的傾向や風紀の荒廢の中に『自

由への道』を求めやうとする人があるなら、それは間違ひである。これは『自滅への道』に外ならぬ。(一九二二年十月)

青年團の社會的任務

舊い社會勢力は衰滅に瀕してゐる。新しい社會勢力がその廢墟から起き上らうとしてゐる、これが今日の社會の一般的形勢である。そこで私は未來は青年の時代であるといふ言葉を今日特に高調したのである。勿論これは今日に限つたことではなく何時の時代もさうであるが、今日では此の言葉は特別の、社會的の意味をもつてゐるのである。個人的に言へば、老人は肉體的にも精神的にも既に使命をはたしてしまひ、活動期を過ぎた人々であるが、青年は鬱勃たる活動力を内部に貯へてゐて、將にそれを外部に向つて發揮せんとしてゐる人々である。これから活動期に入らんとしてゐる人々である。それだから既に使命をはたしてしまつた老人にはもはや大した事業は期待できぬ。まだ活動力を少しもつかはずにもつてゐる青年にのみ將來の活動が期待で

さる。これが、未來は青年の時代であるといふ言葉の普通の意味である。けれどもこれだけの意味でならば、何も、特に今日、聲を大きくして青年諸君に訴へる必要はない。何故かといふと老人が退いて若いものがこれに代るのはあたりまへのことで太古から今日まで變りのない自然の法則である。人間に限らず動物でも蟲けらでもその通りのことをやつてゐる。親父が隠居して息子があとをついで家を維持してゆくのは、蠶が卵を生んで卵が孵化して桑を食つて成長して繭をつくり、蛹となり蛾となつて再び卵を生むのと同じことである。ところが未來は青年の時代であるといふ言葉には、特に今日、これとは別の重大な意味が含まれてゐる。元來老人は今日の社會の凡ゆる偏見に養はれて來た人である。従つて今日の社會の實際の形勢を批判する力を失つてゐる。たとへば今日の社會には懷手をして遊んでゐても贅澤な生活の出來る人もあれば、額に汗して働いても食ふや食はずの人がある。無能な人間が社會の重要な地位を占めてゐるかと思ふと、立派な才幹をもつてゐながら何もできない境遇にある人があ

る。然るに今日の社會の偏見に養はれた大人達には、どうしてこんな不自然な現象が起るかさわからない。一方には遊んで食える人間があり、他方には稼いでも貧乏してゐる人間があるのは何故かといふ理由にたち入つて批判する力がない。それは彼等が社會といふものはかういふものだ、元來貧乏人と金持ちとがあるべきものだといふ風に詮らめてしまつてゐるからである。この詮めの思想を今日の大人の頭から追ひ出すことは餘程難かしい。彼等は三十年なり、四十年なり今日の社會に生きてゐて、今日の社會は有難い社會である、汽車や汽船や電信電話ができて便利になつた結構な時代であるといふ風に教へられて來てゐるからそれ以上にたち入つて批評する力がないのである。ところが青年はまだ現代の空氣を吸つてから日尙は浅い。従つて現代の偏見を受けてゐる程度が少い。そこで書物をよんだり、他人の説を聞いたり、現代の社會を冷靜に觀察したりすると、今日の社會組織がわかつて來るのぞみがある。即ち前の例で言ふと、何故金持ちは遊んでゐても贅澤ができるかといふと金持ちは財産をもつ

てゐる。この財産は今日の社會では資本の形をとつてゐる。資本はこれを運用すると利潤を生むものである。例へば土地といふ財産をもつてゐると、借地料、或は小作料といふものが上る。貨幣といふ財産をもつてゐれば、それを貯金したり他人に貸したりしてをけば、ひとりでに利子が生れる。又この貨幣をもつて工場を經營すると、生産物は本來の價値に更に新しい價値を附け加へて來る。商賣をはじめると口錢といふものが生れて來る。今日の金持ちは小判を椽の下へしまつておくやうなことはしない。銀行へ貯金するか、土地、工場、商品等の形にしてもつてゐるかどちらかである。即ち資本としてもつてゐる。そこで資本家は遊んでゐても他人をつかつて資本を運用しなへすれば利潤によつて贅澤ができる。おまけに今日の社會はこれ等の資本家に都合のいゝやうにできてゐる。資本はもちぐされに終る心配はない。どうしても有利な仕事がないければ銀行に預けてをけば銀行は決して斷る氣遣ひはない。ところが資本をもつてゐない人間は働かなければ贅澤どころか命をつなぐことすらできぬ。しかも働か

うと思つても職がなく働けないことすらある。それは今日の社會が財産をもたぬ無産者に都合のわるい仕組みにできてゐるからである。おまけに今日の社會組織もはじめの内は自由平等の原則に基いてゞきたものであるから、どんな無一文な人間でも手腕さへあれば成功できるといふ見込みがあつた。百姓の息子でも町人のせがれでも總理大臣にでも百萬長者にでもなれる見込みがあつた。ところが今日では自由も平等も形だけのものとなり、資本は少數の人の手に集つてゐるから平等はない。資本をもたぬものは賃銀の鎖にしばられてゐるから自由がない。どんな馬鹿息子でも資本さへもつてゐれば人を使つて威張つてをれるが、どんな才能をもつてゐても無産者では一代頭のある望みが殆どないと、かういふ風になつてゐることがわかつて來る。そこでかやうな社會組織は、たして、人間生活の向上、文明の進歩に有益な制度であるか或は有害な制度であるかといふ疑問が浮んで來る。この疑問は更に發展して、今日の社會組織よりも、つと合理的な、正しい組織はないかといふ風に進んで來る。こんな風

に現代の社會組織をたち入つて批判することのできる者は、現代の社會の偏見を比較的少くしか受けてゐない青年にのみ期待できる。故に私は此の大問題の實際的解決は青年諸君にまたねばならぬことを感ずるものである。これが未來は青年の時代であるといふ言葉の社會的意味である。

日の社會

……

……これがためには青年會は完全な自治團體となり、自己の信ずる所以外には何物の力にも動かされない獨立を獲得する必要がある。それには先づ青年會は自由獨立な會員相互の研究團體となり、凡ゆる偏見を離れて現代の政治、經濟、科學、藝術等を批評することの出来るやうにしなければならぬと同時に自由獨立な實行機關となりて、

青年自身の

判斷に従つて意義ある活動ができるるやうにしなければならぬ。ヤ

現代の社會組織の特色は、それが一般的普遍的であるといふ點である。資本主義制度は單に一地方や一府縣や一國の制度ではなく全世界の文明國に共通の制度である。そして資本主義は此の世界的性質のために、その發達の遲速に拘らず今日では國際資本主義として殆んど同一の段階に達してゐる。イギリスのやうに十九世紀の初めから資本主義の發達してゐる國も、日本のやうに明治の二十年頃になつてから資本主義の發達した國も、今日ではそれと孤立の發達を許さぬ。生産及び交換が世界的になつてゐる以上資本主義制度は今日では全世界を通じて

共通の特色、しかも末期の症狀を示してゐるのである。生産方法と財産制度とは互に衝突して人類の經濟生活を絶えず脅かし、生産は資本家の利潤獲得の競争に委ねられてそれ以外に何等の方針も組織もない無政府状態を呈し、品物を作りすぎても買ひ手が無い爲に、滞貨が倉庫に充滿して商業恐慌を起し、失業者の数は年と共に増加してゐる。さうなると小規模の資本家は倒れて資本は少數の資本家の手に集中し、階級闘争の緩衝地帯と見られてゐた中産階級の生活が動搖してくる。資本家の利益を擁護すべき筈の政府が社會政策に手をそめて、資本主義の順當な發達はねじまげられる。資本主義社會は今や土臺がぐらつき、屋臺骨がゆるんできてゐるのである。既に土臺がぐらつてゐる以上、經濟組織がぐらつてゐる以上、その上部の建築や建築の趣味がぐらつてくるのは當然である。資本主義社會の政治、法律、道德、教育、文學哲學、藝術、科學、宗教等一言で言へば資本主義社會の文化は、いづれもそれ自身の矛盾のために維持することができなくなつてゐるのである。

資本主義文化が従來の文化と異なる特色は自由、平等の原則が各方面に維持されてゐることである。ところが自由平等の原則は資本主義の勃興當時には成る程立派な社會生活の原則のやうに思はれた。地位門閥や位階に頓着なく、誰でも平等に法律の適用を受け、能力に應じて自由に他人と競争して鑛鐵王になることもできれば、新聞王になることも、石油王になることもできる様に思はれた。ところが生産機關が獨占され、資本が集中された結果、もはや資本家と資本をもたないものとの關係は事實上平等でなくなつた。資本家の自由は労働者にとりては拘束となつた。労働者の自由は資本家にとりては反抗となつた。そこで資本家はもはや大きな聲で自由平等を叫ぶわけにはゆかなくなつた。自由平等といふ言葉は絶對的意味を失てしまつた。實際に於ては有産者の自由平等と無産者の自由平等、資本家の自由平等と労働者の自由平等とが全然別のものであることが明かとなつてきた。従つて自由平等の原則になつたものを正義とすれば、資本をもつたものゝ正義と資本をもたぬ者の正義とは全然別のものとなつて來た。

つて來た。

政治は人民の幸福を増進し保護するものゝ筈であるが、

法律は凡ての人民の権利と

義務とを規定したものゝ筈であるが、法律の大部分は財産に關する法律である以上、これは財産をもつてゐる者、即ち資本家の権利を神聖化し、資本をもたぬ者に義務を強制するに過ぎないものとなつた。道徳は凡ての人の行爲の規範となり、指針となる筈であるが資本家が善とする行爲は無産者にとりては惡の行爲となつてゐる場合がある。

藝術は人間の

思想感情を文字、色彩、音響等で表現したものである筈だが、資本家の思想感情と無産者のそれとは同じものでない。そこで藝術も純一な内容をもつてゐないことになる。

科學は全人類の幸福を増進する爲めに應用せらるべき筈である。ところがそれは資本家の幸福、即ち利潤を搾取するためのみに應用されてゐる。鐵道や電信は誰のためにあるか、誰がつかふかを考へて見ればこのことはわかる。それは無産者にとつては幸福でなくて災ひである。宗教は凡ての人間に慰安を與へ安心立命させる筈のものである。ところが、南無阿彌陀佛とかアーメンとかいふ言葉一つで、資本家はその罪劫をほろぼすことができると同時に、無産者はこの同じ言葉によりて現實の不幸を帳消しにすることを強要される。

例をあげるときりが無いが、大體こんな風に資本主義社會の文化は凡ゆる部門に於て互に矛盾し衝突しあつてゐるのである。資本主義の勃興當時、人間生活を幸福にし、これを向上させたものは、今日では凡べて廢物となり、障害となつて、これに對抗する新しい文化が到る處に萌芽してゐるのである。而して死んだ正義に對して生きた正義を押し立て、死んだ自由に對して生きた自由を樹立するものは今日の制度によりて壓

迫されてゐる無産階級を措いて外にない。これが地方や國境や民族に關係なく、今日の文明國の社會に共通の事實である。

長野縣は元來階級對立の最も不明瞭な土地であるとのことである。大工場もなければ大地主もなく、凡ての人の社會的關係が比較的平等であつて、階級鬭爭の原因は餘程少ないとのことである。けれども長野縣人は今日の社會から孤立して生活してゐる

わけにはゆかぬ。いくら山の中へはいつて、自分で作ったものを自分で消費して暮してゐる自作農にしても、その人の着てゐる着物は既に自分の作ったものではなく、或は印度あたりの農夫の栽培した綿花を船舶労働者が日本へもつて来て、鐘が淵とか日清とかいふ紡績會社でつむぎ、これを染職工が染め、機織工が織り、これに劣らぬ手数を経て生産された針で縫つてはじめて農夫の身についてゐるのである。更に又紡績機械を動かす石炭は炭坑夫の労働によつて掘り出されたものであるといふ風に生産關係は限りなく社會全體に聯絡してゐる。その他農夫の使用する鋤一丁にしろ、食事に用ふる茶碗一つにしろこれを生産する爲めには凡ゆる種類の労働が含まれてゐるのである。かくの如く吾々が絶対に孤立して生活することが出来ない以上、吾々は吾々自身の孤立的幸福を求めるのは間違ひである。日向の山の中へとちもつて極樂村をつくりあげやうとしても、北アメリカの廣野の中に階級闘争を超越した理想境をつくらうとしても、今日ではそれは不可能であるのみならず無意味である。人類全體の幸福

以外に獨自の幸福を夢想することは今日の社會生活に於ては無意味であるのみでなく不道徳である。況んや信州が如何に樂天地であらうともそれは程度の問題であつて、冷靜に公平に考へて見れば資本主義の組織、資本の勢力は決して信州をおきざりにしてゐるわけではない。商品の存在する所、貨幣の存在する所、賣買の行はれてゐる所、そこには必らず社會的不正が行はれてゐる。一般の輿論によると信州は一般青年の教育の進んでゐる點に於て全國第一だとのことである。その點には吾々は日頃から甚深の敬意を拂つてゐる。たゞこの進んだ文化の中に資本家階級の偏見が含まれてゐないか、この點を冷靜に嚴密に批判して戴きたい。

附録 勞農ロシヤの文化(翻譯)

勞農ロシヤのオペラ

アーサー・ランソム

モスコーの市民は、前から演劇には熱心だが、今日では以前に比して此の熱心が減つてゐるといふよりも寧ろ増へてゐるやうに私は思つた。演劇學校が一つ設けられてゐて、舞臺に關する各種の問題の講座が開かれてゐる。演劇公報は一週に三度づゝ發行されそれには全劇場のプログラムや、演劇に關する時事論文が掲載されてゐる。私はストツクホルムで、モスコーの劇場は閉鎖されてゐるといふことを聞いた。次にあげるのは演劇公報から萃出した二月十三日と十四日(一九一九年)の兩日の上演目録の一部である。フランス革命の時に、フランスの觀客がどんなものを喜んだかを知るの
は興味があつたであらうやうに、私は今日モスコーでどんな出し物が人氣があるかを

記して見るのは徒勞ではないと思ふ。

国立大劇場、——リムスキー・コルサコフの『サドコ』。セイント・サエンスの『サムソンとデリラ』

国立小劇場、——オストロフスキーの『ベシエニイ・デンギ』。ゴリキーの『スタリク』。モスコフ藝術座、——ヂッケンスの『クリツケット・オン・ザ・ハース』。サルチコフ・シユチエドリンの『バツチンの死』。オペラ、——『セロ・ステパンチコ』。『コツペリア』。人民宮劇場、——ナブラウニクの『ツプロウスキー』。ルビンスタインの『悪魔』

ザモスクオレツキイ劇場、——オストロフスキーの『グロザ』。ゴリキーの『メシニチヤネ』。民衆劇場、——マーテルリンクの『聖アントニイの誘惑』

コミツサルツエウスカヤ劇場、——ヂッケンスの『クリスマス・カロール』。レミゾフの『呪はれた王子』

コルシユ劇場、——シエーキスピヤの『マッチ・アドウ・アバウト・ナツジング』。モ

リエールの『ル・ミザントロブ』。『ジヨルジュ・ダンダン』

演劇座、——メレジコウスキーの『アレキサンダー一世』。

演劇及び喜劇劇場、——ヂッケンスの『リツル・ドリツト』。『ルナチャルスキーの『國王の理髮師』

私は、国立大劇場へ、セイント・サエンスの『サムソンとデリラ』を見に行つた。

私はオーケストラのすぐ上のボックスに座を占めた。そこからは棧敷も舞臺もよく見えた。舞臺よりもどつちかと言ふと棧敷の方がよく見えた。しかしそれは寧ろ私の希望だところで、私は劇場を見に來たのであつた。

革命前と比べると大變な變りやうだ。頭の禿げた商人や、でぶ／＼肥つた寶石づめの妻君等のやうなモスコフの富豪連は見えない。それと共に夜會服や白シャツの前をはだけた姿も見えなくなつた。觀覽席は單調なふだん着ばかりだ。たゞ一つ眼立つのは貴賓席に陣取つてゐるトルコ婦人の小人数の一團で、この連中はトルコ風に頭か

ら肩まで白いショールを巻きつけてゐた。軍人も大分ゐた。また仕事歸りのついでらしい人達も大分あつた。灰色や鳶色の毛のジャケットを着たものも澤山ゐた。そして見物は色々なオーバーコートや被て座つてゐた、それは劇場の中が大變寒かつたからだ。(これは勿論、燃料の不足のためで、この状態がずっと続いて電燈がつけられぬやうになれば、一時劇場は閉鎖されるかも知れない。)オーケストラの連中の衣裳も様々だつた。大抵のオーケストラ部員は、戦争中軍樂隊にとめてゐたものらしく、今尚ほ帯緑カーキ色の軍服の上衣のまゝで、思ひ／＼の寄せ集めのズボンや半ズボンをつけてゐた。その他の部員は日常のとり／＼の服をつけてゐた。コンダクターだけはフロック・コートをつけて、宛然前時代の見本のやうに、粗末な服を着たオーケストラ部員からも、彼のうしろの特別席からも孤立して自分の場所に座つてゐた。

私は新しい制度になつてから、特別席にはどんな人達があるかを注意して觀察した。そして一般に演劇通は、階上の棧敷から土間へ移つたことを見た。以前に數コベック

のへそくり金をにぎつて、天井に近い棧敷でいゝ座席を争つてゐた連中が、今では、以前に晚餐の腹へらしのために来てゐる人のゐた座席にすわつてゐた。一人々々顔を見廻すに、此の晩には、腹へらしの必要がある程立派な晚餐を食べた人は殆んど居ないやうだつた。けれどもその熱心と來たら非常なもので、私は演技者の身になつたらこれ程演じ甲斐のある見物は殆んど想像できない位だつた。芝居通の連中からも階上の棧敷からも拍手が起つて來た。

オペラの演出そのものについては私は殆んど言ひたいことはない。たゞ粗末な服装と空腹とは別にオーケストラに變化を及ぼしてゐなかつたと言つておかう。舞妓のヘルツェルは此の見物に對しても、以前にブルジョアジイの前に踊つた時と同じやうに踊つた。私は自分の上着の襟をたてながら、今更ら、こんな寒さの中で踊つてゐる俳優の勇氣は凡ゆる喝采に値すると思つた。此の晩に、私は不思議にも時々自分がオペラを見てるのが嘘ではないかと思つた。それは多分、舞臺と、見すばらしい、それで

わて素養のある見物との對照が妙を極めてゐたからだと思ふ。ところが又時々舞臺と見物とが一つになつて不可分のものになつてしまつたやうに思はれることもあつた。何故かといふと、抑々『サムソンとデリラ』といふオペラそのものが一篇の革命詩であつて、これを實際生活に於てそれと同じやうなことを見て來た人々が演ずるのが素的には、まづつてゐたからである。サムソンがイスラエル人を煽動するところは、一九一七年のベトログラドの光景を思はせるところが多かつた。それから、最後にサムソンが、勝ち誇つた敵の前で寺院を破壊するところを見て、私はトロツキーが言つたといふ言葉を思ひ出した——『若し吾々が最後に出て行かねばならなかつたら、吾々は行きがけにドアをしめて、その響の反響で全世界を震撼させやう。』

其の後で、雪の中を家路へ歸る途中で、私は一人の軍人にも遇はなかつた。一年前には夜の十二時過ぎには、私のやうに用事があつて已むを得ず會合などに行かねばならぬ人の外には市中には人の影は見えなかつたのだ。市中にはたゞ見張りの歩哨が焚

火を圍んでゐるだけだつたのだ。今では市街には芝居歸りの歩行者が一ぱいで、十二ヶ月前には暗くなつてからモスコの街を歩くのは危険だつたことなどは忘れてしまつてゐるらしかつた。たしかにさうだつたのだ。革命はもう片附きかけてゐる。人々は「革命はあと一週間もつゞくだらうか、それとも二週間も？」といふやうな、昔の疑問とは別のことを考へてゐるのだ。『一九一九年のロシア』より

ロシア文學と革命

オーネイル

ロシア文學史上に於ける十九世紀は信仰の時代であつた。作家といふ作家は悉く以前には思想家であつた。作家はいづれも宗教的信仰と、社會哲學とをもつてゐて純文學上の問題は二の次へ廻された。トルストイやドストエフスキイの書物に出て來る男女は道德革命及び社會革命の豫言者となつてゐた。十九世紀の文學の特色なる現實主義と神祕主義との結合は、神と社會の終局の運命とに對する信仰のためで、その爲めに之等の文學は當時の思想及び政治に影響を及ぼしたのである。

一九〇六年の革命につゞいた宗教的懷疑と道德的恐慌と幻滅とのためにロシアの作家は彼等の樂觀的信仰の大部分を失ひ、ロシア文學はその獨創と力とを失つた。ロシ

ヤの作家の大部分は文學そのものを目的と考へるやうになつてきた。それと共にロシア文學には西歐文學の影響のあとが顯著になり、藝術のための藝術時代の第一期がはじまつた。クズニンの『緑色の鶯』やプニンの『サン・フランシスコ氏』やア・エヌ・トルストイの『眞つたゞ中に』等は此の派の傑作である。クープリンやコロレンコの短篇はこれ等の作家が、フランスの短篇小説の手法を學んだことを示してゐる。詩人ではクズニンの『アレキサンドリヤの歌』やアンナ・アクマトワ或はバリモントの戀愛詩に、ハイネや、ボードレイルや、近代のフランス詩人の影響を辿ることは困難でない。アレキサンダー・ブロツクの初期の詩にさへもその影響は伺はれる。

一九一七年までにロシア文學の古典時代は過ぎ去つてゐたことは明かである。作家のみに關する限りに於ては、ボリシエヰキが、文學者が擧つて革命を擁護しなかつたのを非難したのは少々見當違ひである。此等の文學者は十九世紀のロシア文學の巨匠、『革命の先驅者』とはわけがもがつてゐたのだ。ロシア文學の革命的傳統は既に死

んでゐたのだ。アンドレイフでさへも既に、人間の中の二つの要素の争闘を描いた『サウワ』といふ小説で人間性に絶望しはじめてゐたのだ。そこでアンドレイフはペトログラードの陸海軍の兵士が士官をネヴァ川の中へ突き落した時に野獸の勝利、文明の末路が來たと感じたのである。彼は暗黒絶望の餘生を送るべくフィンランドへ逃げてそこで『エス・オー・エス』といふロシア革命の恐ろしい非難文を書いたのである。

批評家兼小説家のメレジコフスキーとクープリンとは、個人主義者で、暴力の敵なので、どちらも現制度に對する勇敢な仇役となつた。ユデニツチ軍と共に逃亡したクープリンはエストニヤで反ボリシエヰキ新聞を發刊し、ヘルシングフォースやベルリンの新聞に現在のソヴイェット領袖連の散々な酷評をやつたことがある。メレジコフスキーの猛烈なボリシエヰズム攻撃は周知のことである。

けれども大多數のロシアの作家は革命を助けもしなければ、革命を攻撃もしなかつた。彼等が生きて創作をしてゐた舊時代はもう死んでしまひ、混沌たる新時代に對し

ては何等の確信もなく、筆をとるインスピレーションもたなかつた。ロシアに止まつてゐる文學者の多數は、新ロシアのためにはたらかうと思つてもはたらけない老人連であつた。彼等は新しい秩序に適應してゆくこともできず、創作に必要な心の平靜をも見出さなかつた。アルチバーシエフの如きは、全然喪心して、今ではモスコウでひどく貧困なくらしをしてゐる。また他の一派は、内亂の暴動に驚ろき悲しんで筆を取る元氣もなくなつてしまつた。ゴリキーなどもその一人だつた。西歐に亡命してゐる連中は、自己の著作や翻譯のヨーロッパ版を出してゐる。

ロシア文學の革命前派は、致命的打撃を受けてしまつた。併し、革命からは何が生れたか？ ロシアが現在通過しつゝある恐ろしい大變亂の中から新しい感激を見出した作家があるか？ 既に二人だけはロシア以外にもその名を知られた人がある。それは二人とも詩人で、故アレキサンダー・プロツクと、アンドレイ・ビエリイとだ。アレキサンダー・プロツクはロシア文學に二つの詩集を寄與した——ヨーロッパ文明に

對する素晴らしい挑戦たる『シ、ヤ人』と『十二人』とがそれである。『十二人』の中では一九一七年の十一月の雪の夜に、十二人の赤軍の兵士の前を『白薔薇の冠を載いてゐる眼に見えない、傷つけることもできない。イエス・キリストが歩いてゆく』アンドレイ・ビエリイは『キリストは起てり』と書いてゐる。彼のいふキリストは鐵道工夫の屍骸で、その傷ついた頭が自動車のランプの後光で白く光つて起き上るのである。

又、ラドガの農民、ニコライ・クリオノフがある。彼の『太陽をかゝぐる者の歌』は古代カレリヤ人のサガ物語の形式と風韻をそなへてゐる。又セルゲイ・エセニンの『イノニヤ』には、聖書の豫言者のやうな熱烈な諷刺がある。若い詩人達の收穫も一九一七年からぼつ／＼ある。最も過激なマヤコフスキイの『一億五千萬』といふ詩は、西歐の虛無主義ダダを思はせる。プロレットカルトの職工詩人（キリロフ、アレキサンドロウスキイ、オブラドウイツチ）の作品は大部分、工場及び凡ゆる労働用具を讚えた詩で、文學的見地よりも、歴史的見地から見て一層興味がある。

ロシア文學が將來どんなものになるかは誰にだつて豫想できない。プロツクやビエリーの作品——神祕主義と深遠な宗教的信仰——には前世紀の大文學を偲ばせるものが少なからずある。彼等及び彼等の周圍の若い詩人の群は既に彼等の新しい道德的、社會的贖罪の教義をつくつた。エセニンは叫んだ『新しき救世主は世界に來れり、吾々の信仰は吾々の力なり、吾々の眞理は吾々の内にあり』と。

ロシア文學は新時代に入らんとしてゐる。その結果はどうなるにしても、新時代の曙光が——凡ゆる世界的文學の復活の初期に於けるやうに——抒情詩人の中に見えて來たことは意味深いことである。(抄譯)

勞農ロシアの教育事業

ルナチヤルスキイ

ポリシエヰキ革命は、教育問題を重要なものにした。人民は政治的權力、經濟的獨立、及び教育の自由を獲得するために革命を起した。併し、たとひ一舉に獲得したとしても獲得するだけではまだ十分でない。これ等のものを組織せねばならぬ。

ルヴオフ政府やケレンスキイ政府を援助した知識階級は労働者と農民の政府をば援助しないで、これに對してサポタージユを行つた。それにも拘らず吾々は多くの有益な事業を行ふことができた。特に去る二月以來さうであつた。舊い教育制度は完全に廢止され、舊い教育者は解雇され、『教會とラテン語』とを基礎とする學科目は一掃され、男女の共學は實施された。

「新しい學校」はどうなるか？ それは支配階級が「劣等な」勞働者のために設けた學校には、少しでも似てゐるものではあり得ない。此の「階級」教育を破壊するために、吾々は一切の特權を排して「萬民平等の教育」の原則を採用しなければならぬ。人民は、商品生産の主要な要素であるから、従つて、「新しい學校」は必然的に、學生に働く準備をさせるものでなくてはならぬ。教師も亦働くことのできる人でなければならぬ。新しい學校の標語は『生きることは働くことである』といふ言葉でなければならぬ。だから吾々は『働く』といふことを吾々の教育制度の出發點とし、技術的知識の増進を目的とする吾々の教育の主要科目とする。吾々の學生は、自己を、社會の必要な一部分であると感じなければならぬ。青少年女達は、やがて大人の生産者になるやうに準備しなければならぬ。加之、吾々は教育の主要目的は、各種の人類文化を知ることであつて、この文化は又各種の精神的肉體的活動を含んでゐるものであるといふ事實を見逃してはならぬ。藝術教育及び體育は技術教育の完成の爲の附加物としなければならぬ。

ぬ。教育上の自由並びに學校「内」の自由も必要である。吾々は吾々の古い記念物を保存しなければならぬ。何となれば、これ等は吾々に、古いロシア文明をまのあたりに見せるものだからである。併しながら、それと同時に、吾々は、近代の世界の情緒と完全に接觸した藝術、吾々を更により以上の自由の擧得に導いてゆく藝術の出生を希望するものである。

労働者の自主教育

ルナチヤルスキイ

自らを解放せんとして戦つてゐるプロレタリアの文化は、明確な、争闘に基いた階級文化である。それはロマンチックである。そして内容が強烈である爲めに形式は整つてゐない。それは、その暴風的、悲劇的内容を、一定の完全な形式に仕上げる時間の餘裕がないからだ。

最高の發達階段に達した階級及び國民の文化は古典的である。自己を表現せんとして戦つてゐる階級はロマンチックである。而して此のロマンチズムは『スツルム、ウント、ドラング』の典型的特色を具へてゐる。衰頹期に向つてゐる階級は、これとは別種の、即ち幽鬱的、幻滅的、頹廢的なロマンチズムの形態をとる。

吾々は、社會主義文化とプロレタリア文化との間には本質的に非常な徑庭があるからと云つて兩者には密接な關係がないと速断してはならない。吾々は一つの理想を實現するためには鬭争も一つであることを念頭に置かねばならぬ。その理想とは即ち友愛と完全な自由の文化、人類を不具者にする個人主義の打破、ならびに過去に於ける様な強制的協同生活や單なる自己保存のために群居生活をする必要からの共同生活でなくて、自由に、自然に個性が伸びて個性を超越するやうになつた爲に生じた共同生活等である。

この理想の特性そのものが現代の世界的鬭争の眞只中に、明確な協同生活の諸形態を指し示す許りではない。これらの諸形態そのものが、元來、労働者を社會の中で最もよく組織され、最も好く團結された階級にさせた資本主義的世界秩序に於て労働階級の占有する特殊な地位から生じた直接の産物なのである。

如何なる理想といへどもその理想に縁のない土壤や種子からは芽をふき得ない。そ

ここでこの理想に到着するための方法や武器もこの理想そのものと調和してゐなければならぬ。故に吾々は惡戰苦鬭最中のプロレタリアから收穫の立派さや、形式の完美や勝ち誇れる力の十分な美しさ等を期待してはならない。これらのものは未來に自然と現はれるであらう。併し乍ら吾々は、プロレタリア文化はその奮闘、その勞苦、その受難のために、社會主義が勝利を占めた後の社會秩序に於ては恐らく考へも及ばぬ様な特性を帯びる様になるだらうと豫想すべき充分の理由を持つてゐる。

だが現在苦闘してゐるプロレタリアが實際に何等かの文化を持つてゐるかどうかと云ふ問題が起る。確かに持つてゐる。先づ第一にプロレタリアはマルクス主義に於いて本質的なものを全部持つてゐる——社會現象の精密な力強い研究、社會學と經濟學との基礎、哲學的世界觀の土臺等がそれだ。これ等のものに於てはプロレタリアは既に、人智の最も赫々たる成業と比する事の出来る財寶を所有してゐるのである。

且つ又、プロレタリアは多くの國に於ては政治方面に於て、顯著な組織力を證據立

てた。過去につくられた死物が未だに新しい生命をつかんでゐることは事實である。即ちブルジョアの議會主義や國家主義はプロレタリア諸政黨や又労働者インターナショナルの未熟な政治組織にさへも浸潤した。

危機は切迫してゐる。その疾患の未だ初期にあつた間に、左翼社會民主主義者が警告を發した疾患は今や毒威を恣まにしてゐる。實際多くの人はそれが將來致命的になるだらうと主張した。併しながら今となつても吾々はまだこの疾患は征服し利用することが出来るものでありそしてプロレタリアの政治團體はこの怖ろしい試練から前よりももつと力強くそしてもつと有力なものとなつて現はれるだらうと明言することが出来るのである。

經濟的闘争の方面では、労働組合運動の思想家や戦術家の理想が實現せられたと云ふことは出来ない。併し未だ不完全ではあるが敵の心をも味方の心をも惹きつける複雑な、美事な産業組合や職業組合の組織には讚嘆の聲を發せざるを得ない。

すべての労働階級の組織は異常な發展を遂げたのである。

スツットガルトのインターナショナル大會は労働組合運動に社會主義的理想を加味させた。そしてその時の有名な決議によつて、労働運動は社會黨の水準まで高められたのである。

コペンハーゲンの大會は事實上消費組合(?)運動についてこれと同じことをした。そしてヴェイエンナの大會ではプロレタリア文化の第四番目の形態即ち教育への闘争の極めて重大であることが強調されるであらうと期待すべき十分の理由があつた。

教育運動の發達は多數の社會黨の手になるプロレタリア大學の創立や、多くの學校や日曜學校が社會主義團體の手に移つた事や、科學上や文學上の社會主義俱樂部の益々増加した事でも判る。プロレタリア小學校の組織に關聯して兒童の幸福や少年の教育に注意が拂はれて來たために労働階級の家庭生活も變化するであらう。婦人がプロレタリアの臺所仕事やプロレタリアの保育仕事の奴隸となることはやむに相違ない。

後者は確かに今日では實際上なくなつてゐる。私は唯だ、社會主義プロレタリアが、理論上及び實際上に起して來た色々な問題の中で、最も重大なものに言及するだけに止める。

戦前には、スペンサーによつて確實に證據だてられた真理、即ちどんな立派な精神修養でも精緻な人間の感情の流露を伴はない限りは人間の意志に影響を與へる所は殆んどないといふ真理を悟得してゐた社會民主主義者は殆んどなかつたと言つてもいい。社會主義の精神を以て、労働者の兒童に、道徳的美的教育を與へることが最も必要なことである。

『プロレタリアの自主教育の事業を明瞭に理解しなければ吾々は何等の進歩をもなし得ぬだらう』と云つたロオザ・ルクセンブルグの言は實に至言である。プロレタリアの創造力を極めて明白に發揮するに相違ない啓蒙事業とも言ふべき方面は、從來比較的に閑却されてゐた。戦前にでさへもこの啓蒙的な自主教育の必要なことは非常に強

く感じられてゐた。そしてその方面に仕事が始まつてをつた。併し乍ら戦争は労働者に彼等の文化のこの重大な方面の缺けてゐたことをまざ／＼と見せた。故に過去四年間ヨーロッパに於て労働者の精力の大袈裟な浪費と破壊とが行はれたにも關はず、吾々は近き將來に於てこの方面に於ける労働階級の精力の偉大な恢復を見ることを期待することが出来る。

無産階級の文化

終り

16005

大正十二年一月十五日印刷
大正十二年一月廿五日發行

著者所有

著者

平林初之

輔

發行者

東京市牛込區早稻田鶴卷町四四三

角田作次郎

發行者

東京市牛込區早稻田鶴卷町四四三

久野庄之助

印刷者

東京市神田區豐島町三十九

村田新次郎

印刷所

東京市神田區豐島町三十九

博英堂印刷所

發行所

東京早

稻田泰文社

振替口座東京六〇六九三番

定價貳圓
送料十二錢



此書係由... 刊印... 凡欲購者... 請向... 函購... 每冊... 元... 郵費... 另加... 凡欲購者... 請向... 函購... 每冊... 元... 郵費... 另加...

青島市... 圖書館... 藏書... 號...

民國... 年... 月... 日

青島市... 圖書館... 藏書... 號...

民國... 年... 月... 日

